
日の本のお殿様

ミスター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日の本のお殿様

【Nコード】

N5665X

【作者名】

ミスター

【あらすじ】

様々な歴史上の偉人の逸話を面白くして紹介していきます。

勿論、史実です。

1話毎に完結。繋がってはいません。

ゆる〜くやっていきます。

後書きで解説したりします。

基本は戦国時代ですが、たま〜に違う時代も書きます。

一番槍 東北の独眼竜（前書き）

さあ始まりました「日の本のお殿様」！

記念すべき第一回目は伊達政宗です！

勿論、物語の内容は史実です。

一番槍 東北の独眼竜

「ん〜。この茶器は何て素晴らしいのだろう…。色、艶、形、そして重さ。何を取っても非の打ち所がない！素晴らしい過ぎる！」

こちらの殿様は伊達政宗。

独眼で有名。

今も根強い人気有り！

彼は茶器がとても気に入っている様子。

「素晴らしい！もっとよくこの茶器の姿を見てみようじゃないか！
ってうわっ！？」

うっかり手を滑らしてしまった。

しかし、持ち前の反射神経を駆使して見事キャッチ。

事なきを得た。

「ふ〜…。危ない…。私としたことが焦ってしまった…。
…。」

様子がおかしい政宗。

「というか…。茶器のぶんざいで私を焦らせやがって！ぶんざけるな！
貴様などこうしてやる！！」

バギーン！

政宗は5秒前まで素晴らしいと評価していた茶器を叩き割った…。

一番槍 東北の独眼竜（後書き）

伊達政宗は、素晴らしいと評価した茶器を、「自分を焦らせた」として叩き割った。

勿論自分が手を滑らせただけ。

茶器は悪くない！

凄まじいお殿様ですね…。

こんな感じで史実をちょっとした物語として紹介していきたいと思っています。

二番槍 歴史を変えた謀反人（前書き）

今回は明智光秀です。

一応小説なので、登場人物に「キャラ」を付けてみました。

あとがきで、史実について真面目に（？）書いていきます。

二番槍 歴史を変えた謀反人

「みんな集まった？今日は楽しい連歌会だ！」

ここは京の愛宕山^{あたご}。

明智光秀主催の連歌会が催されています。

「んじゃ、最初は俺ね！主催者だから！」

光秀は、連歌の第一句を読んだ。

「ときは今 あめが下知る 五月^{さつき}かな」

見事な一句。

今日は5月30日。

今は雨が降っている5月である。

見事。

それに続けと家臣も歌を読んだ。

さて、翌日。

「おみくじ引くぞー！」

張り切る光秀。

「何が出るかな？何が出るかな？つと…」

凶。

「ま、こんなこともあるよね！もう一回！」

家臣は「金魚すくいかつ！」と突っ込みたくなりながらも光秀を見ていた。

光秀はもう一度おみくじを引いた。

「何が出るかな？何が出るかな？よっ…！」

凶。

「…。ままま！稀によくある！もう一度だ！」

家臣も呆れ気味。

ここまで運が悪いやつも見たことない。

光秀はもう一度おみくじを引いた。

「…何が出るかな？…そらっ！」

凶。

家臣が地味に期待していた奇跡をやつてのけた。

「…。もう知らない！うわー！」

走ってどっか行ってしまった。

と、思ったら戻ってきた。

涙目で…。

「あのさ、君…。本能寺の堀ってどのくらい深いの？」

光秀が家臣に尋ねた。

「知りませんよ」

サラッと答えた家臣。

「そう…。うわー！」

またどっかに行ってしまった。

因みに、光秀が連歌会を開いたのは本能寺で「アレ」が起きる3日前のことでした。

二番槍 歴史を変えた謀反人（後書き）

本能寺の変の3日前、明智光秀は連歌会を開きました。

会場は京都の愛宕山だったそうです。

連歌ってというのは前の人が読んだ俳句に、次の人が俳句を続けるものです。

その一番最初を任されたのが光秀でした。

光秀は「ときは今 あめが下知る 五月かな」と読んだそうです。

実はこれ、本能寺の変の決意表明だとも取れるんです。

明智家の先祖は「土岐^{とき}」という家でした。

それが、「あめが下知る」。

つまり、「天下に命令する」ことだと言われています。

「五月かな」は謎…。

私は知りません。

本能寺の変が6月2日。

連歌会がその3日前なので、ちょうど5月だったからでしょうか？

光秀は、愛宕山でおみくじを3回引いて、全て「凶」だったらしい

です。

逆にミラクル！

さらに、「本能寺の堀はどのくらい深いのだろう…」と呟いたとする資料もあるんです。

因みに、愛宕山で読まれた連歌を収めた資料も現存します。

小説では、泣いてどうか行っちゃいましたが、そんなことはしていません（笑）

伊達と大友以外はそのまま面白い逸話が無くて…。

逆に言うとその2人は話題がつきません。
近々、紹介させていただきます。

三番槍 一番槍の出世頭（前書き）

今回は賤ヶ岳の七本槍のあのお殿様です。

三番槍 一番槍の出世頭

「俺は誰にも背中を見せたことが無い！背中を見せるなど武士の恥！」

そう豪語するのは福島正則。

賤ヶ岳の戦いを始め、数多くの戦で一番槍を担当した勇猛な武將。

一番槍は戦が始まってから真っ先に敵に攻撃すること。

勇気がある仕事なので高い評価が貰える。

今、そんな福島正則が友人の前でひたすら語っている。

「俺は背中を見せない！この前なんか、戦から撤退するときわざわざ敵の方に体を向けて、背中見せないようにしたんだぜ！」

正則にとって、背中を見せないことは相当な自慢になることらしい。

しかし…。

「うふふ…もう、正則様…」

「よいではないか！よいではないか！」

福島正則、浮気。

この時は、正則も夢心地だったのだろう。

しかしそれも長くは続かなかった。

浮気後、帰宅した正則を待っていたのは…。

「昌泉院……。あの…それは…？」

昌泉院は正則の奥さん。

ずっと帰りを待っていたらしい。

薙刀を持って…。

「あんた…。浮気してたんだって！？ぶっ殺してやる！覚悟！」

「うわー！待て…！昌泉院…これには訳が…」

「浮気に訳などありません！そりゃあ！」

昌泉院は薙刀を振り回した。

「…う、うわー！」

この時初めて相手に背中を見せて逃げ出した正則だった。

「俺さ…。この前、初めて背中見せたわ…。女って…。怖いものだな…。はぁ…。」

三番槍 一番槍の出世頭（後書き）

福島正則は、「敵に背中は見せない」と友人たちに豪語していたらしいです。

戦から撤退するときですら、わざわざ体を後ろ向きにするほどでした。

そんな彼が浮気して家に帰った時の出来事。

玄関を開けると、そこに立っていたのは正則の奥さんである昌泉院。しかも、手には薙刀。

夫の浮気にブチギレして、正則に切りかかったらしいです。

この時に初めて正則は背中を見せて逃げ出したのでした。

後に、正則は友人に、「この前初めて背中を見せて逃げた。いや、おなこ女子とは恐ろしいものじゃのう…」と語ったらしいです。

勇猛な武将も、奥さんには勝てませんでした。

結論！

浮気はダメです！

そんなわけで、今回は福島正則のだらしない(?)一面を紹介させて頂きました！

四番槍 東北の独眼竜2（前書き）

今回は奥州筆頭のあの人パート2です。

ひえゝ…

怖ろしやゝ…。

四番槍 東北の独眼竜2

ここは奥州。

今日は楽しい能の見学会！

当然のことながら、奥州のあのお殿様もご出席。

能と言えば日本の伝統芸能！

観阿弥・世阿弥が完成させたアレ！

「それでは、始めさせて頂きます」

そう言つて、能は始まった。

その能に見入った奥州の独眼竜、伊達政宗。

無事に、能は終わった。

「いやゝ！実に素晴らしかった！こんなに素晴らしい能は初めてじゃ！」

興奮気味に語る政宗。

「誠に素晴らしかった！是非もう一度やってはくれぬか！？」

政宗は俳優（能を演じた人）に頼んだ。

「いえ、能は一度しか出来ません」

「…死にたい？」

政宗は刀に手をかけた。

「…。やらせて頂きます」

俳優は、二度目の能を演じた。

四番槍 東北の独眼竜2（後書き）

伊達政宗は、能を見た後に「素晴らしかったのもう一度見たい」と頼んだ。

すると、「一度だけしかできない」と断られた。

すると、「死にたい？」と能の演じ手に尋ねたらしいです。

能の演じ手はもう一度やって見せたらしいですが…。

恐ろしい男です…。

能の二回目断ったくらいで殺されちゃ命がいくつあっても足りませんわ…。

五番槍 口を滑らせた猿と賢い狸（前書き）

今回はあの2人！

お酒の席には気をつけましょう。

五番槍 口を滑らせた猿と賢い狸

今日は天下のお殿様、豊臣秀吉主催の宴会！

その席に、秀吉の家来の徳川家康も出席した。

「あつはつは〜！い、家康殿…」

既に大分酔いが回っている様子の秀吉。

「何でしょう殿下〜！」

家康もご機嫌。

2人の会話の話題は秀吉自慢の大坂城へ。

「殿下は大変素晴らしい天下無敵のお城を持っていらっしやる！なんて羨ましいことでしょう！」

家康が言った。

事実、堀の深さ、縄張りの大きさ、天守閣の派手さ、守りの硬さのどれをとっても天下一だった。

「いやいや家康殿！あんな城、堀を埋めてしまえば只の裸城。攻略も簡単になってしまっから、最強ではないのだよ〜」

秀吉が上機嫌で言った。

「ははは！何を仰いますか！殿下は冗談がお上手で…」

それから数年後。

大坂冬の陣で家康が和睦の条件として持ち出したのは、城の堀を埋めることだった。

そして、夏の陣で豊臣は滅んだ。

五番槍 口を滑らせた猿と賢い狸（後書き）

秀吉は「大坂城は堀を埋めれば簡単に落とせる！」と家康に言ったそうです。

そして家康はそれを実行しました。

実際は、堀を埋めるだけでなく、城の壁壊したりもしたらしいです。

去年秀頼と淀が最期を遂げた蔵の一部が発見されました。

実際にあそこで戦いが…。

と思うとドキドキゾクゾクします。

秀吉時代の大坂城見たいな…。

因みに、小説内では「大阪」ではなく「大坂」を使わせて頂きました。

誤字じゃありません。

次回も秀吉を予定しています！

六番槍 日本一の出世人（前書き）

今回はあの天下人のあのホトトギス殺す人との出会いです。

諸説あるうちの一つを紹介します。

六番槍 日本一の出世人

ここは駿河は今川領土。

各地を放浪した後、今川家の家臣の松下之綱まつしたゆきつなに仕えた男がいた。

木下藤吉郎。

後の豊臣秀吉である。

「ちっ…！何だよあいつ！浪人だったくせしていい気になりやがってよ！」

藤吉郎が優れた人間だったため、周りの之綱の家臣は秀吉が嫌いだった。

「之綱様！藤吉郎のやつ、調子乗ってると思いませんか？」

家臣の一人が之綱に言った。

「ああ。そうだな。当然今回も出世は…」

「あいつに出世は勿体無いです！」

才能が有りすぎたために、出世コースから外された藤吉郎だった。

そんなある日…。

「おい藤吉郎！尾張まで甲冑買いに行け！」

之綱から藤吉郎に命令が出た。

藤吉郎は逆らわず、尾張まで行った。

「俺はこのまま之綱のもとにいるべきなのか？それとも、尾張には信長とか言うすげー奴もいるって噂だ。いつそのこと……」

考える藤吉郎。

答えはすぐに出た。

「……甲冑代で服を買おう！そして信長に会おう！甲冑代はそのうち返せば問題ない！俺出世してーよ！」

藤吉郎は、甲冑代をくすめた。

「そちが藤吉郎か？」

藤吉郎、只今信長と面会中。

「は、はい！藤吉郎です！」

「ほう……。猿みたいで可愛いな……。採用！」

「ありがとうございます！」

こうして、藤吉郎の新しい道が開け、閉ざされた出世コースも再び開けた。

「くそっ！藤吉郎帰ってこねー！俺の甲冑はどうなるんだよ！」

何も知らない之綱だった。

六番槍 日本一の出世人（後書き）

今回は解説するところが無いくらい史実だったりします…。

之綱の家臣から嫌われて出世コースから外された秀吉は、甲冑を買いに行くついで（？）に、信長に仕えます。

出世したかったんでしょーねー。

結果大当たりでしたけど。

因みに、甲冑代は返すつもりでいたらしいですよ。

信長が猿顔を気に入ったのも事実です。

ついでに言いますと、今回の出展は「太閤記」です。

そもそも、秀吉が今川家に仕えてたって知ってましたか？

あくまで、諸説あるうちの「太閤記」での話ですけどね。

七番槍 男たちの熱い友情（前書き）

史実過ぎるとつまらないことが判明しました…。

前回は失敗です…。

今回はそれを踏まえて無理やり軌道修正しました…。

出来てない気もするけど…。

今回は有名なあの逸話です！

七番槍 男たちの熱い友情

今日は秀吉主催のお茶会が開催されている。

様々な有力大名たちが秀吉に呼ばれて集まっている。

その中には、大谷吉継の姿もあった。

吉継は、若いころかららい病（ハンセン病）を患っていた。

そのため、大名たちは吉継を気味悪がった。

「さて、ではお茶会を始めようじゃないか！」

秀吉が言った。

秀吉は、自らが立てたお茶を一口飲み、吉継に渡した。

「大谷殿、どうぞ」

「はい。頂きます」

吉継は秀吉から茶受け取った。

そして、口に近づけたその時…。

ポチャン…！

吉継の顔から、茶器の中に膿が落ちてしまった。

気まずい雰囲気が出る。

「あ…。えつと…。はいっ！」

形式通りに、吉継は隣にいた小西行長に茶器を手渡した。

それを手渡された行長はドン引きした。

「え…。ちよつと…。嫌なんだけど…。えゝ…」

困る行長。

「仕方ない！飲んだ振り飲んだ振り…」

口を付けた振りをして次の人に渡した。

「ちよつ！これ飲めと…。？私も飲んだ振りで…」

「俺も飲んだ振り作戦で…」

その様子を見ていた石田三成。

「よこせっ！」

茶器を奪い取ると、そのまま一気に飲み干した。

「ふあゝ！喉が渴いていたので我慢できなかったんだ！美味しい！もう一杯頂きたいです」

「三成…、三成いー！」

吉継は泣いて感謝した。

それ以降、三成の為に命を懸けて尽力した吉継だった。

七番槍 男たちの熱い友情（後書き）

吉継と三成の友情物語でした。

因みに、茶器に落ちたのは膿とか鼻水とかいろいろ説があります。

あるいは、ただ口を付けただけでも言われています。

いずれにせよ、他の大名たちはらい病の感染を恐れて口を付けなかつたらしいです。

そんな中、三成だけは飲み干したものですから、吉継は心から感謝したんでしょう。

因みに、良い話をぶつ壊すことになりましたが…。

三成ではなく、秀吉が気を利かせて飲んだとも言われてたり…。

つまりどっちだか分からない。

なんだかなー…。

でも、三成か秀吉のどちらかが吉継の恩人だったことは事実です！

八番槍 尾張のうつけ革命児（前書き）

今回はあの超有名人！

悲しいお話です…。

八番槍 尾張のうつけ革命児

「行くぞ野郎共！今日は西側を攻めるぜ！」

「おうよ！任せときな！信長！」

ここは尾張の国。

今日も数多の若い不良どもがこの国を駆け回っていた。

この集団を率いていたのは織田信長。

一応、次に尾張を引き継ぐ人間である。

しかし、人は信長を「うつけ」と呼ぶ。

その行動、服装全てが奇抜。

なので、若い不良どもからは人気があった。

現在の尾張は敵だらけ。

そこら中を駆け回るのは自殺行為だった。

「あの…。若殿様…。どうか、その身勝手な行動、慎んで下さいよ…。」

苦言をいうのは信長の教育を担当している平手政秀。

「うるさいな…。どうしようと俺の勝手だろう!」

信長が言い返した。

「しかし…。若殿様は次の織田家当主…。身勝手な行動は…」

「いいんだ!俺の好きな用にやらせてくれ!」

信長は、今日も遊びに行ってしまった。

こうなったら…。

政秀は、机に向かって、誰に宛てるでもなく手紙を書いた。

『若殿様の言動が治らないため、教える甲斐がありません…。もう…生きていても仕方がありません…。』

これが、政秀の遺書だった。

書き終えた政秀は静かに腹を切った。

「おい…。嘘だろ!? 政秀! 政秀え! 返事しろよ! おい…。政秀!」

信長は、政秀の死をとて悲しんだ。

そして、政秀寺せいしゅうじを建て、政秀を弔うやまつった。

八番槍 尾張のうつけ革命児（後書き）

はあ…。

書いてて泣きそうになってしまった…（え？）

さて、実はですね、政秀さんが切腹した理由は諸説ありまして、今回はその一つを紹介させて頂きました。

でも、信長が政秀の死を悲しんだことは疑いようのない事実です。

信長がうつけとして振る舞っていたのは理由がありまして、「敵を油断させるため」や「敵と味方の区別を付けるため」だったと言われています。

九番槍 戦国最強の甲斐の虎（前書き）

あらかじめ…。

見る人によつては不快に思つ方もいるかもしれませんが…。

あの…。

事実…なんですよ？

本当に…。

私とて、こう…。

この小説に関しては、真面目に行こうと思つてたんですよ…。

まあ、あの…。

クレームは無しの方向で…。

九番槍 戦国最強の甲斐の虎

「ちょっと！これはどういうことですか！？」

「いや…その…あの…え〜と…だから…」

「誤魔化さないでください！」

「はいい…」

ここは甲斐の国。

で、今二人の男が喧嘩中。

攻め寄ってる方が高坂昌信。

攻められてる方が甲斐の主であり、後に戦国最強とも言われる軍を率いる武田信玄その人である。

「いや…その…。お前が一番だよ！だから、ね！怒らないでよ…」

「ふん！よくそんなことが言えたものですね！私はもう知りません！」

「そんな〜…」

昌信は、怒ってどこかへ行ってしまった。

そもそもこの喧嘩、信玄が悪いのである。

信玄が、浮気をしたのが原因だった。

相手の名は弥七郎^{やしちろう}。

一応言っておくが「男」である。

その浮気に、昌信はキレた。

何故なら、昌信も信玄の「お相手」だったからである。

分かりやすく言うと、前代未聞の「男だけの恋の三角関係」が成立したのだ。

弥七郎に嫉妬して、昌信は信玄に攻め寄っていたのだ。

その晩、信玄は昌信に手紙を書いた。

『お前が一番だよ。冷たくされると悲しいよ！今まで、弥七郎に夜の相手をさせたことは一度も無いんだ！信じてくれ！』

因みに、信玄がこの手紙を書いたのは戦の最中だった。

九番槍 戦国最強の甲斐の虎（後書き）

…。

ごめんなさい！

でも、事実なんです！

その証拠に、あの手紙現存するんですよ！

手紙に書かれていた内容を少し上げてみます。

『一、弥七郎に言い寄ったことは確かにある。しかし、腹痛だと言われて断られた。嘘じゃない。』

一、弥七郎に夜伽（夜の相手のことです…）をさせたことは今までに一度もない。昼だろうと夜だろうとそんなことはないし、今夜もない。

一、お前とさらに仲良くなりたいたいと思っているのに、疑われたのはたまらない。今まで書いたことに嘘があれば、浅間大社など神様方から神罰を受ける覚悟もある』

…。

あの人本当に戦国最強！？

戦場で家臣に浮気の謝罪文書いた武将ってどうでしょう…。

しかも何故現存する…？

因みに、高坂昌信と言えば、「甲陽軍鑑」の作者として知られています。

そして、最後に！

武田信玄ファンの皆様、変な一面だけ紹介してしまい、申し訳ありませんでした…。

あの…。

カッコいい武将だったんですよ？多分…。

十番槍 歴史を変えた謀反人2（前書き）

こんな小説もおかげ様で早くも十話！

読んで頂いた方に心より感謝します！

それと、途中から「十番槍」って付けみました。
カウントし易くなってますか…？

今回は明智光秀です。

若い頃のお話です。

十番槍 歴史を変えた謀反人2

ある日、友人と二人で某所に出掛けた織田信長の家臣、明智光秀。
その帰り道での出来事。

「お？なんじゃこりや？」

光秀は馬を止め、地面に落ちていた木彫りの置物を拾い上げた。

光秀の少し前を走っていた友人が、光秀がいないのに気付き戻ってきた。

「光秀！どこ行ったかと思っただぜ。ん？何だそれ？」

光秀の友人は、光秀が手にした木彫りの置物を指差して聞いた。

「あゝ悪い。何か落ちてたんだ」

「拾い食いもいい加減にしないと腹壊すぜ」

「いや、今回は食い物じゃないし…。ほら！」

光秀は木彫りの置物を友人に手渡した。

友人は馬から降りて、それをよく見てみた。

「おお！これは大黒様じゃん！縁起がいいねえ！（今、『今回』っ

て言った？前は拾い食いをする？」

「大黒様？」

光秀が聞き返した。

「そうよ！千人の上に立つくらい神様なんだよ！縁起がいいから大事にしるよ！」

「ふん…。千人ね…。普通の人間にも千人位なら扱えるつてのに…。千人じゃ軍として弱いし…。その程度の神様ならいらんわっ！お前にやるよ！」

「ちよつ…。え…。（普通拾い物を人に渡す…？）」

友人は仕方無く受け取った。

十番槍 歴史を変えた謀反人2（後書き）

光秀が若い頃のお話でした。

光秀は、大黒様の像を拾いました。

それを友達に見せた所、「それは大黒様と言って、千人の上に立つ有り難い神様だ」と言われたらしいです。

すると光秀は、「千人なら並みの人間でも上に立てる。その程度の神様などいらん」と言って友達にあげたらしいです。

大黒様も光秀にとっては大したものではなかったんですね。

第十話は光秀でした。

因みに、サブタイトルは偉人ごとに決めていく予定です。ですから、「2、3…」などもあります。

またまだ頑張りますので、よろしくお願いします。

十一番槍 鳴くまで待った狸様（前書き）

今回はあの狸親父です。

ずる賢さが全面に出た逸話となっております。

十一番槍 鳴くまで待った狸様

「おー何だ？やるのか？俺は家康様の家臣だぞ？あゝ？たかだか一向宗のぶんざいでよあゝ？」

「んだとあゝ？テメエ、ただじゃおかねえぞ！」

「はっ！やれるもんならやってみやがれ！」

「やってやるよ！一揆だ！一揆だ！」

ここは三河の国。

家康の家臣と一向宗とのイザコザが起きた。

それをきっかけに、一向宗は家康が嫌いな連中と共に一揆を起こした。

「家康様！我らが有利にございます！あとは奴らが籠城する寺を落とせば我らが勝利！」

家臣が家康に報告した。

「よしっ！そうか！ならばもう大丈夫だな……」

少し安心した家康だったが…。

そこに、家臣がやってきた。

「報告！一向宗より和睦の申し出が！『寺は以前と同じようにする』
というのが和睦の条件だと…」

「な…。不利なのは貴様らではないか！その様な条件、決して飲め
ん！」

家康が言うことはもつともだった。

暫くすると再び家臣がやってきた。

「報告！織田信長様より、早く戦を終わらせろとの主旨のお手紙が
！」

それを聞いて困った家康。

「ぬう…。戦の勝利は目前…。しかし信長殿の命令とあっては逆
らえん…。仕方ない！和睦じゃ！」

家康は、相手の有利な条件で和睦した。

しかし…。

「寺をぶっ壊せ！」

それが家康からの命令だった。

「なっ…。何すんだ！寺を以前のようにするのが和睦の条件じゃな

いか！約束を破る気か！？」

一向宗から文句がでた。

「ほう…。以前…ねえ。寺が建つ以前は野原だったんだから、その通りにしたまでだよ！」

「くそっ…。狸めが…」

一向宗は悔しがった。

十一番槍 鳴くまで待った狸様（後書き）

家康の家臣がおこしたイザコザで、一揆が起きた。

（イザコザの詳細は知りません…）

一向宗＆家康嫌い組対徳川軍の戦いが始まった。

激戦の末に寺に追い詰められた一向宗。

そこで、和睦を求めた。

一向宗にとって寺は大切な場所だったのでしょう。

条件は「寺は以前のようにすること」だった。

つまり、寺には手を出すな、ということだった。

家康は、信長から早く戦を終わらせろという指示を受けていたので、この条件を飲んだ。

しかし、戦が終わると家康は、寺を破壊した。

家康曰わく、「寺が建つ以前の野原に戻した」。

屁理屈でしょ！

家康は忍耐力だけでなく、ずる賢さもずば抜けていたのかも知れませんがね。

そうでもないとな下は取れないのかな…？

というわけで、家康の屁理屈な逸話でした。

十二番槍 江戸城の築城主（前書き）

シモンチェリ選手のご冥福をお祈りします。

あつちでも、加藤大治郎選手と共に、走り続けて下さい！

さて、今回は江戸城を築いたあのお殿様！

家康じゃないです。

家康は改築しただけですよ？

全国的な知名度は低いかもしれませんが、埼玉県内なら…戦国ファンの方は知ってるかもです！

十二番槍 江戸城の築城主

ここは武蔵の国。

一人の幼き天才がいた。

名は太田道灌。
おたとつかん

禅寺や足利学校で勉強していた道灌は、読み書きがとても良くできたのである。

「道灌…。お前、大丈夫か？」

そう声をかけたのは道灌の父、道真。
どうしん

道灌が早熟なのを心配していた。

「いいから道灌！昔から頭のいい人間にはろくなのがいないんだ！人は正直じゃなきゃいけないんだぞ？わかるか？道灌よ！障子を見る！真っ直ぐだから立つんだ！曲がっていると立たないもんだぞ！」

すると、道灌は…。

「屏風は曲がってるから立つんだよ？父ちゃん！」

屏風を指差して言った。

「……………トイレ言ってくる……………」

道真は戻ってこなかった。

屏風事件から暫く経ったある日…。

「これをお前にやろう！いつもこの言葉を意識しろ！」

道真は「おごれる者久しからず」と、平家物語の一部を紙に書いて道灌に渡した。

すると道灌は即座に「おごらざる者もまた久しからず」と書き換えた。

「んだこの野郎！せっかく書いてやったのによう！」

道真はキレて、道灌を扇で何度も叩いた。

「だって…だってえ〜！」

「だってじゃない！喰らえ！」

「うぎゃー！」

道灌の叫び声は暫く続いた。

十二番槍 江戸城の築城主（後書き）

武蔵の国の戦国武将、太田道灌。

江戸城の築城主として有名（？）です。

彼は屁理屈が得意だったんでしょうね！

父の道真に「障子は真っ直ぐだから立つ！曲がっていたら立たない！」と言われると、屏風を持ってきて、「屏風は曲がっているから立つんだ！」と言ったらしいです。

道真は何も言い返せなかったらしいですよ…。

また、「おこれる者久しからず」と書いて道灌に渡したところ、「おこらざる者もまた久しからず」と書き換えたらしいです。

意味は、「権力が無く調子に乗れない者もまた長くない」となるんでしょうか。

とにかく、彼は屁理屈が得意な頭が切れる戦国武将だったようです。

十三番槍 九州筆頭のキリシタン殿様（前書き）

九州のキリシタン大名と言えばあの人！

史実そのままがネタになる、最強の切り札的なお殿様です。

十三番槍 九州筆頭のキリシタン殿様

「何！？美女！？よし！すぐに呼べ！」

「えっ？し、しかし…。関東の女子おなこなのですが…」

「構わん！呼べ！」

「というか…。旦那もいるのですが…」

「知るか！呼べ！これは命令だ！従わぬなら斬る！」

「し、承知！」

ここは九州、豊後の国。

大友館。

そして、この無類の女好きのお殿様はおおともそうりん大友宗麟。
九州のキリシタン大名の筆頭である。

今日も、女遊びを終えて城に帰った宗麟。

彼を待っていたのは、妻のなた奈多夫人だった。

「いつもいつもいつも知らない女と遊びやがって！もうこちら黙ってはいませんわ！今日、国中の僧侶と山伏に、あなたを呪

い殺せと命令しました。今更反省しても遅すぎますわ!」

元々気の強かった奈多夫人。

ついに、宗麟の行いに耐えきれなくなった故の行動だった。

「ちよっ! 嘘…。い、いやー! イエス様ー! お助けー!」

そう叫びながら宗麟は城を飛び出した。

そして宗麟失踪。

しかしその3日後、家臣が城の外れにあるあばら小屋で宗麟を発見した。

「ほら、殿! お城に帰りましょうよ!」

家臣が宗麟の腕を引っ張りながら言った。
当然呆れている家臣。

「嫌じゃ嫌じゃ! 城には奈多がいるから嫌じゃ!」

ひたすら拒否する宗麟。

「…はあ…。じゃあ、臼杵城に行きますか…? ここにいても仕方ないですし…」

「うん…」

こうして、宗麟は拠点を移すことになった。

十三番槍 九州筆頭のキリシタン殿様（後書き）

大友宗麟は女癖の悪さが尋常ではなかったのですよ。

「美女」と聞いた瞬間、畿内や関東から呼び寄せまくったり。

一応言いますが、九州にですよ？

移動手段は馬や籠ですよ？

極めつけは、家臣の妻を奪い取ったり。

そんなだから、妻とは仲が極めて悪かったらしいです。

どのくらいかと言うと、祈祷僧や山伏なんかに「夫を呪い殺せ」と命令するほど。

薙刀を使わなかっただけ拍手ですよ！

で、そんなことがあったから宗麟は拠点の大友館から失踪したんです。

呪い殺されちゃ堪ないと。

暫くすると、宗麟は、あばら小屋で発見されました。

しかし、「あの館には奈多がいるから帰りたくない」と、大友館に帰ることを頑なに拒否。

仕方なく、宗麟の家臣が建てた臼杵城に連れて行かれたのでした。

因みに、宗麟が臼杵城に拠点を移した表向きの理由は、「毛利水軍に対抗するため」でした。

実際は奈多さんから逃げたかっただけでしょうけどね。

まあ、確かに毛利水軍は強いけど…。

というか…。

宗麟って何なの！？

どこまで女好きだところなるの！？

このままだと宗麟ファンの方に怒られそうなので彼の名誉挽回の為に一つ良い面も。

日本で最初に大砲を導入したのは宗麟です。

国土をも崩す威力があると言う意味で、「国崩し」という名前でした。

一応、強かったんですよ？
大友軍。

大将がアレなだけで…。

十四番槍 兄弟たるもの支え合え！（前書き）

今回は有名な逸話です。

というか…偽話^{いつわ}…？

あとがきがメインかも…。

十四番槍 兄弟たるもの支え合え！

「毛利両川完成！これで毛利家も安泰だ！」

こちらのお殿様は毛利元就。

毛利家安泰のために全力を注いだ、知略を駆使した戦国武将。

「おーい！隆元！元春！隆景！ちよつと来い！」

元就は、自分の3人の息子たちを呼び寄せた。

毛利隆元・吉川元春・小早川隆景の3人である。

元春は吉川家、隆景は小早川家の養子として後継ぎとなっている。

「いいか！この先お前たちは決して争ってはならん！いつでも兄弟として支え合い、協力するのだ！」

元就が息子たちに言った。

はいっ！と返事をした息子たち。

そして、元就は話を続けた。

「ここに一本矢がある。これはお前たち一人一人だ。だが…この矢は…簡単に…！ふんっ！あれ？ふんっ！」

バギッ！

元就は矢を折ってみせた。

「はあ、はあ…。か、簡単…に…折れ…折れてしまう…」

元就息切れ中。

5分後…。

「ふう…。もう大丈夫だ。話の途中だったな。一本の矢は折れやすい。だが…三本合わせると、頑丈になり折れなくなる！お前たちもこの矢のように3人合わさって協力していくのだ！」

「はいっ！（あれ？一本でも折れにくくなかった…？）」

3人同時に返事をした。

「でも、三本も矢使ったら三倍早く矢が尽きちゃう…」

「ああ？おい隆景、何か言ったか？」

「ひい！な、何でもないです！」

元就の息子3人は決して争うようなことはしなかった。

十四番槍 兄弟たるもの支え合え！（後書き）

毛利元就の「三矢の訓^{さんし おしえ}」でした。

一本の矢は弱くもろいが、三本合わせると強い頑丈な矢になる。
っていうあれですね。

しかしですね、これ。

毛利家の史料のどこ探しても出て来ません。

早い話が作り話なんです。

イソップ寓話や中国の故事に似たようなものが出てます。

多分、それが元ネタになってるんだと思います。

さらに、江戸時代に流行った朱子学。

これが教訓を作るのが得意だったらしいです。

で、日本で三矢の訓が当てはめられる丁度いい人が元就だった。

そんな感じでしょうかね？

簡単に言うと、「兄弟仲良くしなさいよ」と言うことを教訓とした
い。

そのために何か具体例が欲しい。

よし！三矢の訓だ！元就だ！

みたいな感じ。

まあ、結果として毛利・吉川・小早川は争いませんでしたし。

教訓にするには持ってこいだっただんでしょね。

因みに、本文の最後の「三倍早く矢が尽きる」は「妖精大戦争」でのスターの台詞なんですが…。

恐らく、この小説を読んで頂いている独身者様の中に東方好きな方はいらつしやらないですね…。

場違いなネタでした…。

一の太刀 もしもあの時…（前書き）

今回は特別番です。

もしも関ヶ原の戦いが長引いていたら…について考えて見ました。

興味無ければスルーの方向で…。

あくまで、私一人の考えです。

可能性の一つくらいに見てください。

ご意見いただけると嬉しいです。

一の太刀 もしもあの時…

もしも、関ヶ原の戦いが長引いたら…。

1600年関ヶ原。

史実では6時間ほどで決着が付いた天下分け目の戦い。

しかし、もしも小早川が裏切らなかつたら…。

戦いは数カ月に及び、泥沼化していただろう。

泥沼化した状態から東軍が勝利したとしたら、家康は江戸に幕府を開いたのだろうか？

もし西軍が勝っていたら、首都は大阪だったのだろうか？

恐らくだが、どちらも正しくないだろう。

関ヶ原が泥沼化した。

小早川が裏切らずに西軍が勝利した。

どちらの状態でも東軍、西軍共にボロボロである。

実際、そうなることを予想して天下を狙った男もいた程だ。

黒田勘兵衛。

九州の天才軍師である。

関ヶ原が泥沼化すると読んだ彼は、大友軍に勝利し、兵力を強化していった。

史実では、関ヶ原がすぐに終わってしまい、家康に軍を解散させられたが…。

関ヶ原の戦いが長引いていれば、勘兵衛が天下を取っていたと思われる。

そうなったら、日本の首都は九州で、キリスト教も弾圧せず、鎖国もしなかっただろう。

大きく歴史は変わっていたかも知れない。

そんな意味でも、関ヶ原の戦いは「天下分け目の戦い」だったのである。

一の太刀 もしもあの時…（後書き）

歴史の「もしも」って難しいです…。

正解がないので…。

次回からまた普通に逸話書きます…。

「もしもあの時」は逸話が思いつかなかつたり気分が乗ったときに不定期で書いていきたいと思っています。

興味無ければスルーしてくださいな。

ご意見頂きたく思います。

「いやいや、ここはこうじゃなくてこうなったんじゃね？」みたいな意見とか…。

待ってます…。

因みに、回数のカウントは「。の太刀」です。

十五番槍 蝮の娘様（前書き）

初の姫様が主役です。

戦国時代に活躍した女性って結構少ないので逸話探すのもひと苦労した記憶が…。

十五番槍 蝮の娘様

「…さあ、可愛い帰蝶よ…。旅立ちの時間じゃ。尾張の国で幸せになるんじゃない？」

美濃の国のお殿様、斎藤道三はそう言っただけで娘の頭を撫でた。

「もう、お父様だったら！私は尾張の信長様の下で幸せになりますってば！」

道三の愛娘、帰蝶は道三にそう言った。

今、帰蝶は尾張の織田信長のもとに嫁ごうとしている。

そうになると、名は美濃から来た姫という意味の「濃姫」となる。

完全に斎藤家を出ることになるのだ。

「うっ…。帰蝶よ…。儂からの嫁入り道具じゃ。受け取ってほしい…。」

道三が手渡した物は…。

「…刀…ですか？尾張にも包丁くらいはありますよ？それに料理は侍女に作らせれば…」

「違う！帰蝶…。信長という男が噂通りのうつけならば、その刀で殺してしまうのじゃ！良いな？」

道三が言った。

それを聞いた帰蝶は、刀を道三に向けた。

「…ふふつ。でもこの刀、いずれお父様を斬るものになるかも知れませんわよ!」

「はははっ!それでこそこの螭の娘じゃ!天晴れ!達者でな!濃姫よ!」

「はいっ!お父様!私、濃姫として幸せになります!」

帰蝶はゆつくりと美濃の地を後にした。

十五番槍 蝮の娘様（後書き）

濃姫が10歳頃の時のお話でした。

濃姫（帰蝶）は信長に嫁ぐことになりました。

政略結婚だったと思います。

嫁いで行く濃姫に道三は刀を渡しました。

刀って言っても小さいやつですよ。

道三は「信長が本当に噂通りのうつけならその刀で斬り殺せ」と濃姫に言ったそうです。

すると濃姫は「この刀はお父様を斬ることになるかも知れません」と言ったそうです。

10歳の女子が言うことじゃないよ！

その若さで世の中の動きを既に見抜いていたのでしょうか…？

とにかく、凄い女性だったんですよ、濃姫は。

賢かったんですね。

これを聞いた道三は、濃姫を誉めたらしいですよ。

「流石は蝮の娘！」って。

心が広いというか何というか…。

因みに、濃姫の名前が「帰蝶」なのは、有力な説であって確定ではなかったと思います。

二の太刀 く戦国逸話小ネタ集く（前書き）

小説としては使いにくい逸話を集めて見ました。

第一回目は豊臣秀吉です。

ほぼ箇条書きですけど、せっかくの逸話なので…。

二の太刀　く戦国逸話小ネタ集く

豊臣秀吉

秀吉とおねの結婚は戦国時代にしては珍しく、恋愛結婚だった。因みに、親には反対されたそうです。

秀吉の右手には指が六本あった。

ルイス・フロイスや前田利家がそう書いてます。

肖像画の髭は付け髭だった。

当時は髭が無いのはとても恥ずかしいことだった。

喧嘩で「この髭無しがっ！」と言われた北条の家臣が相手を斬り殺した記録もあります。

ニックネームは「猿」ではなく「禿鼠」だったらしい。

「猿」は信長がおねに宛てた手紙の中に「あの猿は元気か？」みたいなことが書かれているくらい。

二の太刀 〱 戦国逸話小ネタ集 〱 (後書き)

小ネタでした。

解説は特にありません。
本文通りです。

200文字埋めるのに苦労しました…。

十六番槍 三顧の例に応えた軍師（前書き）

週刊ランキングの歴史部門で9位でした！

週刊に入ったのは初めてです。

有難う御座います！

さて、今回はあの軍師！

城の乗っ取りと云えば？

十六番槍 三顧の例に応えた軍師

「おいこら義龍！貴様息子の癖して父に刃向かうとは何事だ！親の顔が見てみたいわ！」

「んだとオラア！テメエのようなクソジジイ、父親だと思ったこともないわ！親の顔が見たけりゃ、鏡見な！」

ここは美濃。

斎藤道三が息子の義龍と争っていた。

国が荒れているそんな中、母や弟と菩提山城で父の帰りを待っている少年がいた。

色白で女性らしさもどこかに存在する彼の名は、竹中半兵衛。

彼の父、重元^{しげちか}は、道三の味方として出陣していた。

子供と女しかない城は、義龍側から見ればこれ以上無い獲物だった。

「おいつ！今なら菩提山城は女子供しかないらしい！城一つ落としたとなれば、義龍様から謝礼がたんまり出るぞ！」

「マジで？チャンスじゃん！よし！やってやんよ！」

案の定、義龍の味方の土豪たちが攻撃してきた。

「へーい！竹中のガキ共！殺されたくないや、城空けな！テメエらの親父も兵も出陣してんのは知ってたんだ！足掻くだけ無駄だ！」

攻撃しながら土豪は叫んだ。

その声に怯えたのは城内の半兵衛の弟や母。

「あわわわ…。は、半兵衛や。し、城を…城を空けないと…」

「そつだよ兄様！今は俺達3人しかないし…。殺されたら元も子も無いよ！」

母と弟は半兵衛に泣きついた。

しかし、半兵衛はいたって冷静だった。

「ふう…。母上様、そして弟よ…。城中の竹を集めてくれ…」

そういうと、半兵衛は焚き火をおこした。

「竹をこの火に投げ入れて！急いで！」

半兵衛が指示した。

ポカンとする二人。

それでも半兵衛に従うしかなかった。

「そりゃ！んしょ！兄様！入れたよ！」

「もつと！もつと入れて！」

パンッ！パンッ！

火にくべられた竹は勢いよく破裂した。

勿論、大きな音を伴って。

その音を聞いてビビったのは土豪たちであつた。

「うわあ！こ、この音…。鉄砲じゃねえか？」

「あ、ああ…。間違いねえ…。て、鉄砲だあ！まだ城にそんなものが残ってたのかっ！」

「うわあ！撤退！撤退じゃあ！」

土豪は慌てて撤退した。

こうして、半兵衛たちは事なきを得た。

十六番槍 三顧の例に応えた軍師（後書き）

竹中半兵衛が13歳の時でした。

10歳の弟や母と城の留守を守っていると土豪に襲われました。

しかし、半兵衛は全く動じず、火に竹を入れるように指示。

竹の破裂音を鉄砲の音と勘違いした土豪は慌てて逃げ出したそうです。

後に天才軍師と呼ばれる半兵衛の才能が早くも開花したエピソードでした。

十七番槍 東北の独眼竜3（前書き）

今回もあの方を特集します。

いやあ、ネタが入って来ないときの独眼竜！

十七番槍 東北の独眼竜3

よく晴れた昼下がり。

暖かな陽気が気持ち良い休日。

昼寝がしたくなるのは、お殿様も同じのようで…。

「ふぁあゝ…。一眠りするかな…」

ここ奥州のお殿様、伊達政宗もお昼寝中。

暫くすると、天気が崩れて雨が降ってきた。

それに気付いた政宗の家臣。

「ああ！雨だ！政宗様がお風邪を引いたら大変だ！」

気を利かせて政宗を起こした。

「政宗様！雨です。お体が冷えてしまいますよ。暖かい場所にお布団を敷き直しますね」

すると政宗は起き上がった。

その手には日本刀が…！

それを見た家臣は一目散に逃げ出した。

「うああー！ま、政宗様！？」

「待て！おい待て！」

追ってくる政宗。

ついに家臣は追い詰められてしまった。

「はあ…はあ…。人がわざわざ気を利かせて起こして差し上げたというのに…！私を殺すというのなら…！いっそ！」

家臣は刀に手を掛けた。

「はあ…はあ…。おい…。何で逃げるんだよ…。気を利かせてもらったから、お礼にこの刀をあげようと思ったのに…」

家臣の誤解は解けた。

十七番槍 東北の独眼竜3（後書き）

伊達政宗が昼寝をしていると、雨が降ってきました。

そこで、気を利かせた家臣が政宗を起こしました。

すると、政宗は刀を手に家臣を追いかけ始めました。

追い詰められた家臣は政宗と差し違える覚悟で、「何故追って来たのですか？」と聞いたそうです。

政宗は、「お前こそ褒美にこの刀をあげようと思ったのに何故逃げるんだ！」と言ったそうです。

そりゃ逃げるよ！

起こしただけで追いかけられるのはゴメンですね…。

そして安定しないあとかきの書き方…。

十八番槍 天下のただ飯喰らい（前書き）

今回は「穀蔵院ひよつと斎（天下のただ飯喰らい）」と自ら名乗ったあの方！

私はこの方大好きです（笑）

十八番槍 天下のただ飯喰らい

「どうしてお前はいつもいつも人の話を聞かないんだ！いい加減にしろ！」

「…また怒られた…。ちえっ！つまんねーの！」

先ほどまで叱られていたこの男。

前田慶次。

この加賀の国を治める前田家の人間である。

その言動、行動、全てが変わっていることで加賀では有名だった。

そのことが原因で、加賀の殿の前田利家にはしょっちゅう怒られていた。

「つまんねー！どんなに広い土地があつたって、自由に生きれなきゃそこの浪人と同じなのにな…。だったら…！」

慶次は前田家を出ることを決心した。

「いや、待てよ…。ただ家を出ても面白くないな…。最後くらいあのうるさい利家に仕返ししてやりたいな！」

慶次は密かに計画を立てた。

そして、ついに計画の実行日。

慶次は利家に手紙を書いた。

「今までの行動、申し訳ありませんでした。反省しますので、その印に茶会をします。是非来てください」

それを見た利家は喜んだ。

「おい！慶次が改心したぞ！これは茶会に行かなければ！松風を出せ！」

利家は、愛馬「松風」に乗り、慶次のもとへ。

「よく来ましたね！本日はとても寒いので、茶会の前にお風呂を用意しました」

慶次が利家に言った。

「気が利くな！それでこそ前田の男！」

利家は風呂に飛び込んだ。

しかし…。

「ギャー！うわっ！あー！み、水風呂じゃないか！あの野郎！絶対

に慶次を逃がすな！」

利家は水風呂が沸くかと思うくらい怒った。

しかし、その怒りの矛先は、既に城からは逃げ去っていた。

松風と共に…。

十八番槍 天下のただ飯喰らい（後書き）

前田慶次でした。

前田慶次郎ともいうらしいですね。

前書き&題名の「穀蔵院ひよつと斎（天下のただ飯喰らい）」は、慶次が秀吉に面会した時に名乗った名前（？）だそうです。

今回は慶次の悪戯についての逸話でした。

「茶会を開く」と言って利家を呼び出した慶次。

それを「心を入れ替えた」と喜んだ利家でした。

しかし、全ては慶次の思惑通り。

「寒いのでお風呂を沸かしました」と利家を風呂に入れました。

しかし、その風呂は水風呂でした。

勿論、利家はブチギレたそうです。

因みにこの時慶次58歳。

もういい歳ですよ。

悪戯小僧ほど恐ろしいものは無いね…。

こうして、慶次は利家に一泡吹かせることに成功したのです。

利家の愛馬の松風は慶次に盗まれたそうです。

この度胸に拍手ですよ…。

十九番槍 四国の姫若子（前書き）

ここに来てやっと1万文字超えです（笑）

最近、登場する武将のキャラが弱い気がする…。

あとがきで解説するので、ある程度は崩しても大丈夫でしょうか？

さて、今回の舞台は四国です〜！

サブタイトルの姫若子は「ひめわこ」と読みます。

十九番槍 四国の姫若子

「元親よ！今度の長浜の戦い、お前も出よ！」

ちよつそかくにちか
長宗我部国親から息子の元親に命令が下った。

「えゝ？俺？読書してたい…。第一、戦なんてやったことないし…」

元親が言った。

「22歳で未だに戦に出たことないのなんて、お前くらいだ！そんなだから姫若子ひめわこなどと呼ばれるんだ！いいから来い！さもなくば、家督はお前に譲らん！」

「えゝ…」

元親が出陣することは、直ぐに家臣たちにも伝わった。

「姫若子が出んの？」

「マジで？うわゝ。絶対役に立たねーよ！」

色が白く、読書ばかりして大人しかった元親。

全く期待されていなかった。

いざ、決戦日。

戦いは、土佐の長浜城で行われた。

出陣の前に、元親は家臣を呼んで幾つか質問した。

「ねえねえ！槍ってどう使うの？」

その質問に言葉を無くした家臣。
ただただ飽きれるしかなかった。

「……。じゃあ、相手の目を狙ってください。それだけでいいですよ。」

「分かった！もう一つ聞く！大將は先に行くものの？それとも後から行くの？」

「……はあ……。大將は大切なお人。先に行つてはいけません……」

「分かった！じゃ、戦に行つてくる！」

戦が始まった。

元親は最前線にいた。

「おら！おら！おら！かかって来いや雑魚が！」

元親は強かった。

戦が終わると、敵の首を2つ持って帰ってきた。

そこで、家臣がきいてみた。

「何で？何で強いのを隠していたんですか！？」

「あははは！戦は騙し合いよ！敵を騙すにはまず味方からってね！」

姫若子が、鬼に化けた瞬間だった。

十九番槍 四国の姫若子（後書き）

長宗我部元親の初陣は遅く、22歳とわれています。

夜襲で長宗我部国親に奪われた長浜城を取り返しにきた^{もとやましげとき}本山茂辰との戦いでした。

長浜の戦いといえます。

この時に元親が被った兜が現存します。

元親は色が白く、本ばかり読んでいて大人しかつたため「姫若子」と呼ばれていました。

初陣の時には、槍の使い方や大将の振る舞い方を聞いて、家臣をガツカリさせました。

しかし、いざ戦が始まると、最前線で奮闘し、数人の敵を倒したそうです。

これで長宗我部軍の士気はマックスに！

結果圧勝しました。

姫若子がやりよった！

家臣に色々聞いたのは、本で読んだ知識を確かめたかったかららしいです。

元親が何も知らないバカを演じたのは、騙すため。

敵も味方も騙しました。

「何故今まで大将の器を隠してたのさ？」と家臣に聞かれると、「戦とは騙し合いである！」と答えたらしいです。

因みに元親のこの言葉は孫子の兵法書の言葉らしいですよ。

いかにも本好きの元親らしい！

やっぱり知識がある人は強いのかね……。いつの時代も。

以上！元親でした！

どこか分かりにくい場所があつたら遠慮無く言ってくださいね…？

史実を崩して書くのって地味に難しいので、何か分かりにくい部分があるかも…。

三の太刀 日本のお姫様（前書き）

前回のを予約投稿にし忘れた関係で、次の日分のストックが無くなり、急遽書いたものです。

「。の太刀」シリーズ第三回目です。

このシリーズは、本編では扱いきれないようなネタを紹介します。

小説っぽさは0です。

興味無ければスルーで…。

今回は戦国時代を生きた女性に注目しました。

三の太刀 日本のお姫様

戦国時代。

それは、男たちが夢をぶつけ合ったまさに男のための時代である。

そんな時代に、男たちを支えた姫様もいたのである。

おね

恋愛結婚で、両親には反対されながらも秀吉と結婚した。

以後、秀吉が天下を取り、自身が83歳で永眠するまで生涯秀吉のために生きた女性。

しかし、結婚したてのおねは、秀吉にある約束を守らせていた。

「もし秀吉が尾根に口答えしたら一昼夜縛り上げて良い」

秀吉は、尻に敷かれていた…。

おおほつりつるひめ
大祝鶴姫

大内義隆との戦いで出陣した少女。

しかし、この戦いで兄と恋人が討ち死に。

鶴姫は最後の反撃をして大内軍を撃破した。

しかし、その後兄と恋人を失った悲しみに耐えられずに18歳で海に身を…。

「わが恋は 三島の浦の うつせ貝 むなしくなりて 名をぞわづらふ…」

細川ガラシャ

細川忠興の妻。

父親が明智光秀で、本能寺の変が起きて人生が変わり果ててしまった。

忠興に幽閉されながらも、キリスト教だけを心の支えに生きた。

関ヶ原の戦いで、三成に人質として捕まりそうになったとき、細川家の為に死ぬことを決意。

キリスト教では自殺が禁じられているので、家臣に討たれる形で最期を迎えた。

戦国時代は、女性たちが影で活躍した時代でもあった。

三の太刀 日の本のお姫様（後書き）

おね。

または北政所。

天下人、豊臣秀吉を支えた女性でした。

生涯子宝に恵まれなかったらしいです。

ただ、一説によると、妊娠はしたが秀吉が「時期でない」みたいな理由をつけてお灸を添えて流産させてたとか。

それが原因で子宝に恵まれなかったみたいなの説を聞いたことがあります。

逆に、前田利家の妻のまつは11人子供がいて、多いことで有名です。

1人目産んだの14歳だし…。

因みに結婚したのは12歳。

利家は24歳でした。

今では考えられないです…。

大祝鶴姫。

戦った女性。

16歳ですでに出陣してたんでしたっけ。

いまいち情報が少なくてすいません…。

因みに、鶴姫の甲冑は現存する唯一の女性用の甲冑です。

胸の辺りが膨らんでいて、お腹の辺りが細くなってるらしいです。

スタイル良かったのかな…？

細川ガラシャ。

キリスト教に生きた女性。

様々な不幸にも負けずに頑張った女性ですね。

辞世の句は「散りぬべき 時知りてこそ 世の中の 花も花なれ
人も人なれ」

散る時を知っているからこと花は美しい。私もそうありたい。

夫の忠興についてはまた別の機会に紹介します。

すごいから！

以上！急遽書いた三の太刀でした。

本当は今頃この小説の代わりに長宗我部のお話が投稿される予定だったのに…。

今日投稿するぶんの小説が無くなっちゃったから…。

二十番槍 戦国最強の絆（前書き）

今回は有名な逸話です。

ライバルの二人の絆が垣間見えますよー！

二十番槍 戦国最強の絆

「今川如き、この信玄の敵にあらず!」

武田信玄が、いまがわうじさね今川氏真を攻撃した。

「ちっ! 何だよあいつ! ちょっと北条さん!」

氏真は北条氏康きたうじやすを呼んだ。

「ほえ? なに? 氏真ちゃん?」

「北条さん! 最近、武田信玄が攻撃してくんのよ! 信玄のことどう思う?」

氏真がきいた。

「ぶつちゃけ、超キライ! ウザイ!」

「だよね。じゃあ、塩止めする?」

「いいね。氏真ちゃん!」

こうして、今川と北条は協力して、甲斐に塩が行かないようにした。

「塩。塩が欲しい…。塩化ナトリウム。NaCl…」

海が無い甲斐の人々は苦しんだ。

それを知った越後の上杉謙信。

「今川に北条…。なんて卑怯な！戦では勝てないからこんなことするんだ！私は戦で虎と雌雄を決する！塩を用意せよ！武田を助けるのだ！」

そう言っ、甲斐に大量の塩を送った。

「なんと…長尾が…！？信じられん…」

知らせを聞いた信玄は喜んだ。

「味方に…味方に欲しい名将ですね！」

信玄の家臣もとても喜んだ。

「長尾に…この塩留めの太刀を…。お礼をするのじゃ！」

「はい！」

信玄は謙信に太刀を送った。

こうして、甲斐は塩不足から脱したのだった。

二十番槍 戦国最強の絆（後書き）

「敵に塩を送る」の逸話でした。

今川と北条が協力して塩止めして、信玄は窮地に立たされました。

そこを救ったのが川中島の戦いで何度も戦をしている信玄のライバル、上杉謙信でした。

謙信は「弓矢では勝てないから卑怯なことをしているんだ！私は戦で信玄と決着をつける！」と言って大量の塩を信玄に送ったそうです。

信玄は「味方に欲しい名将」と言ったら幸いです。

…通説では。

実はこの逸話、嘘だと言われています。

謙信が塩を送ったのは、ただの商売のためとか…。

昔から甲斐と越後の間には、塩のやりとりがあつて、それを止めなかったただけらしいですよ。

しかし、いずれにせよ、塩を止めて信玄に追い討ちを掛けなかったのは事実！

というか、信玄が塩をもらったお礼として謙信に送ったとされる「

塩留めの太刀」が現存します。

ホントに嘘なの…？

因みに、信玄は謙信が関東管領を貰い「上杉」を名乗っていたことが嫌で、「長尾」と旧姓で呼び続けたらしいです。

私は「塩留めの太刀」の存在からこの逸話信じてるんですけど…。

皆さんはどうでしょう？

二十一 番槍 独眼竜の懐刀（前書き）

伊達政宗の懐刀です！

某スタイリッシュ英雄アクションゲームに言つと……「竜の右目」
……？

二十一 番槍 独眼竜の懐刀

「うわぁあー！右目！右目がぁ！」

今でこそ奥州を治める独眼竜伊達政宗だが、小さい頃患った天然痘の毒が右目に回り、失明した。

それから数年後…。

立派に成長した彼の右目に異変が起きた。

「殿、その右目、最近飛び出して来ましたな。見えないのなら必要ないのでは？」

独眼竜の懐刀と言える存在の、片倉景綱が言った。

天然痘を患って以来、光を失った政宗の右目が飛び出てきたのだ。

「んゝ。そうだな。天然痘のせいだろう…。両目見えれば天下も簡単に取れたろうに…」

「その目なのですが、戦で敵に掴まれたらどうするつもりですか？」

「…ほう。よし！小十郎！取れ！」

「ははっ！」

小十郎…すなわち、片倉景綱は静かに動じた様子もなく腰から短刀

を取り出した…。

二十一 番槍 独眼竜の懐刀（後書き）

片倉（小十郎）景綱は、初代「小十郎」ですね。

天然痘の影響で飛び出してきた伊達政宗の右目を切り取ったのは景綱らしいです。

ただ、政宗が自分で目に短刀を刺したっていうのと、政宗が景綱に取れと命令したというのがありまして、どっちが正解かわかりません。

しかし、右目の切除に景綱が関わったことは間違いなさそうです。

本文ではですね、そのまま書くと「残酷な描写あり」タグ貼らなきゃいけなくなりそうだったので、途中で切りました。

中途半端でスイマセン…。

度胸あるお人だったんですね、片倉景綱は。

皆さんは、小十郎と景綱どっちで呼ぶ派ですか？

二十二番槍 鳴くまで待った狸様2（前書き）

今回はあの方が自分の腕を信用し過ぎたために起きた事件です。

二十二番槍 鳴くまで待った狸様2

「よしできた！これが紫雪^{しっせつ}よ！すごい効き目の風邪薬よ！」

江戸城のとある部屋。

ここで今まさに調合したての薬を手にとり、満面の笑みを浮かべる老人がいた。

すでに將軍の位を譲って大御所となっている彼の名は、徳川家康。

趣味は薬の調合。

「次は何を作ろうかな？万病円にしよう！」

そう言って、新しい薬を作り始めた。

それからしばらくたった…。

薬のレパートリーも増えたある日…。

「おー！これが、タイの天ぷらかー！美味い！美味すぎる！」

しかし…。

グリュリユリユ…。

「腹が…痛い…。い、医者を呼べ…。それから…万病丹を…。あれは食中りに効くんじゃ…。あと…わしの最新作…銀液丹も…持つてこい…。あれは、何にでも効く…。!」

家康は、自分で作った薬を飲んだ。

すると、症状は善くなっていった。

しかし、家康の担当医は…。

「家康様、自己流の治療は止めてください。私が的確な治療をしますから…」

家康に薬を飲むのを止めるように言った。

「んだと!?!わしの薬が効かぬというか!もういい!貴様など、流罪じゃ!」

担当医を島流しにした。

その数ヶ月後…。

家康は、この世を去った。

死因は胃ガン。

あの日の腹痛は、食中りではなかった。

二十二番槍 鳴くまで待った狸様2（後書き）

家康は、薬の調合が趣味でした。

万病円は虫下し、紫雪は風邪薬、八味丸は精力剤など、いろんな薬を作ってたらしいです。

中でも、銀液丹は恐ろしい薬で、材料がヒ素や水銀。

これが病気に効くわけなろうが！
死んじゃうべや！

なので、本文では「何にでも効く」とごまかしました。

家康は、自作の薬の使用を止めると言った医者をも島流しの刑にしたそうですよ。

そりゃ止めるよ…。

恐らくですが、家康が「タイの天ぷらを食べ過ぎて死んだ」と言われるのは、そのタイミングで胃ガンになったからだと思います。

因みに、家康愛用の乳鉢や乳棒が現存します。

二十三番槍 幻の忍者頭（前書き）

今回は忍者です。

火遁の術！はーっ！

二十三番槍 幻の忍者頭

「よっ！うんしょっ！どーよ！俺の身のこなし！」

只今、敵の城に忍び込んでいる忍者が1人。

彼は、一般には風魔小太郎と呼ばれている。

今日は、情報を集めるために城に潜入したのだ。

しかし…。

「そこにいるのは誰だ！？」

敵に見つかってしまった。

「ああん？」

それに動じず、敵を睨みつけた小太郎。

「ひ、ひいゝ…！うわああ！！」

敵は怖がって逃げて行った。

というのも…。

小太郎は、身長2メートル超え、筋肉超ムキムキ、目が逆さまで、牙が4本あり、オマケに髭が濃い。

そんな人間に睨まれたのだ。

逃げるのも無理はない。

任務を終え、帰ろうとした時だった。

「おい！いたぞ！あいつだ！捕まえろ！」

沢山の敵に囲まれてしまった。

「ちっ！ヤバいか？予算の関係でやりたくはなかったが……」

小太郎は一度深呼吸をした。

そして……。

「火遁かとんの術！！」

小太郎は足元の落ち葉に火を付けた。

煙で目眩ましをした。

しかしあまり効果はなく……。

次に石を手に持った。

「土遁の術！」

石を敵に投げつけた。

敵は怒って小太郎に切りかかった。

「やべっ！必殺！金遁の術！」

小太郎は、大量の小判をばらまいた。

「おー！金！金だ！拾えー！」

「これは俺の金だ！譲らんぞ！」

小太郎は、その隙に逃げ出した。

「おー小太郎。よく帰ってきたな！」

小太郎の主、北条氏政が言った。

「俺の遁術にかかればこの位簡単だぜ！」

小太郎は胸を張って答えた。

二十三番槍 幻の忍者頭（後書き）

風魔小太郎とは、北条の忍者隊を率いるリーダーが代々名乗った名前だそうです。

有名なのは5代目。

変装が得意で、誰も本当の姿を見たことがないらしい…。

一般に伝わる小太郎の容姿は、身長が2メートル超え、筋肉ムキムキ、目がつり上がって4本牙がある。

もう人じゃないよ！
おっそろしいよ！

小太郎は、「遁術」と呼ばれる忍術を使っていたそうです。

火遁………燃えるものを見つけて火をつけて、炎や煙で敵を困らせる荒技。

水遁………水音を立てて注目をそっちにずらす荒技。

土遁………土や石などを敵に投げつけて目眩ましにする荒技。

木遁………草木に隠れたり、樹木を切り倒したりする荒技。

金遁………金目の物をバラまいて逃げる最終手段とも取れる荒技。

特に某だつてばよ！のマンガのように水で竜を作ったり口から火を吹いたりするのが火遁や水遁ではありません。

現実はそんなもんです。

二十四番槍 三河物語の頑固者（前書き）

今回はですね、今までと比べると知名度は落ちる武将です。

知ってる方は少ないかも…。

二十四番槍 三河物語の頑固者

「殿は誰よりもずる賢かったから天下人になれたんですよ！」

自分の主君である徳川家康にとんでもないことを言い放ったこの老人。

家康の家臣の中でも「頑固ジジイ」として名高い大久保彦左衛門である。

「……………」

そんなことを言われた家康は、黙り込んでしまった。

さて、それから暫く経ったある日。

家康の統治が上手くいき、平和な日々が続いていた。

「ふう…。ワシももう先が長くない…。今のうちに、ワシの子孫に向けて、教えを書き記しておくかのう…」

そう言つて、彦左衛門は筆を取った。

「出世する人間はどんな奴なのかを書いといてやろう。後の時代にリーマンショックが起きても、大丈夫なようにな！」

そして、つらつらと書き出した。

『出世する人間シリーズ』

？殿を裏切る人間

？卑怯なことばかりして他人から嫌われる人間

？世渡り上手な人間

？節約が得意な人間

？行くあてが無く、出身すらよく分からない人間』

「まあ、こんなもんじゃな…。次は出世できない人間シリーズじゃ！」

そう言うと、彦左衛門は一度置いた筆を再び持ち直した。

『出世できない人間シリーズ

？裏切らないで真面目に殿に仕える人間

？戦だけに生きる人間

？人付き合いが悪く、賄賂とかやらない人間

？物事の損得を考えない人間

？殿に長く仕え、忠節を貫く人間』

そして、最後にこう付け加えた。

『我が子孫よ！出世できなくて飢え死にしようでも、出世を望んで卑怯なことをするなよ！どうせこの世なんか、花火だ！露だ！一瞬で終わるんだ！人は一代だが、名は末代じゃ！名に泥を塗るようなことはすんなよ！』

彦左衛門は静かに筆を置いた。

「これで…大久保家も…安泰…じゃな…」

そして、満足げに眠りについたのであった。

最期の頑固ジジイは、微笑んでいた。

二十四番槍 三河物語の頑固者（後書き）

これが今に伝わる「三河物語」です。

作者は大久保彦左衛門という頑固な老人です。

三河物語の中身は本文で書いたやつです。

「裏切る者は出世する」って最初見たときは驚きました。

私には、彦左衛門が言いたいことがよく分からないんですけど…。

三河物語の中身、ひねくれてるんですもん！

まあ、これが書かれたのは江戸の平和な時代ですから。

戦国時代にこんなことが言えましたかね？

「裏切る者は出世する」とか書いたらそれだけで謀反人扱いされそう…。

因みに、彦左衛門が三河物語書いてからすぐに亡くなったかどうかは知りません。

本文では物語性を持たせてみただけです…。

本当は「四の太刀」として書こうかとも思ったんですが、止めまし

た。

深く調べるとなかなか良い話になるかも知れませんね。

本文中の「リーマンショック」発言はなんとなくですので、気にしないでください…。

以上！大久保彦左衛門でした〜！

二十五番槍　うつけの宝（前書き）

本文とはまるで関係ないのですが、血天井ってホントにあるんですね…。

養源院のが一番生々しいらしいです…。

写真見てないのですが、手足がくつきり見えるらしいです。

案内の方が、「ここが顔で…。ここが足で…。」と教えてくれるらしいです。

…私、そーゆーの苦手なんですよね…。

血天井って、都市伝説かと思ってたので…。

さて、オツカナイ話の後は心暖まる？お話を！

二十五番槍 うつけの宝

とある冬の出来事。

「うんしょっ！ふう〜！信長様〜！ミカンですよー！」

こちら、信長の小姓、森蘭丸。

13歳のころから信長に仕えている。

小姓とは、殿の身の回りの世話をする、言ってしまうえば雑用係である。

最も、信長と蘭丸の間には、主君と小姓以上の関係が成り立っているのだが…。

「おー！お蘭！ミカンありがとう！」

信長が蘭丸に礼を言った。

「足りなくなるといけないので、もう少し持ってきますね！」

そう言うとき蘭丸は、ミカンを乗せた台を抱えてやってきた。

「お蘭！お前の力では危ないぞ！転ぶぞ？無理するなよ！」

「大丈夫ですよ！このくらいなら！ってうわ！？」

バランスを崩して蘭丸は転んだ。

「あらら…。言わんこつぢゃない…」

そう言つて、信長は蘭丸がミカンを拾うのを手伝った。

「あはは…。信長様の言う通りでした…」

暫くして、部屋に信長と蘭丸しかいなかったとき、信長は蘭丸に声を掛けた。

「お蘭、先ほどは、ワザと転んだな？」

「あつ！気付かれてましたか…。信長様の仰ったことが外れては申し訳ないと思ひまして…。ごめんなさい！」

「お前というやつは…。お蘭！一つ聞くぞ！天下と同じくらい…。いや、それ以上に大切な、わしの宝は何だと思う？」

「…もしかして…。わ、私でしょうか？」

信長は何も言わず、ただただ優しく笑った。

二十五番槍　うつけの宝（後書き）

信長と蘭丸は、衆道（知らない方は調べてくださいね？）の關係にあつたとも言われてるんです。

そんなわけで、お互いにお互いを思いやる気持ちは強かったのだと思います。

信長の言う通りになるようにわざと転んだり…。

「わしにとつて、天下にも変えられない大切な宝はを当ててみよ！」と信長に聞かれた蘭丸は「私でしょうか？」と返したといいます。

普通の関係じゃ、なかなかこうは答えられないよ？

互いに心から信頼できる關係っていいですね！

私もそんな關係の友人が欲しいです…。

あ、衆道じゃないよ？

そんな面も含めて、歴史から学ぶことは多いと思います。

歴史は生きる上での過去問だー！
と思つてます。

二十六番槍 深すぎる妻への愛（前書き）

利休七哲の一人、細川忠興と細川ガラシャ（玉）の愛の深さを良く伝えている逸話です。

早めに言っておきましょう！

あとがきが驚きの長さです。

二十六番槍 深すぎる妻への愛

1600年9月15日。

関ヶ原。

「うおおおおおおお！」

どこからともなく関ときの聲が挙がり、関ヶ原の戦いが始まった。

「うああああ！！おらおらおらあ！」

そんななか、敵陣に真っ先に飛び込んだ東軍の武将がいた。

細川忠興。

彼にとって関ヶ原の戦いは特別なものだった。

前日の夜……。

忠興の本に一報が入った。

「細川ガラシャ、自害。西軍の人質となるのを拒み、小笠原少斎の介錯を受ける」

「忠興よ……。真に、残念であつた……。今度の戦はお前の助けが無くても大丈夫じゃ！一度、大坂に戻って、ガラシャ殿の顔を……」

忠興を呼び出した徳川家康は、わざと笑顔を作り、忠興に大坂に帰ることを勧めた。

「家康様…！そのお心だけで、私は…充分ですよ…。今更、帰る訳には行きません。明日は、私に先鋒をやらせてください！必ず、家康様の勝利に…！我が妻、玉の敵を討たせてください！」

自分でも気付かないうちに、忠興は叫んでいた。

今、忠興はガラシャの為に戦っている。

細川家の為に、命を捧げてくれた最愛の妻の為に！

忠興の活躍もあり、関ヶ原は東軍の勝利で終わった。

戦後、急いで豊前に戻った。

そして、ガラシャの葬式をキリスト教のやり方で行った。

「玉よ…。苦しかったであろう…。キリスト教では自害は許されない。しかし、細川家のために命を捧げてくれた…。そんなお前を…私は幽閉した…。しかも、お前の唯一の支えであるキリスト教すら奪おうとした…。本当は…私が一番お前を理解してやらなければならなかったのに…！玉よ…。玉よ…！」

忠興の目には、涙が浮かんでいた。

「玉…。愛してるぞ…！」

その後、忠興は正室を持つことはなかった。

二十六番槍 深すぎる妻への愛（後書き）

なかなか…心暖まるお話じゃありませんでしたか…？

ではでは。

それをぶっ壊していこうじゃありませんか！

まず、ガラシヤは自害が禁止されているキリスト教徒。

そこで、家事である小笠原少斎という人に胸を突かせて討ち死にするという形で最期を遂げました。

その知らせを聞いた家康は忠興に大坂に戻ることを勧めるも忠興は拒否。

東軍の先鋒として大活躍しました。

因みに、「ガラシヤ殿の顔を…」とか本文では書いちゃいましたけど、骨すら残らなかつたらしいです。
焼けちゃって…。

その後、キリスト教方式でガラシヤの葬式を行ったそうです。

月命日には必ず供養をして、正室も生涯取ることはありませんでした。

ここまでが本文のお話。

細川忠興を良い人としておきたい方はこの後は読まないことをお勧めします…。

本文は忠興の良い面だけを拾ってみたので…。

忠興はですね、明智光秀の娘であるガラシャが正室のため、自分まで謀反人にされるのが嫌でガラシャを幽閉しました。

他の説もありまして、女好きの秀吉に美しいガラシャを見られたら何されるか分からんから、見つからないように幽閉した…。とも言われています。

また、ガラシャからキリスト教を奪おうとしたこともありました。

ガラシャの喉に刀を突き付けて…。

それでも拒否されたので、ガラシャと一緒にキリスト教に入った女性の髪を切って寺に追放しました。

寺って…。仏教だよ…？

さらにさらに、ガラシャが「あなたは生きなさい！」と千世という忠興の息子の嫁を逃がしました。

すると忠興は、「何でおめーはガラシャと一緒に死ななかつたんだ？」と。

息子に離婚を命令しました。

それを拒否されると、嫡男から降ろしました。

あははあ…。

性格に難があるけど、ガラシヤを愛していたのには変わりはないんですよ？

だって、ガラシヤとちよつと喋った庭師に嫉妬して、その庭師を斬ったくらいですから…。

人間、愛が深すぎると何するか分かんないねえ…。

それ以上に…。

長いあとがきだねえ…。

二十七番槍 尾張のうつけ革命児2（前書き）

暗い話こそ明るく！

というか、普通はドン引きするよつなお話です。

二十七番槍 尾張のうつけ革命児2

1573年。

姉川。

ここで、数多の雄々しき魂が散った。

姉川の戦い。

ことの発端は…。

「我が親友、朝倉義景を攻めるとは！おにいちゃん！話が違っんだぜ！？」

そう言ったのは信長の妹を嫁として、信長の義理の弟となった浅井長政。

因みに彼、織田信長に攻められている朝倉義景の大親友。

つまり、親友と兄が喧嘩してる状況。

「俺は、最近おにいちゃんになったおにいちゃんよりも、昔から親友の義景の味方になるんだぜ！覚悟だ！おにいちゃん！」

浅井長政、信長を裏切る。

「あー！お、弟が裏切った！？是非に及ばず…！ぶっ殺す！」

信長がキレて、起きたのがこの姉川の戦い。

キレた信長は強かった。

「はっ！織田軍13段の結界展開！もう負けないぜ！」

しかし、浅井長政も強かった。

「1枚。2枚。3枚。…結界突破！」

しかし、勢いもそこまで。

11枚突破したところで力つきた。

「おい義景、長政、ついでに長政の親父！どうなるかわかってるよなあ？」

信長は指をポキポキと鳴らしながら三人に歩み寄った。

「ヒイ〜！」

「お、おにいちゃん…！？」

「わしの出番少ない！？」

3つの悲鳴がこだました姉川。

そして翌年の正月。

信長は家臣の前でとんでもないものを取り出した。

「うふふう…。僕信長です！秘密道具！どくろゝ！」

信長がお腹の三次元ポケットから取り出したそれは、未来のアイテムどころか、金ピカのどくろだった。

「これが義景の！こつちが長政の！で、これが…名前忘れた…。長政の親父の！久…久ま…。忘れた！」

「久政です！」

家臣に突っ込まれてしまった。

「よしみんな！アケオメゝ！コトヨロゝ！これを肴に酒を呑め！」

信長は笑顔で叫んだ。

「ほおう！こりゃゝ素晴らしさ酒の肴だねえ！」

家臣たちはそれを見ながら酒を呑んだ。

二十七番槍 尾張のうつけ革命児2（後書き）

姉川の戦いで浅井・朝倉を滅ぼした信長は、翌年の正月にスゴいものを取り出した。

それは、金箔押しのお3つのドクロ。

義景、長政、久長と札が貼ってあったそうです。

それを酒の肴にしたらしいですね。

他にも説があります。

ドクロを杯に酒を呑んだ説。

ドクロの上に杯をくっつけた説。

因みに、この逸話は、ドクロが現存しないことや、出展が偽りが多いことで有名な資料（「信長記」だったと思います）なので、嘘なんじゃ？との見方が強いです。

古代中国三国志では、敵の大将のドクロを杯にすることがあったそうです。

なので、それを知っている人間が日本の戦国時代に当てはめた的な見方もできます。

しかし…。

信長ならやりそう…。

あの方は容赦ないからねえ…。

因みに、「織田軍13段の構え」が史実です。

二十八番槍 裏切り金吾（前書き）

戦国、ちよつと怖い話。

あなたは呪いを信じますか？

二十八番槍 裏切り金吾

「小早川あ！この秀吉様の恩を忘れた人面獣心め！3年の内に呪い殺してやる！」

関ヶ原の戦いで唯一自害した武将、大谷吉継はそう叫んで腹を切った。

それから暫く月日が流れた。

大谷に「呪い殺す」と言われた小早川秀秋の精神は、完全に崩壊していた。

「町の人みんな、俺のことを裏切り者だと言う…。貴様らだって、鉄砲撃ち込まれたら裏切るだろ！クソが！」

小早川は苛立っていた。

こんな時は酒や女で気を晴らそう。

こんな時は。

こんな時は…。

「秀秋様、酒や女は程々にして、政治をやってください！あなたは、国の主なのですから！」

我慢の限界に達した家臣が小早川に言った。

「あのさ、お前、家臣だよね？そのくせに、俺に口出しすんじゃないよ！失せろ！」

小早川は、その家臣を処刑した。

「おい……。このまま秀秋様の下にいて俺たち大丈夫なのか？」

「ダメだ！俺、抜けさせてもらおう！」

「俺も！」

いつしか、家臣たちは小早川家を出て行った。

そして、ある日。

「ぎゃー！わー！あー！吉継……………！」

小早川秀秋、狂死。

それは、関ヶ原の戦いの3年後のことだった。

二十八番槍 裏切り金吾（後書き）

小早川秀秋は、兄からも劣っており、時より奇声をあげていたらしい…。

何があつた？

ニツクネームは「あほう様」。

そんな彼、自分の裏切りが天下を決めたことを自覚してなかったと言われています。

大谷吉継が、裏切った小早川軍とぶつかった後自害した時には「恩を忘れた人面獣心」とか「3年以内に呪い殺す」とか色々言われたみたいですよ。

結果、秀秋は関ヶ原の3年後に発狂して死んだみたいですけど…。

呪いが効いた…？

二十九番槍　ぬっぺふほふを捕獲せよ！（前書き）

本当にあったと言ひ難いお話です。

都市伝説的なものなので、笑って流してくださいな！

二十九番槍　ぬっぺふほふを捕獲せよ！

ここは駿府城。

天下を手中に収めた徳川家康は、平和な日々を送っていた。

そんなある日…。

「家康様！侵入者が現れました！」

家臣が家康の所に駆け寄って来た。

守りが堅い城への侵入者とあらば、ただ者ではない。

「どんな姿をしていた？」

家康は家臣に聞いた。

「それが…腕があるのに、指が無いんです。子供くらいの大きさの…」

そこまで家臣が話した時だった。

「あっ！あれです！あいつですよ！」

家臣が指差した方を見ると、確かに何か立っていた。

しかし人ではない。

顔と胴体に区別がなく、顔から手足がはえている生き物だった。

「今捕まえますんで！よっ！あれ！ほら！んしょ！」

家臣が何度飛びかかっても、スラスラ交わすその生き物。

「あ…あっ…」

声にならない声を出す家康。

開いた口が塞がらないとはまさにこの事。

「なんだそれは！？気持ち悪いから追い出せ！」

何とか家康は家臣に命令した。

暫くすると、家臣が戻ってきた。

「ふう〜…。やっと追い出せましたよ〜…」

「あれは何だったんだ…？」

「分かりません…」

後日、ふとした瞬間に、家康は自分の担当医に化け物のことを話した。

「おお！それは『ぬっぺふほふ』という妖怪ですぞ！百鬼夜行にも登場します。あれを食べると力持ちになれるのに…。逃がしちゃうのは勿体無いです…」

残念そうに担当医は言った。

「いや、キモくて食えないから！食わないから！キモいし！」

家康は見た目にやられていた。

二十九番槍　ぬっぺふほふを捕獲せよ！（後書き）

「ぬっぺふほふ」

検索すると出ますよ？

あれは食えないねえ……。

駿府城に出た妖怪のお話でした！

三十番槍 身分を超えた一致団結（前書き）

「戦国物なんだから戦について書けよ！」

「うちゅ…わかった」

こんな感じのやり取りがありまして…。

で、初の戦物。

戦は難しいんですね。

武将喋らなくても話進むし…。

あの…。

初なので、かなり多目にミテクダサイ…。

三十番槍 身分を超えた一致団結

ここは信濃、上田城下。

1600年8月末。

上田城主である真田昌幸の言葉が掲げられた。

「この上田の地を防衛する！手柄をあげた武士・町人・百姓身分関係なく敵の首一つにつき土地を百石与えよう！」

防衛戦に町中の人に協力を求めるものだった。

というのも、十五年前に一度追っ払った徳川秀忠が、再び上田城を攻めてきたのである。

秀忠軍は3万8千。

昌幸軍は2千5百。

力の差は歴然。

そこで、町の人に協力を仰いだ。

首一つで百石ともあり、沢山の人 came。

上田城に秀忠軍到着。

その前に、自ら出て行った昌幸。

「高砂や、この浦舟に帆を上げて、この浦舟に帆を上げて、月もろともに出で潮の、波の淡路の島影や、遠く鳴尾の沖過ぎて、はや住吉に着きにけり、はや住吉に着きにけり」

昌幸は、高砂の舞を踊ってみせた。

「んだあんにやろー！馬鹿にしゃがって！やっちまえ！」

秀忠軍は昌幸の挑発に乗った。

「はっ！バカ共め！全ては作戦通りよ！」

昌幸は城中に引いた。

「逃がすな！行くぜ！」

秀忠軍の攻撃が始まった。

「お、おい！止めろ！まだ命令は出してないぞ！」

秀忠の制止を誰も聞き入れなかった。

一方昌幸軍。

「皆の者！今だ！お粥用意！放てー！」

みんなで作ったお粥を武器に、町の住民は戦った。

「熱っ！うあ！お粥だと！？」

「うああ！て、撤退！撤退だ！」

秀忠軍が撤退を開始した。

しかし…。

「逃がすか！神川の堰を切るのだ！」

あらかじめ、堰で神川をせき止めていた。

秀忠軍を上手く神川へ誘導し、堰を切って奴らを流す為に！

狙い通り、秀忠軍は壊滅。

秀忠は、関ヶ原の戦いに間に合わなかった。

三十番槍 身分を超えた一致団結（後書き）

第二次上田城の戦い。

城下の住民も、みんな城にこもって戦いました。

お粥で攻撃したり、竹槍で攻撃したり、伏兵使ったり…。

真田はやっぱり強いんですね！

神川の堰をぶつ壊して徳川秀忠の兵を流したり…。

仕舞いには、城下に火を放ちました。

城下の住民を城に入れたのは火を放つためだったんですね。

本当は、このお話はですね、十七番槍として投稿する予定だったのですが…。

上手く書けないので放置してました。

そしたら、某五円玉様に「戦書けよ！」って言われまして…。

下手くそながら、投稿させて頂きました。

一番言いたいののは、「第二次上田城の戦いの武器はお粥だった」です。

では！

戦の逸話もたまに入れて行きたいと思います！

歴史絵巻第一幕 L e t · s G o 城巡り〜大阪城〜（前書き）

初の架空物語。

本当は、別に短編として上げようかと思っていた作品です。

実体験をもとに書いてみました！

第1段は大阪城です。

歴史絵巻第一幕 L e t ' s G o 城巡り〜大阪城〜

「先輩！今日はどこの城に！？」

彼女は村上乙葉。むらかみおとほ

いわゆる歴女。

高校1年生。

顔も可愛いのだが、歴史の話しかしないため男と付き合ったことはない。

「ん〜。まずは大阪城だな！」

彼女は焙烙晴美。ほうろくはるみ

高校2年生。

彼女も乙葉と同じく歴女。

乙葉より重症で、ひたすらに戦国武将を愛する。

この2人、高校では「歴史研究部」という部活に所属している。

部員は現在2人のみ。

今日は、部活動の一環として、大阪城に向いた。

勿論、部費で。

「ほえ〜！これが大阪城ですかっ！デカイですねー！」

乙葉が感心したように声を上げた。

「ここは石山本願寺の跡地なのだ！そこに建てられたのが戦国最強にして最凶の城！大阪城！」

晴美の声も大きかった。

「最強にして…最凶…？」

「うむ！難攻不落の城だったが、夏の陣、1665年の落雷、戊辰戦争と何度も焼けている！運が悪い城なのだ！」

「じゃあ…この天守は…？」

「これは昭和6年のものだ！」

どんどん天守に近づいていく二人。

幅100メートルの堀、青屋門、極楽橋。

数々の見所を通り過ぎて天守の下へ。

「極楽橋がコンクリートなのは残念だ！」

「再建ですから仕方無いですよ…」

料金を払い、天守へと向かう二人。

「あー！私あの井戸知ってます！黄金水ですよね！？秀吉が金を投げ入れた井戸ですよ！」

興奮気味に語る乙葉。

「ふふふ…甘いぞ乙葉！その逸話は偽りぞ！」

人差し指を乙葉に突きつけて叫んだ晴美。

「な、なんですって！？そ、そんな…」

乙葉はその場にひざまずいた。

天守入り口手前、大砲が置いてあるのに気付いた晴美。

「なんだ…？国崩しか？」

大砲を眺めながら晴美が呟いた。

「これは…。『お昼のドン』ですって…。時報に使ってたらしいですよ」

説明看板を読みながら乙葉が言った。

「知らんな…。行くぞ！いざ天守へ！」

「ああつ！せ、先輩！待って下さいよぉー！」

慌てて晴美を追う乙葉だった。

「何故…？何故エレベーターが…？これでは只の博物館ではないか
」！」

「城の内部に憤られても困ります！それより、黄金の茶室見ましょ
うよー！」

「大阪城天守閣所蔵の黄金の茶室…。あれはレプリカだっ！」

「なんとっ…！」

またしてもひざまずいた乙葉。

「あれは現存しないのだ…」

二人は天守閣の展望までやってきた。

「よっ！いざっ！真田丸！ってあれ…？」

戸惑う乙葉。

「ん？どした？乙葉？」

「…真田丸が…。真田丸がありません！」

涙目で叫んだ乙葉。

「あはははは！無いよそんなの！徳川が焼いちゃって！まあ、あつたのはあの辺りかな？」

晴美は指で丸く示した。

「うう…真田丸…」

二人は天守閣を出た。

「楽しかったな。今度はもっとゆっくり回りたいよ。真田の抜け穴とか、真田が討ち死にした神社とか！仲間の介抱してるところを襲うとは…！許すまじ徳川軍！」

徳川軍への怒りを露わにした晴美。

「大丈夫です！真田は討ち死にしません！淀君と秀頼を連れて九州まで無事に逃げましたよ！討ち死にしたのは穴山さんです！真田の影武者ですよ！」

「そうか…。そうだな！九州に真田の子孫と言われる方もいるし！」

「はい！」

二人の絆がまた深まった。

帰りの電車の中。

「あゝ！蛸石と火薬庫見忘れたー！」

「次回のお楽しみですね！」

「…そうね！」

二人は部費での旅を楽しんだ。

歴史絵巻第一幕 L e t ' s G o 城巡り〜大阪城〜（後書き）

登場人物の名前が二人とも村上水軍関連だと見破ったあなたはもう引き返せません！

「村上」はストレートですが、「焙烙」はわかりにくかったですかね？

村上水軍の武器に、焙烙玉^{ほうろくだま}という手榴弾があっただですよ！

私自身、大阪城の火薬庫とか蛸石とか、重要なもの見逃してます…。

修学旅行だとゆっくりできませんね…。

次は…小田原城かな？

では！

暇なときに時々入れていきたいと思います。

三十一番槍 兵衛、Zの絆（前書き）

サブタイトルの元ネタ分かる方々？

史実だと兵衛、Zではなく二兵衛です。

三十一番槍 兵衛、Zの絆

「報告！報告！有岡城にて、荒木村重、信長に対して謀反！」

家臣から秀吉の元に火急の知らせが入った。

「うぬぬ…！村重！ぶっ殺す！」

憤る秀吉。

それをよそに一人の男が口を開いた。

「私に行かせて下さい」

黒田官兵衛だった。

（ふふふ…私の交渉力を2割程使えば村重など簡単に説得できるさ
！）

しかし…。

帰って来ない。

待てども待てども帰って来ない官兵衛。

「官兵衛の野郎！裏切りおったな！奴の嫡男の松寿を殺せ！」

そう命令したのは織田信長。

信長は裏切ったと言っているが、その頃官兵衛は、村重に捕まり投獄されていた。

唯一の心の支えはフジの花。

過酷な状況だった。

「信長様、松寿の処刑、私にお任せを！」

名乗り出たのは秀吉の軍師であり、官兵衛の友人でもある竹中半兵衛だった。

処刑を任された半兵衛だったが、松寿を殺したりはしなかった。

官兵衛が裏切る訳がない。

そう思っていた。

1年後、有岡城は落城。

牢屋から足が不自由になった官兵衛が救出された。

官兵衛は裏切りなどしなかった。

このことが証明されたのだった。

信長が、官兵衛を呼び出した。

「官兵衛よ…。わしはお前が裏切ったと思い…。松寿を…松寿を殺してしまったんじゃない…。許せ…許せよ官兵衛…」

「そっ…そんな…。私は…なんのために…」

そんなとき、傍にいた家臣の一人が二人に言った。

「そのことなんです…。松寿様は、半兵衛様がこっそりかくまっで、今も元気に育ってますよ！」

半兵衛は自分の屋敷で松寿を育てていた。

「半兵衛っ！あやつめ…！」

「半兵衛…。我が友よ！」

二人は泣きながら喜んだ。

「半兵衛に礼を言いたい！今どこにいるんだ！？」

官兵衛が聞くと、家臣の顔が濁った。

「…昨年、病の為に…。半兵衛様はもう…」

「……………半…兵衛…」

官兵衛は竹中家を生涯大切にしていたのだった。

三十一番槍 兵衛、Zの絆（後書き）

竹中半兵衛と黒田官兵衛の友情物語でした。

仲良かったみたいですな。

天才軍師二人組み。

本文中で突然出てきた松寿は後の黒田長政です。

サラッと流しましたが、フジの花を心の支えにしていたのは史実なんですよ。

荒木村重が官兵衛を殺さなかったのは、あやつがクリシタンだったから、なるべく殺生を避けたからだと言われています。

また、官兵衛が自害しなかったのも、クリシタンだったかららしいです。

地味な部分でも歴史を変えてるんですね、キリスト教は。

まあ、キリスト教のせいで、ヨーロッパとの戦争一歩手前まで行ったのですが、それはまた別の機会に。

官兵衛は、生涯で一度も死罪を言い渡したことが無いんですって！

私、官兵衛好きですよ？

歴史絵巻第二幕 L e t · s G o 城巡り〜小田原城〜（前書き）

「先輩、意外と私たちの出番チャチャツと回ってくるんですね」

「何でも、作者が旅行記を書きたいらしいんだ！」

「ああ…。そういうことでしたか…」

「また明日辺り私たちが登場するかもよ？」

「作者、何ヶ所城行つたんでしょうね？」

「6箇所だ！」

「じゃあ、6話はやるんですね？」

「いや、1話で2つ紹介する回がある予定だそうだ！」

「じゃあ5回か…」

「「しばらくお付き合いください！」」「「

歴史絵巻第二幕 L e t ' s G o 城巡りゝ小田原城ゝ

「やって来ました！小田原ー！」

「おおっ！いきなり天井には小田原提灯がつ！」

小田原駅の改札を出たところで、ハシャぐ二人の女子高生。

先輩の焙烙晴美と、後輩の村上乙葉。

高校の歴史研究部に所属している、歴女である。

今日も部費をふんだんに使い、部活動という名の旅行に来た。

「小田原楽しみだったんですよ！」

乙葉がテンション高めに言った。

「何故だ？そりゃ、北条早雲が大森から奪い取った小田原城があるから、楽しみなのは分かるが…。村上家は小田原に縁があるのか？」

晴美が聞いた。

地味に城の説明が入っているのがいかにも晴美らしい。

「いえ、別に縁も縁も縁も縁もありませんよ。ただ、去年来たんですが、天守閣に入らなかったの…。」

「縁」の字4連弾。

それよりも気になるのは…。

「去年来たの？」

「はいっ！ただ、お金無くて天守閣には…」

（あれ？天守閣って、入場料300円くらいじゃなかったっけ？）

事前に調べておいた晴美には一抹の疑問が湧いた。

二人は歩いて小田原城に向かった。

「天守閣を見る前に、周りを散策しよう！」

晴美が言い出した。

乙葉はそれに快く賛成した。

まず見つけたのが国の有形文化財にも指定されている「清閑亭」。

「ここは…なんですか…？」

淒く静かな古民家といった雰囲気建物。

そう。見た目古い民家なのだ。

「ここは…黒田長成侯爵の別邸で…。大正時代の建物だ！」

パンフレットガン見。

晴美もなんだかよく分らないらしい。

「黒田長成…？黒田長政の何かですか？」

乙葉が聞いた。

「ん…。みたいね…」

今度は携帯電話ガン見。

調べたらしい。

「でもここ…。眺めが良いし、静かだし、なんだかくつろげますね！」

清閑亭の二階からは、海が見えた。

「ほう…。ここ、小田原城の三の丸の中らしい。外にあった土は土塁だったのか…」

乙葉の話をまるで聞かないで晴美はパンフレットとにらめっこ。

「…！乙葉！ここ、静かだし眺めも良いし、風も気持ち良くて最高の場所だな！」

「先輩、さっきそれ私も言いました…」

二人は清閑亭を出て再び小田原城の周りを歩いた。

はちまんやまごかくひがしくるわ
八幡山古郭東曲輪、はやかわぐちふたえとばり
早川口二重戸張、こうだくちもんあととるい
幸田口門跡土塁、大手門跡の
鐘…。

城の周りだけでも結構見るものはあった。

そしていよいよ天守閣へ。

「このシヨウブ畑…。何か違和感が…」

乙葉が言った。

天守閣の下、妙に細くて長いシヨウブ畑があった。

「よく気付いたな！これは水堀の跡だ！」

晴美が叫んだ。

「やはりっ！」

「深さはメートル単位だったらしい！」

「なんとっ！」

いざ天守に入ろうとしたとき、晴美がある物を見つけた。

「あの檻は…。何を飼ってるんだ？」

「ああ！あれはサルですよ！去年もいました！」

小田原城の天守の下では、ニホンザルが飼われている。

「イヤミだ…」

晴美が呟いた。

「え？ああ…。小田原城落としたの、秀吉ですものね…」

乙葉も苦笑した。

天守閣の中。

「うわー！初めて入りました！」

テンションが高い乙葉。

中には甲冑や見たことある肖像画、刀などが展示されていた。

そして展望台。

「あ！あの山は！」

乙葉が勢いよい指差した方向には、一部木が剥げた山があった。

「あれが…石垣山一夜城…！」

感動のあまり泣き出す乙葉。

そんなにか？

「官兵衛の知略が伝わる一夜城な！実際、一夜で作ったわけではないけどな…」

「一夜で木を切り倒して敵に見せつけたんですよね！」

「そう！城自体は1ヶ月くらいだっけか…」

二人は小田原城を後にした。

「模擬天守だったり、ほとんどが再建だったけど楽しかったな！」

満足げな晴美。

「はいっ！再建なのは仕方ないですよ。関東大震災でやられていますからね…」

「まあ、そうだが…」

「あっ！先輩！もうあと一箇所寄らせて下さい！」

突然乙葉が叫んだ。

「いいけど…どこ？」

「駅前のお土産屋です！蒲鉾せんべいが絶品ですよ！」

蒲鉾が名物の小田原。

そこであえて蒲鉾本体ではなくせんべいをチョイスするあたり乙葉である。

「いいだろう！」

「ありがとうございます！」

二人はしばらく買い物を楽しんだ。

歴史絵巻第二幕 L e t ' s G o 城巡り〜小田原城〜（後書き）

清閑亭はオススメスポットです！

居心地最高！

小田原城は海が近くてなかなか良かったですよ！

私が行ったときは台風が海上にあって、晴れてたけど波が高かったですよ…。

小田原城でサル飼ってるのはイヤミとしか思えない…。

結構広い空き地みたいな所もありました。

本当は門なんかも紹介したかったんですけどね。

是非一度行ってみてくださいな！

近くに北条氏政の墓もありますし！

遺構はよく残ってると思います。

蒲鉾せんべいは超オススメ！

安いですしね

駅前のお土産屋が並んでるところで買えます。

次からはもの凄い地味な城に入ります。

とりあえず次回は松山城です。

埼玉の……。

三十二番槍 河越城を救出せよ！（前書き）

合戦シリーズ第二段です！

三十二番槍 河越城を救出せよ！

「河越城が、おうぎがゆえすぎともさだ扇谷上杉朝定に囲まれただと！？」

小田原にいた北条氏康は知らせを聞いて叫んだ。

「皆の者！これより河越城救出に向かう！指揮はわしが取る！」

氏康は、8000の兵を率いて河越城へと向かった。

そこまでは良かったのだが…。

敵となる上杉軍の数は85000の大軍。

それを知った氏康は、朝定に手紙を書いた。

『河越城を明け渡すことを条件に、停戦しませんか？』

これを見た朝定は大笑いした。

「あははは！馬鹿め！力の差は歴然だ。貴様らが負けているのに、停戦などわけの分からぬことを…。敵は怖じ気づいているぞ！北条をぶっ潰すチャンスだ！」

朝定は、25000の大軍を北条氏康が陣を置いた砂久保に送った。

「何とっ！？上杉が攻めてきたっ！？んゝ…。撤退！撤退だっ！」

戦うことなく氏康は撤退してしまった。

「氏康め！この上杉を恐れたかつ！」

勝利を確信した朝定だった。

その夜。

「鎧は着るな！紙の羽織りを着ろ！そして首は絶対に取るな！斬り捨てよ！」

氏康は、軍にそれだけを命令した。

そして日付の変わった午前0時。

「行けっ！」

氏康が刀を突きつけた先には、上杉軍が眠っていた。

突然のことで慌てる上杉軍。

「一番隊は切り崩せ！二番隊は三番隊が突っ込んだら逆進しろ！三番隊も斬り込め！」

正確に采配を振るう氏康。

四方八方から北条軍が襲い掛かる。

暗い中、紙の羽織りがよく目立った。

「引き上げよ！反撃を受けるな！」

氏康は早々に兵を引いた。

この奇襲により、上杉朝定は討ち取られた。

「氏康様、これほどの戦ができるのに、何故停戦を申し込んだのですか？」

家臣が氏康に尋ねた。

「朝定が停戦を受け入れる訳がないのは最初からわかっていた。戦うことなく撤退したことも手伝って、朝定はわしが怖い気づいたものだと完全に油断しただろう」

「じゃあ…全ては、上杉を油断させるための…！」

「そういうことじゃ。次は松山城じゃ！」

氏康は松山城をその足で攻略し、小田原城へと凱旋した。

三十二番槍 河越城を救出せよ！（後書き）

河越夜戦。

扇谷上杉朝定と北条氏康の戦いです。

戦わずして撤退したり、わざと停戦しようと申し出たりして、朝定を油断させた氏康。

全てが作成通り。

氏康は油断した朝定に夜襲をしかけて勝利しました。

氏康は、兵に紙で作った白い羽織りを着せて夜でも目立つようになり、合言葉を決めて同士討ちを防いだりしました。

河越城の戦い、ほとんどが私の地元から近いのでテンション上がります（笑）

因みに、今は河越ではなく川越です。

三十三番槍 ザコと小物（前書き）

今回は私が大好きな逸話です。

さすが片倉さん！

三十三番槍 ザコと小物

「…参りました」

いきなり出て来て土下座しているこの男。

服装が凄まじい。

なんてったって真っ白な死に装束にでっかい十字架を背負っているのだ。

伊達政宗、豊臣秀吉に恭順する。

「さて、片倉さん。5万石あげるから豊臣に来ないかい！？」

政宗の重臣、片倉景綱を引き抜こうとしている背の低い猿顔の男、豊臣秀吉。

「…嫌」

景綱は秀吉の誘いを断った。

「断つただと？秀吉様を侮辱したなっ！」

これにキレた秀吉の重臣、福島正則。

すぐに景綱のところに行って行った。

「鳥無き島のコウモリが来たぞ！」

正則はそう叫んだ。

鳥は強い者、コウモリは弱者を指す。

つまり、「奥州は強い奴がないから政宗なんかも領土を広げられた」って意味。

カチンッ！

景綱も頭に来た。

「ちんちくりんのリンリン！」

それだけ言い放った。

ちんちくりんは背が低い秀吉のこと。

リンリンは猿の首輪の鈴。

つまり、「猿顔のチビの家来ごときがっ！」という意味。

しかし正則は…。

「な、なんだ？ちんちくりん？リンリン？意味が…わからん！」

景綱をバカにしたつもりが逆に悔しい思いをさせられた正則だった。

三十三番槍 ザコと小物（後書き）

ちんちくりんのリンリン（笑）

「鳥無き島のコウモリ」って、信長が長宗我部相手に言った言葉だったような…。

そろそろ松山城に行った時の書きこいかなと思ってます。

歴史絵巻第三幕 L e t · s G o 城巡りゝ山田城・松山城ゝ（前書き）

眠い…。

頑張つて書きました。

この娘たちの旅、いつまでやりましょう…。

とりあえず、私が城巡りを続ける限りは書きます！

歴史絵巻第三幕 L e t ・ s G o 城巡りゝ山田城・松山城ゝ

「やって来ました！森林公園ゝっ！あれ？森林公園…？」

テンション高く叫んだものの、何故こんなところに来たのかわかっていない村上乙葉。むらかみおとは

「ふふふ…今に分かるさ！さあ中に入るぞ！乙葉！大人二枚で800円だ！」

乙葉にチケットを買う命令を出したのは焙烙晴美。ほうろくはるみ

この二人、同じ高校に通い、歴史研究部の先輩と後輩。

晴美が2年で乙葉が1年である。

今日も部費を使って城巡り。

しかし、やってきたのは何故か埼玉県滑川町にある国営森林公園。

乙葉が戸惑ったのも無理は無い。

乙葉が買ってきたチケットを渡して森林公園の中へ入った。

入ってすぐにある噴水の脇を抜けて歩いていく。

ちよつと進み、山の中へと続く階段の前で晴美が立ち止まった。

それに合わせて乙葉も立ち止まる。

「あっ！」

乙葉が、階段の横に立てられた小さな看板を見て声をあげた。

「山田城…？」

看板には確かにそう書いてあった。

「そう！山田城跡！森林公園の中にも城があったのだ！」

胸を張る晴美。

早速、階段を上り始めた二人。

「この土がちょっと高くなってるやつが土嚢ですかね？で、こっちの溝が堀でしょうか！？」

興奮気味の乙葉。

「恐らくは。で、この広い平らな場所に何かあったのだろう！しかしこの城…」

偉く曖昧な晴美の言い方。

彼女自身、この城について詳しくは知らなかった。

「先輩！あそこに看板がつ！」

晴美の話を遮るように叫んだ乙葉が指差す先には、確かに看板があった。

その看板には、山田城についての解説が書いてあった。

「戦国時代の出城…。小高大和守父子及び贄田撰津守が居城にした…。小田原攻めの時に前田利家に落とされた…。なるほど。いやしかし…。」

看板を読んだ晴美は首を傾げた。

「どうしましたか？先輩？」

晴美の様子を見て乙葉がきいた。

「いや、この城…。妙に傾斜が急な所にあるな…。それに、城内に郭を作ろうとした跡がある…。もしかして、未完成で落とされたんじゃない？」

「先輩！そんなことまで分かりますか！凄いです！」

「妙に傾斜がキツイのも、削る作業の途中だったからだろうな。鎌倉街道を抑える重要な城も、未完成で終わったんだな。」

それを聞いて驚いた表情をする乙葉。

「鎌倉街道ですか？」

「うん。ほら！」

晴美が指差した場所には、確かに道があった。

「この道が…？」

「鎌倉街道らしい。マップによるとな」

晴美は、乙葉に入園時に貰った園内マップを見せた。

二人は森林公園を出た。

「未完成の城なんて面白かったですねー！看板と堀と土塁しかなかったけど…。次回はどこに行きましようか？」

乙葉が晴美に聞いた。

「次回？ふふふ、乙葉よ！今日はもう1ヶ所行くぞ！」

「マジですかー！？」

嬉しそうな顔をする乙葉。

二人はバスで森林公園駅まで行き、そこから電車で隣駅の東松山へ。

そしてバスで吉見百穴前までやってきた。

「吉見…百穴…？先輩！私、戦国以外はあんまり興味が…」

「何を言つか乙葉！この吉見百穴も実は戦国に関係あるのだ！まあ、まずは観光がてら見てみようではないか！」

はい、と返事をして百穴へ。

「因みに、観光マップ等には『吉見百穴』とでてるが、地元民は『よしみひゃくあな吉見百穴』と言うらしい。私は、ケツでもアナでもどっちでもいいと思うけど…」

さらっと言った晴美。

「…先輩。下品なことは言わないでくださいよ…」

少し顔を赤くした乙葉だった。

「で、ここは何ですか？戦国とどう関係が…？」

乙葉が聞いた。

戦国以外は守備範囲外の乙葉には、ただ崖に穴が無数に開いているだけのようには見えない。

「これは古墳時代の後期に作られた墓だ！ちよつと後にいろいろ合つて完璧な姿とは言い難いけど…」

「古墳時代！？いろいろ…？」

無数の穴があいている崖には、いくつか洞窟があった。

その洞窟を指差して晴美が言った。

「これ、日本軍が戦争中に開けた穴なんだって…。ろくなことないよね…。日本軍…」

ちよつとテンションが下がった晴美。

「そうですね…」

「まあ、ここをぶつ壊したのは日本軍だけではないんだがな！」

いつものテンションに戻った。
起伏の激しい性格である。

「実は…あの武田軍が…！このすぐ横！松山城を攻めるために使ったのだ！」

一つの山を指差して晴美が叫んだ。

「松山城って…！関東を抑えるためにあの北条・上杉・武田で奪い合ってたっていうあの城ですかっ！？」

「そうだっ！」

ここにきてやっと吉見百穴まで来た理由がわかった乙葉。

そうともなれば…。

「なるほど…。山、背後は川…。これは城を建てるのに抜群の場所ですねっ！」

すぐに地形を観察し始めた。

「武田軍がこの松山城を攻め落とすとき、吉見百穴から地下トンネルを掘る手段を使っただが、行きついた先が水源で逆に武田軍に被害がでたんだ。でも、それのおかげで城内は水が無くなり、武田軍は勝利したって逸話がある！」

「第二の意味の水攻めですね！」

「そうだ。よし！では、松山城に行こうじゃないか！」

「はいっ！」

吉見百穴から城の周囲を歩いて行った。

しかし、入口が見つからない。

入口と言っても、見た目は何も残っていない只の山。入りやすそうな場所を見つけているだけなのだが…。

「ここしかないですね…」

乙葉が示したその場所は…。

岩室観音。

地蔵が祀つてある建物があるが、奥に通じている。

通じているとはいえ、水が流れる足場の悪い急斜面を登ることになるのだが…。

乙葉がはふと、岩室観音の説明看板を見た。

「なにになに？天正時代に石田三成が夏山城を落した時に一緒に本堂が燃えた…。つてえ！？三成！！」

看板を読んだ乙葉がはためらうことなく急斜面を登って行った。

それに続く晴美。

「この感じ…。もしや松山城へ続く当時の切り通し…」

いろいろ考える余裕はあるようだ。

急斜面を登り終えた二人。

少し奥には石碑が建っていた。

「松山城跡」と彫られた立派な石碑だった。

「ここで…北条や上杉や武田が…！そう思うと感動です！」

目がつるつるしてる乙葉がそこにはいた。

「…あっちも行ってみよう！ここは本丸みたいだし、他の郭とかも」
「！」

晴美が促した。

「はいっ！」

「うあ…。雑草が多くて…。つてギャー！毛虫！毛虫！」

毛虫で騒ぐ乙葉。
苦手らしい。

ところどころ案内看板が立ててはあるが、それも雑草に埋もれそう。
看板以外は一面雑草である。

「兵どもが夢のあととは、よく言っただけですねえ」

そんなことに妙に感心する乙葉をしり目に晴美は背負ってきたリュックをあさっていた。

そして取り出したもの…。

「う、うあー！先輩！何持ってきてるんですかあ！」

乙葉は思わず悲鳴に近い声をあげてしまった。

それもその筈。

晴美の手に握られていたもの…それは。

「これか？これは鎖鎌だ！雑草を着るのに便利かと思って！」

「物騒です！危ないです！しまってくださいい！」

「物騒ではない！あの大化の改新で蘇我入鹿が討たれた武器も鎖鎌だったのだ！」

「今自分でとんでもない武器持ってますアピールしましたよ！」

結局、晴美は鎖鎌をしまった。

その後二人は春日郭、門の跡、堀、土塁などを見て松山城を出た。

「…先輩。あんな大変な思いして急斜面登らなくてもここにご丁寧
に入口ありましたね…」

普通に「松山城入口」という大きな看板が立っている階段を見つけ
てしまった二人だった。

「まあ、切り通しも見れたし！良しとしようじゃないか！」

「そうですね！って…。切り通し？」

「初めに登ったあれ、切り通しだぞ！？」

「ウソー！？全然意識しないで登っちゃったじゃないですかあ…！」

肩を落とす乙葉であった。

歴史絵巻第三幕 L e t ' s G o 城巡り〜山田城・松山城〜（後書き）

山田城に関しては情報が少なすぎて…。

森林公園の中です。

紅葉見るついでにどうでしょう？

松山城は石碑があります。

岩室観音から登るのはオススメしません。

切り通しが見たいなら別ですが、危険ですので。

普通の道、山からおりた後で知りました…。

今回からしばらくは、跡しか残ってない城がやたら出てきます。

私が行った城、大阪と小田原以外は遺構巡りですので…。

三十四番槍 優れた武勇が仇となる（前書き）

乙葉

「最近、本編の更新ペースが遅いですねえ。先輩？」

晴美

「なんか、良い逸話がねー！、とか作者が言ってたぞ」

乙葉

「ああ…。ネタ切れなんですネ…」

晴美

「だな。まあ、まだ超有名所しか手を出してないから大丈夫だろうけど」

乙葉

「だといんですけど…」

晴美

「今回は誰の逸話だ？」

乙葉

「戦国最強の息子です！」

晴美

「なるほど…！」

乙葉

「そういえば私たち、本編の前書き初でしたね」

晴美

「だな…」

晴美&乙葉

「では、始まります！」

三十四番槍 優れた武勇が仇となる

甲斐の虎、武田信玄の四男として生まれた武田勝頼。

四男ながらも嫡男となった。

そんな彼は、戦において数々の武功を上げている。

初陣では取っ組み合いの末に敵大将を撃破。

ある時は敵の騎馬兵が5騎で攻めてきた際に、単騎で迎え撃ったりもした。

上杉謙信の1万5000の大軍に800の兵を率いて突っ込んだりもした。

まさに最強の兵だった。

しかし…。

「勝頼様は、大将となるには致命的な欠点がある」

そう言ったのは山県昌景。

彼も武田家重臣の一人だった。

それから暫く後、武田信玄死去。

勝頼が家督を継いだ。

…そして、長篠合戦。

5月8日。奥平貞昌が率いる500の兵が守る長篠城を勝頼率いる武田軍が攻めた。

「空堀が3重に…。反対側は2本の川…。うざっ！」

「大丈夫！俺強いし！あの父もできなかった高天神城を落としたのも俺！俺は父より強い！行くぜー！」

勝頼は重臣の意見など殆ど聞かず、長篠城に応援に来た信長と戦うことにした。

家臣たちは湧き水で乾杯して出陣し、大半は信長の鉄砲に散っていた。

2時頃には武田軍は1万5000の軍が5000にまで減っていた。

「山県…。武田軍は無敵だ…。お前も行け！信長を討ち取れ！」

山県に勝頼が言った。

「もう武田は完膚無きまでにやられた！負けたのが分からぬのか！」

山県は自分の主君に対して叫んでいた。

「わしが殿を…。しんがり。その隙に、殿は逃れてください！さらば！」

こうして、山県昌景も戦場に散った。

「負けた…。俺が…、武田軍が…、騎馬隊が…」

その後勝頼は天目山の戦いで切腹。

武田は滅んだ。

山県言う「大将としての致命的な欠点」を信長に見抜かれてしまった結果だった。

三十四番槍 優れた武勇が仇となる（後書き）

ん。

長篠合戦は単品で書いた方が上手くいくのかな…？

武田勝頼は一人の兵としては優秀でした。

しかし、大将になると信玄の家臣より自分の家臣の意見を優先したり、自信満々で油断したり。

山県さんの言葉がよく分かります。

大将の器じゃなかったんですね。

因みに、勝頼は切腹してますが、彼の名言の中には「追い詰められて腹を切るより敵と戦って果てたい」と言っているのがあります。

え…？

あれ…？

あんまり自信満々で油断しちゃいけない！ってことですね！

（最近ネタが無くてね…）

四の太刀 何でこんなの象った？（前書き）

久しぶりの「太刀」シリーズです。

今更ながら、このシリーズは「小説」を無視して書きたいと思っています。

ブログとか、活動報告の延長的な？

今回は結構調べてから書きました。

色んな甲冑や兜について書いてみました。

四の太刀 何でこんなの象った？

戦国時代の兜や甲冑。

それぞれに戦国武将の個性がアピールされていました。

例えば、本田忠勝の鹿角が2本ドーンと立てられた「鹿角脇立て兜」。

井伊直政の「井伊の赤備え」。

これは直政が赤い甲冑を身に付けていたことが由来です。

そして伊達政宗の三日月。

このように、強さのアピールとして甲冑や兜は使われることが多かったのです。

しかしまあ、中には「何故こんなのを!？」とツツコミたくなるようなものもあります。

先ほど紹介しました井伊直政。

彼の馬印（大将の居場所が分かるようにするための目印）は何と金色のハエ取り器形。

敵をハエのように打ち取るという直政の意気込みが感じられます。

さらには前田利家の兜。

ナマズの尾鰭を象ったもの。

これは、ナマズは地震を起こす生き物。
大地を揺るがす俺にピッタリ！
という利家の気持ちが全面に出てます。

じゃあナマズ全体を象れば？とは言ってはいけません。

まだあります！

黒田長政の兜にはなんと銀色のハマグリがくっついていています。
もう意味が分かりませんわ…。

細川忠興の兜には、畳んだ手拭いを頭に乗つけたのをモチーフにしたのがあります。

温泉気分なんでしょうか…？

実用性重視のもあります。
織田信長の兜にはフルフェイスのヘルメットがあります。
スペインの重装備騎兵用だそうです。

南蛮には凄いものがあつたんですね…。

加藤清正の兜も凄いです！

小さな鹿の角が前側にくっついてます。
後ろ側には何と卒塔婆！

「南無妙法蓮華經」と書いてあります。

ある意味怖い…。

それから、有名な直江兼次の「愛」の兜。

これ、愛染明王と愛宕権現の「愛」の字らしいです。
あいぜんみょうおう あたごんげん

「民への愛」を表しているなんて説もありますけどね。

さらには狙ったとは思えないような兜もありますよ。

松平信一のネコミミ兜。

山内豊昌や明智光春のウサミミ兜。

ウサギは後退しないし、耳が大きいから情報がたくさん集まるなんて意味らしいですけど…。

「萌」狙ってますよねえ…。

他にも色んな装具があります。

上半身の右側半分だけ服脱いだ姿を象った甲冑とか…。

個性豊かな装具の一部を紹介させていただきました。

四の太刀 何でこんなの象った？（後書き）

武将たちの装具って面白いですよ〜。

なんか、ムカデ象ったのもあるみたいですよ。

斬られても死なない！的な意味で。

いや、ムカデは斬られたら死ぬし…。

流石にミミズじゃカッコ悪いのかな…？

とにかく！

兜や甲冑は調べていくと面白いですよ！

ネコミミとウサミミは私のツボですわ〜。
最初見たときは驚きました…。

まあ、あれ付けてたのは男なんですけど…。

広すぎる装具事情をお送りしました！

「こんなのもあるぜ〜」的な情報提供をお待ちしております！

三十五番槍 姉川の兄弟喧嘩（前書き）

リクエスト頂きました！

ありがとうございます！

というわけで、早速書いてみました。

まだまだリクエスト承ります！

三十五番槍 姉川の兄弟喧嘩

「浅井長政と同盟結んで義理の弟にしたぜ！これで安心して朝倉を攻められる！」

自らの妹であるお市を嫁に出す形で、浅井長政と同盟を結んだこの男。

織田信長である。

お市が長政と結婚したことによって、信長は長政の兄となった。

実はこの結婚。

朝倉と仲が良い浅井が、朝倉を攻めた時に敵になつては厄介だと考えた信長の作戦であつた。

そして、信長は予定通り朝倉を攻めた。

これが金ヶ崎城の戦いである。

戦いは順調そのもの！

間もなく朝倉は落ちるだろう。

そう思っていた。

そこへ…。

「信長様！お市様から贈り物です！」

家臣が差し出したお市から信長への贈り物。

小豆が入った、両端が縛られている袋。

「……………？これだけ？」

「はい……」

信長も意味が分からなかった。

しかし、それから数分後。
意味を理解した。

「浅井長政が寝返りました！」

家臣の知らせが入った。

「うおー！この浅井長政、最近おにいちゃんになったおにいちゃんじゃなくて、昔から仲良しの朝倉君にお味方いたすうー！パパがそうしろと言つのでえー！パパ怖いのでえー！」

これにより、信長は挟み撃ちにされる形となった。

「なっ……。さっきの市からの袋はこういう意味か……。小豆は織田軍。袋の鼠か……。是非に及ばず！撤退だ！殿は猿がやれ！」
しんがり

羽柴秀吉に殿を任せて信長は撤退した。

これが金ヶ崎の退き口である。

信長は逃げ切り、京都にいた。

御所でのんびりと過ごしていたのだ。

しかし、浅井、朝倉への怒りは確かに心の中で激しく燃えていた。

「まとめてぶつ殺す！舞台は姉川だっ！徳川殿にも応援を要請せよ！」

一方、浅井長政は。

「きつとおにいちゃんは攻めてくる…。こうなったら！朝倉君！協力しよう！舞台は姉川だっ！」

金ヶ崎城の戦いから約90日後。

1570年6月28日。

姉川を挟んで二つの軍が睨み合った。

「家康殿！自ら来て頂けるとはっ！しかも5000の兵を率いるなんて！」

感動する信長。

「あはは！まあ、今うちの兵は8000ですから、かなり無理しましたが…。信長殿！この戦、絶対勝ちますぞ！」

「勿論！」

片や姉川の対岸。

「朝倉景健あさくらかげたけ！只今参上！はあっ！」

元気よく現れたのは景健だった。

彼は、朝倉家の当主である朝倉義景の遠い親戚であり家臣である。

「はっ！？景健？義景じゃないの？」

長政はがっかりした。

こちらはあの信長を裏切つてるといふのにっ！

何故当主が出て来ないんだよっ！

姉川を隔てて暫く睨み合った両軍だったが…。

「よしっ！行け！」

家康の攻撃命令によって睨み合いは終わった。

姉川の戦いが始まったのだ。

徳川軍は有利だが、織田軍は押されていた。

浅井軍の攻撃を受け止めたのは何と親衛騎馬隊。

本陣が最前線だったのである。

信長は陣を１３段に構えていた。

しかし…。

「ははは！どうだおにいちゃん！我が家臣の磯野員昌いそのかずまさの活躍で、既に１１段まで突破したぞ！後２段！覚悟！」

信長まで後少し！

浅井軍の勝利は目前に見えた。

「うぬぬう…。長政めがっ！よいかっ！敵にこの首渡すなよ！切ぶ…」

刀を抜いて腹を切ろうとする信長。

それを慌てて止める家臣。

そこに知らせが入った。

「信長様！前衛部隊が帰ってきました！」

実はこの前衛部隊。

浅井の城である横山城を攻めていた部隊。

その数3000。

「よしっ！横槍にかかるのだ！」

信長が命令を下した。

正面から来る浅井軍を、帰って来た前衛部隊と朝倉軍を抑えた徳川軍で、両脇から攻める形を取ったのだ。

これにより形成逆転。

浅井軍は敗走。

朝倉軍は戦意喪失。

長政はなんとか小谷城に逃げ込んで助かった…。

合戦後の姉川は真っ赤に染まっていた。

「長政は取り逃がしたか…。まあ良いわ。今のあやつは無力。簡単に打ち取れるわ…」

信長は、その日のうちに將軍の足利義昭を訪ねた。

この義昭、アンチ信長で、信長包囲網を作ったことで知られている。

「今日、浅井・朝倉をぶつ倒したんよ。野も畑も死骸だらけだよ。こんだけの敵を倒せる俺にかなう奴っているのかね？ねえ？」

信長は自分の強さをひたすらアピールした。

「ぐぬう…。信長め…。くそっ！」

信長を倒せる自信が無くなっていく義昭であった。

それから3年後。

朝倉義景は家臣の裏切りに会い既に亡き者となっていた。

残るは浅井。

信長は小谷城を攻め落とした。

「私も…。私も一緒に…。長政様と共に…。あの世まで…。」

お市は長政と運命を共にする気でいた。

「ダメだ！そんなことしたら、残された娘たちはどうなる？大河ドラマにならないじゃないか！…懸命に生きよ！市よ…！」

「…はい。生きて、娘を大河ドラマの主演にしてみせます！」

「達者でな…！」

長政、自刃。

これにて、ようやく浅井軍討伐が完了した。

小谷寺には、お市が長政を弔うために植えた松の切り株が未だに残っている。

三十五番槍 姉川の兄弟喧嘩（後書き）

あんたはどうして最後にふざけるかね？

と言われそう…。

大河ドラマ「江戸姫達の戦国」が今日最終回だったのでつい…。

磯野員昌の活躍についてですが、異論があります。

「浅井三代記」に書かれているんですが、これは浅井の活躍を目立たせるために極端に書いたとか、徳川の活躍を目立たせるために織田軍の劣勢を極端に書いたとか言われてます。

因みに、信長が切腹を覚悟したってのも、これが出展です。

「その日のうちに將軍を訪ねた」って本文では書きましたが、他の資料では「手紙を書いた」になってたりなんだかよく分かりません。

手紙の内容は「野も畑も死骸ばかりに候」。

おっかない手紙だね。

いずれにしても、將軍に自分の強さを見せ付けたことは事実みたいです。

もし長政が信長を裏切らなかつたら…については、また次回にでも！

リクエスト作品ということで、いつもより長めに書いてみました。
引き続きリクエスト承ります！

五の太刀 もしもあの時…金ヶ崎城の戦い…（前書き）

金ヶ崎城の戦い。

浅井長政が織田信長を裏切ったことで、信長は敗走した。

では、もし長政が信長を裏切らなかったら…。

考えてみました。

あくまで私の考えです。

実際どうなってたかは分かりませんから…。

「三十五番槍」の特別編という感覚で読んでくださいな！

五の太刀 もしもあの時…金ヶ崎城の戦い…

「信長様！浅井軍がこちらに向かっています！」

金ヶ崎城の戦いの最中、家臣から信長のもとに知らせが届いた。

「なっ…！まさか、長政が裏切ったのか？是非に及ばず！撤退だ！」

撤退を宣言した信長。

しかし…。

「この浅井長政、親愛なるおにいちゃんにお味方いたすうー！決して同盟は裏切るな！パパがそう言ったのでえー！」

長政は信長に協力するためにやってきたのだ。

「おおっ！我が弟よ！では行くぞ！朝倉をぶっ潰せ！」

浅井・織田連合軍が朝倉を攻めた。

瞬く間に朝倉は消滅した。

その後も長政は活躍した。

その働きに、柴田勝家はただただ涙目になるしかなかった。

しかし…。

持ち前の要領の良さで出世を続ける羽柴秀吉。

信長の重臣は長政、秀吉、明智光秀となった。

そんな中、本能寺の変勃発。

信長が命を落とす。

中国大返しにより秀吉が光秀を討ち取った。

信長亡き後は、長政と秀吉が対立した。

そして戦となる。

言うなれば、秀吉対長政の賤ヶ岳の戦い。

実力でのし上がった秀吉と、信長の弟という地位でのし上がった長政。

この2人がぶつかる。

前田利家が秀吉側に付くことが予想される。

さらに、「賤ヶ岳の七本槍」の活躍を見るに、恐らく秀吉が勝利すると思われる。

万が一、長政が勝利しても疲弊して軍はボロボロ。

徳川家康の餌食となろう。

つまり、歴史は大きくは変わらない。

ただ、長政の名前は今より有名になったかも知れない…。

「わし、名前残せないの…？」

柴田勝家心の叫び。

五の太刀 もしもあの時…金ヶ崎城の戦い…（後書き）

もしもの歴史もなかなか面白いですね。

長政が裏切ろうが同盟を守ろうが、歴史はそんなに動きません！

書いてて柴田勝家の扱いには困りましたけど…。

恐らく秀吉は出世してると思いますよ…！

というわけで、もしも長政が裏切らなかったら…について考えてみました…！

三十六番槍 家康人生最大の敗北（前書き）

これもリクエストされた合戦です。

三方ヶ原が変換できなくて苦労しました…（苦笑）

合戦だと1ページじゃ収まりませんね。

まあ、問題は無いはずです！

三十六番槍 家康人生最大の敗北

1572年。

甲斐の武田信玄のもとに、一通の手紙が届いた。

『織田信長を討伐せよ!』

差出人は十五代將軍足利義昭。

將軍直々の命令とあらば、聞かないわけにはいかない。

「皆の者! 將軍様からのご命令じゃ! これより浜松に向かい家康を討つ!」

信長を討つ為には、同盟者の徳川家康を討つことが先決だと考えた信玄。

10月3日。

過去最大の2万5000の兵を率いて信玄は躑躅ヶ崎館つじがさきやかたを出た。

「信玄様、お体は大丈夫ですか?」

一人の家臣が信玄を気遣う。

というのも、本当は2日前に出陣する予定だったのを、信玄の持病が悪化したために先送りしたのである。

「ははは! 心配無用! もう大丈夫じゃ!」

とはいえ、本調子ではないのも事実であった。

しかし、自分が生きている間に上洛したい。

この思いが強く、今回は少し無理しての出陣となった。

一週間後。

信玄はついに徳川領に足を踏み入れた。

このことを知った家康は、兵を全く浜松城から出さずに籠城した。

徳川軍は1万1000。

数で適わないがための作戦だった。

このことが信玄を苦しめた。

信玄は会議を開いて家臣の意見を求めた。

「では、案のある奴は手を挙げよ！」

「はいはいはい！はい！はい！」

「小学生かつ！うるさいな！まあいいわ。では言ってみよ！」

「家康を無視して上洛しましょう！」

冷たい目線を送る信玄。

「そんなことしたら信長との交戦中に家康に背後を突かれるわっ！」

家臣の意見を退けた。

「他に！」

「はいっ！はいっ！はいはい！はいはいっ！」

「うるさいわ！まあよい。言ってみよ」

「いつそのこと帰りません？」

沈黙が広がる。

何言ってるんだこいつ？オーラが凄い。

信玄が沈黙を突き破った。

「実は、出陣直線到家康が謙信と同盟を結びやがった…。今甲斐に帰ったら謙信と家康の挟み撃ちにあうぞ！」

これで全てを理解した家臣たち。

今家康倒さなきゃ俺らマジでヤベーんじゃない！

出陣してから2ヵ月後の12月。信玄は大胆な行動に出た。

浜松城まで残り4キロ。

そこで突然進路を西へ変えた。

三方ヶ原台地を横切って、祝田の坂という細い一本道を進軍した。

「なっ…！あの野郎、徳川を…無視しやがった！許さねえ！絶対許さねえ！」

家康の怒りは頂点に達した。

「敵は一本道に入った！チャンスだ！行くぞ！」

自分を無視した信玄への怒り。

さらには、敵が地理的に不利な場所へ入ったこと。

家康は信玄を討つ最大のチャンスだと踏んだ。

そして、1万1000の兵を率いて浜松城を出た。

しかし、全ては信玄の計算通りだった。

「家康が出たかつ！全軍、急いで引き返し、三方ヶ原に布陣するのだっ！」

何と、信玄は祝田の坂を引き返し始めたのだ。

そして、追ってきた家康と三方ヶ原台地で激突した。

「全軍！魚鱗の陣を構えるのだ！」

信玄が命令した。

魚鱗の陣とは、大将を中心に、三角形に組む陣形。

側面や後方からの攻撃には弱いが、正面からぶつかる戦闘には強く、機動力もある。

まさにうってつけの陣形。

対する家康は…。

「どこまでも…どこまでもバカにしようって…！かくよく鶴翼の陣だっ！」

「…！！鶴翼ですと…？」

家臣は驚いた。

しかし、文句を言う時間はなかった。

鶴翼の陣は、V字型に兵を置く陣形。

中心が弱く、大将が狙われやすい。

敵を引き込んで囲んで倒す形の、迎撃タイプの陣形。

敵に数で勝るときに使う。

しかし、この時の兵の数は圧倒的に家康が下。

それでもこの陣形を取るほど、家康の怒りは大きかった。

「行けー！！」

12月22日午後4時。両者が逃げ場のない台地でぶつかった。

合戦は始めは徳川軍有利で進んだ。

しかし、次第に形成逆転。

2時間後には徳川軍は完全に崩れていた。

家康は僅かな家臣と共に戦場から逃げようとした。

家臣は家康を円になって囲み、ひたすらに守った。

「我こそは家康！この首取ってみやがれっ！」

そう叫んで死んでいった家臣を何人見ただろう。

自分を守ってくれる家臣が減っていく。

流石の家康も耐えられなかった。

「…もう腹が減って動けない…。みんな…すまないな…」

家康はいつになく弱気だった。

「なら、あの茶屋で小豆餅でも！」

家臣の勧めで、ほんの一時茶屋で休んだ。

しかし…。

「いたぞ！家康だっ！」

武田軍に見つかった。

家康の顔は一気に青ざめた。

慌てて逃げ出す家康を捕まえた男がいた。

茶屋の店主だった。

「おいっ！お殿様よお。無銭飲食とはいい度胸だなあ？」

家康は慌てて金を払った。

そして、命かながら城についた家康だったが…。

「……家康様…。脱糞しました…？」

武田軍の恐怖から、家康は脱糞した。

「これは…。焼き味噌だ！」

とっさにごまかした家康。

焼き味噌に謝れ。

「絵師を呼べ…。わしのこの姿を描かせよ！生涯戒めにするから…」

これが今に伝わる三方ヶ原戦役画像。

またの名をしかみ像。

家康が絵を描いてもらってるうちにも、武田軍対策は行われていた。

城門を開け、かがり火がたかれた。

家康の家臣、酒井忠次は太鼓を叩いている。

敗戦後の城としては異常な状況。

「これで…警戒して武田はこの城を攻めなくなるだろう！」

徳川軍はそう思い、この作戦を取った。

しかし…。

「…信玄様。どうします？あれ…」

「信長との戦もあるし…。捨て置け」

信玄は相手にもしなかった。

結果として、家康は命拾いしたのだった。

それからすぐに正月を迎えた。

家康は角松の先を斬って「武田を斬る」と願いを込めたのだった。

三十六番槍 家康人生最大の敗北（後書き）

三方ヶ原の戦いの前哨戦に「一言坂の戦い」というのがありまして。

本多忠勝が「家康に過ぎたる者」と言われた戦いになりました。

こっちも紹介したかったな…。

書いてて改めて分かる信玄の強さ…。

魚鱗の陣と鶴翼の陣。

家康は使う陣形をミスったんですね。

因みに、家康の身代わりになって討ち死にした家臣の中に夏目吉信という人がいて、石碑が立ってるみたいです。

お正月に、先が切れてるタイプの角松見たら、家康の影響だと思ってくださいな。

切れてないのもありますけど…。

以上！

三方ヶ原の戦いでした。

本戦以外はだいたい端折っちゃいました…。

土豪が寝返ったり、信長からの援軍が来たり…。

三十七番槍 家康に過ぎたる者（前書き）

三方ヶ原の戦いの前哨戦、一言坂の戦いでの出来事です。

三十七番槍 家康に過ぎたる者

三方ヶ原台地で家康と信玄が激突する2ヶ月程前のこと。

徳川領に入った信玄は、浜松城周辺の小さな城を次々と攻略していた。

「ぬう…。城が落とされるのを黙って見過ごす訳にはいかぬ！出陣じゃ！」

家康は3000の兵を率いて出陣した。

しかし…。

信玄は思いのほか目の前にいた。

「ヤバい！こんな少数では…。忠勝！殿を！」
しんがり

武田軍の追撃を受けた家康は、25歳の重臣、本多忠勝に殿を任せた。

結果、家康は無事に撤退することができたが…。

忠勝は窮地に立たされた。

前には武田家臣、馬場信房。

後ろにも武田家臣、小杉左近。

「やべえ…挟まれた…！」

忠勝目掛けて容赦なく放たれる弾幕。

「このままじゃヤバイ…。やるしかないっ！」

忠勝は覚悟を決めた。

そして…。

「行くぞ！小杉左近に突っ込めえ！」

敵への特攻。

忠勝にはそれしか残されていなかった。

特攻しながら忠勝は叫んだ。

「武士の情けを知っているお方と思う！どうかお名前を教えてください！」「さい！」

すると左近は…。

「わしは小杉左近という乱心者じゃ！そなたの迫力に押されて槍を出せなかった！わしの気が変わる前に行きなさい！」

そう叫び返して忠勝の進路を開けた。

「ふう…。何とかなった…」

忠勝は急いで家康を追った。

この戦いの後、誰が読んだとも分からない一つの詩が忠勝の名を知らしめた。

「家康に 過ぎたるものが 二つあり 唐の頭に 本多平八」

家康にはもったいないものが二つある。

ヤク（牛の仲間）の毛を使った兜と本多平八（忠勝のこと）だ。

この一句には、左近の忠勝への尊敬の気持ちが込められているという。

三十七番槍 家康に過ぎたる者（後書き）

家康に過ぎたるものね…。

忠勝には底無しの忠義心がありましたから。

ヤクの兜って同時は凄いものだったみたいです。

ヤクが日本にはいないから…。

牛の仲間です。

というわけで、「三十六番槍」のあとがきで少し触れた物語でした。

忠勝、飛び交う弾幕中でも怪我しなかったのかな…？

本能寺の変〜光秀のクーデター〜（前書き）

晴美

「今回の…いつにもまして読みにくい…」

乙葉

「あははは…それは…」

晴美

「？乙葉、何か知っているのか？」

乙葉

「はあ…。まあ」

晴美

「なんでだ？」

乙葉

「今回の…作者さんの処女作なんですよ…」

晴美

「おっ？何故そんな作品が…？」

乙葉

「かなり昔、作者さんがまだこのサイトを知らないころ、とある方に『小説書け』と言われてブログに書いたものなんですよ…」

晴美

「それでか…。完全にブログ仕様でここにコピーした訳か…」

乙葉

「はい…。題名含め何の編集もしていませんから…。ただコピーして貼っただけなんですよ。本当に…」

晴美

「何故に今頃そんな物を…?」

乙葉

「作者さん、今テストで…。今日から徹夜だそうなんです。でも何かあげたい…。そうだ！アレがある！みたいな発想で…」

晴美

「それでか…。手抜き!」

乙葉

「読み返すと黒歴史な作品らしいです…」

晴美

「恐るべき処女作…」

本能寺の変々光秀のクーデター

時は戦国。

1582年6月1日。歴史を変える大事件が発生した…。

明智光秀が主君織田信長を突然裏切り攻撃を開始した。

物語は、その3日前から始まる…。

本能寺の変3日前…。

明智光秀は京の愛宕山で連歌会を催していた…。

家臣たちは、みな歌を披露して行く。

「光秀様の番でございます。」家臣の一声に光秀が歌を読む。

「ときは今 あめが下知る 五月かな」見事な一句を披露した光秀。家臣も感心した。

連歌会が終わった後、光秀はおみくじを引いた。3回引くも、全て凶…。

「本能寺の堀の深さはどのくらいだろう…」光秀がつぶやくと家臣は驚き、「光秀様？今…何と…？」と光秀に聞き返す。しかし光秀は…「いや、何でもないんだ。」と返事を返した。

その後、「皆の者！亀山城に帰るぞ！」との光秀の命令により、明智軍は亀山城に帰参した。

「さて、今頃信長公は本能寺について茶会でも開いている頃だろう…。私が攻めることなど予想すらせずに…」

光秀は、心の中で時を待っていた。

そして、何人かの最も信頼できる家臣たちを招集。

「いいか、私たちはこれから本能寺に向かう！信長公を討つのだ！」
当然家臣は驚いた。

「み、光秀様！それは…謀反を…？」

「そうだ！私の決意は固い！この謀反、絶対に成功させる！」

その場にいた家臣たちは思ったと言う…。「光秀様を思いとどまらせることは不可能！」と。

「我が1万3000の兵たちに告ぐ…。敵は…敵は本能寺に有り
！…！本能寺にいる敵を抹殺するのだ！」

「御意！」全軍は、一言で返した。

寝静まった本能寺。

南は斉藤利三、北は明智秀満が物音一つしない本能寺を包囲した。

その音に驚いた信長は、「何だ！？家臣どもの喧嘩か！？」と最初はまさか自分の命が危ないだろうなんてことは思ってもいなかった。しかし…家臣の森蘭丸に状況を聞いた瞬間、一気に信長の心は変わった。

「信長様…明智光秀の…謀反です…」

「敵は主殿にいるぞ！本堂などとは囲んでも意味が無い。」

光秀の指示もあり、迅速に信長の寝どこは包囲された…。

「ここに…誰がいるんだ？徳川家康か？」家臣は思っていた。
その矢先…

「光秀！なぜこんなことを…！うつけがー！」信長が叫ぶ。

「何故って…。分からないのですか？あなたが私に抱かせた数々の
憎しみが！」光秀がゆっくりと言った。

「はて…？何かしたっけ？」信長は本当に忘れていているらしい。

「あれ…？覚えてないの…？なら教えてあげましょう。私のもう一人の主君、朝倉義景様を滅ぼした後…あなたは義景様の頭を盃にした。それだけではない…。私がトイレに行こうとしただけで、あなたは私の首を槍で突こうとした！さらに…」

「もういいよ！長くなるだろ！でも…あれだ、光秀。秀吉よりも可愛がってあげただろ！褒美も沢山やったし。」光秀の言葉を遮った。

「そんな事、もう忘れました。今は…あなたが兎に角憎い。私は、一夜でもいい。天下が取りたい！あなたを討ち、私が天下を取る！」
「行け！安田作兵衛。信長公に止めを！」光秀の命令が下った。

信長も、鎧などつけずに弓で応戦。しかし、3発放った所で弓が壊れてしまった。仕方なく槍に持ち替えて攻撃するも…。

「うおおおおお！我、安田作兵衛！お命頂戴！」

「うあああ…ぐっ…。」信長はこのときの攻撃で手に重傷を負ってしまった…。「信長様ー！ー！」蘭丸の叫びが虚しく響く…。

「蘭丸！ここに火を放て！奴らに我が首を取らせるな！」信長が命令する。

「…御意にございます…。」蘭丸は、言われたとおりに本能寺に火を放った…。

その直後…。「うぐっ…。うう…」蘭丸討ち死に。

燃え盛る本能寺の中、一人信長はつぶやいた…。

「是非も無し…」

「あははは。信長公も、あんがいあつけないものだ。これで、これで天下が私の物に！」

わずか1時間足らずで天下目前の人間は散った。

「次は…織田信忠だ…」

光秀がつばやくと、全軍を二条御所に向かわせた…。

「撃てー！ー！」

光秀の一声で全軍鉄砲を打ちこんだ。
弾が雨のように降って来る。

「それがしも…ここまでか。兄を追うとしよう。さらば！」
織田信忠切腹。

「やった。これで…これで私は完全なものとなった！最後の仕上げだ！豊臣秀吉を討つ！」

そう言う光秀は山崎に向かった…。

しかし…。山崎の戦いで天王山を取られた光秀は秀吉に大敗。

敗走中に…。

「おい！待てよ。貴様、明智光秀だな。良い獲物だ。お命頂戴！」
突然武装した農民に丈槍で襲われた。

「ぐはあ…。」

丈槍は胴体を貫通。光秀は悟った。

「これで我が命は終わりか…。はは…。それでも…いいか。本能寺でのことも…悔いは無い…。
心しらぬ 人は何とも 言わば言え 身をも惜しまじ 名をも惜しまじ」

これにて明智光秀自刃。

1582年6月14日57歳で永眠。

本能寺の変のわずか11日後のことであつた…。

本能寺の変々光秀のクーデター（後書き）

史実にこだわりすぎた…。ほぼ小説っぽさが無いですね。いろんな説を入れてつたら話しが噛み合わなくなりまして…。

光秀に天下取りの念があったことは確かです。「一夜であろうとも、天下を望むべきだ」などと言葉を残してますしね。

というか…あの時代天下望まなかった武将っていないんじゃない？

いろんな説を入れてつたら話しが噛み合わなくなりまして…。

これ以降は今の私が書きます。

去年の8月13日にブログにあげた小説でした。

…。

下手なんだよ！（今もだけど）

読みにくいですねえ…。

唯一ブログにあげた作品ですね。
もう二度とありません。

まあ、ただコピーしただけってこともあって、一部前に書いた逸話と被ってますね。

というか…読みにくいねえ。。。

さて、解説でもしますかな。

「敵は本能寺にあり！」

有名なセリフではありますが、光秀はそんなことを言っていない。

このセリフが書かれたのは、明治時代のお話です。

後世の作り話ってやつですね。

本能寺の変を起こした光秀に付いて行った家臣たちは、寺の中にいるのが誰だか知らされておらず、家臣たちは徳川家康だと思ったらいいです。

だからこそ成功した面もあると思います。

下手な文章ですねえ（だからそれは今も…）

次はちゃんとしたのを投稿しますので！

歴史絵巻第四幕 L e t ・ s G o 城巡りゝ小倉城・鉢形城ゝ（前書き）

乙葉

「まず作者からのお知らせ！前回の、『本能寺の変ゝ光秀のクーデター』は三十八番槍ではありません！」

晴美

「よしよし。そんなことより久しぶりに私たちの出番だぞ！乙葉よ！」

乙葉

「はいっ！噂によると新キャラが出ると…！」

晴美

「出るぞ！」

乙葉

「そんなあつさり…」

歴史絵巻第四幕 L e t ' s G o 城巡り／＼小倉城・鉢形城／

「先生！今回はご同行願いまする！」

右手を高らかに挙げて宣言するように叫んだのは村上乙葉。むらかみおとほ

高校一年生。戦国時代を愛する歴女。

「先生、今回はお願いしたいです」

乙葉に続き言っはつらくはるみたのは焙烙晴美。

高校二年生。乙葉の先輩。度を越した歴女。

ここはとある高校の社会科研究室。

今日もここで歴史研究部の活動は行われていた。
珍しく顧問も来ている。

「ええ…。それは構いませんが…。いつものように公共交通機関を
使えばいいのでは…？」

先生と呼ばれていたこの女性。歴史研究部の顧問である毛利由佳。もつりよし

顧問なのに歴史の知識はあまり無い。現在頑張つて勉強中。
しかし、彼女たちには追いつけない。

「いつか歴史の知識で部員に勝つ！」が目標の25歳の新任教師！

「いえいえ。車で行きたいんですよ!」

「そういうことですか!」

二人が言った。

「え?ま、まあ、いいですけど…。何ですか…?」

由佳先生は生徒に対しても敬語を使います。

「八高線が最寄駅なんですけど…。あの路線アテにならないので。しかも駅からメッチャ歩くんですよ!」

力が入る乙葉。

「アテに…ならない…?」

首をかしげる先生。

「はい。一時間に一本あることは稀な路線です!」

「ああ…。そういうことなら…!」

「「ありがとうございます!」」

二人揃ってお礼を言った。

翌日…。

集合時間よりも30分早く、学校の正門で待っている由佳先生の姿があった。

手にはスマホ。

ネットに繋いで検索するワードは「小倉城」。

必死に今日行く城の勉強中。

一生懸命な先生です。

「おっはようございませーす!」

「おはようございませーす!」

乙葉と晴美同時に登場。

電車が一緒だった。

「あ、おはようございます。早いですね…」

時計を見ると、集合時間までまだ20分ある。

「えへへー!」

笑って見せる乙葉。

「よしっ!揃ったので出陣しますぞお!」

晴美が叫んだ。

先生の車に乗り込み出発。

カーナビは小倉城を案内している。

道が空いていることもあって順調に目的地に近づいていった。

暫く絵に描いたような田舎道を走ると…。

『目的地に到着しました』

カーナビの案内は確かにそう言った。

しかし、目の前には川。

橋は無い。

カーナビを見ると、川の向こうに「小倉城」の表示がある。

「ええ〜…」

誰しもがカーナビに突っ込みたくなった。

「目的地じゃねー!」

仕方がないので、橋を見つけて川を渡り、それらしい場所を求めて車を走らせた。

しかし城への道が分からない。

そんなとき…。

「カーナビ的には、ここの真横なんです…」

そう言って、由佳先生が車を停めた。

そこは、寺の前だった。

「お寺…」

「行ってみる価値有りだな！」

「行くんですか!？」

3人は車を降りてお寺に向かった。

大福寺と書かれた門を抜けて奥へ行くと…。

「んっ！」

「あっ！」

「おゝ！」

それぞれ歓声を上げる。

3人の目の前には、「小倉城↓」と書かれた看板が立っていた。

矢印の先には細い山道が続いていた。

「城〜！お城〜！」

「これ…切り通し！乙葉よ！切り通しだぞ！」

上機嫌で山道を登る2人とは対象的に、由佳先生はクタクタだった。

「ちょ、ちよつと待つ…て…」

山道を登りきると、石碑が建っているのが見えた。

駆け出す2人。

それに続く由佳先生。

「ふふん〜。これは…山城ですね！」

得意気に言う由佳先生。

朝勉強した成果を発揮したかった。

しかし…。

「え？ああ。そうですね。山城の典型です。え？あの…どうしたんですか？突然当たり前のこと言い出して…」

晴美が言った。

彼女にとっての当たり前は少しずれている。

「当たり前…」

由佳先生が受けたショックは計り知れない。

「城主は遠山右衛門大夫光景か…。松山城と共に小田原攻めで落城…」

晴美が案内看板を読み上げた。

「小倉城と言って、福岡に行かないあたり私たちですよね！」

乙葉が説明看板を読みながら言った。

「乙葉ちゃん。福岡にも小倉城ってあるの？」

生徒をちゃん付けで呼ぶ由佳先生。

「はいっ！細川忠興のがありますよ！あっちのほうが遙に有名です」

ホソカワ…タダオキ…？どなた様？

由佳先生にとっては呪文のようだった。

「よしっ！大体わかった！では遺構を回ろっではないか！」

説明を読み終えると、晴美は高らかに叫んで遺構を観察し始めた。

「この岩を切り通したみたいのが虎口門跡なんですね！」

要所には紙が貼られていて、わかりやすくなっている。

「所々、凹凸があつて…。何ですか？これ…」

由佳先生の言う通り、辺りには溝や盛り土がある。

「それは堀や土塁ですよ！城跡っぽいですよね！」

由佳先生の疑問に乙葉が答えた。

乙葉の答えに小首を傾げる晴美。

少し土塁が崩れ、石が露わになっている部分があつたのに気付いた。

「乙葉よ！恐らくこれは土塁じゃない！石垣だ！」

乙葉に向かって言い放った。

「先輩？土ですよ…？積んであるの…」

彼女は不思議そうな顔で晴美を見ている。

「いや、これは保護のために石垣に土をかけたのだらう。さっきから、石垣の積みかたがおかしいのだ！」

「で、珍しいから保護の為に…」

「恐らくは。関東だとあまり見ない石の積みかただしな！薄い石を

積んだ平積みというやつだ」

他の郭も見て、小倉城を後にした。

土塁、堀などが割とキレイに残っていた。

「ふう〜…。疲れましたあ〜…」

車に戻った由佳先生が、真っ先に発した言葉。

多分、肉体的によりも、精神的に。

晴美と乙葉に付いていけなかったのだろう。

「お疲れ様です！ジュースでも買って…って、この辺自販機無いですねえ…」

苦笑いする乙葉だった。

「この後は…学校でいいのかしら？」

カーナビをセットしながら聞く由佳先生。

「ふふふ！甘いですぞ毛利先生！今日はもう一つ落としますよ！」

晴美が得意気に言った。

カーナビをセットする手を止めた先生。

肉体的にも疲れている。

山歩いたし…。

「え？まだ行くんですか…？もう山道は嫌です…」

肩を落とす先生に晴美が言った。

「次のところは山じゃないです。車で直接ですから！」

カーナビの目的地にセットされた場所。

「鉢形城」。

小倉城からはそんなに離れていない。

ついでに回るには都合がいい。

カーナビの案内が終わる直前、景色が変わった。

芝生。

広い芝生。

これは明らかに…。

「お城ですー！」

「鉢形城だっ！」

テンションの上がる2人。

由佳先生は山登りをしなくて済むことに安心感を覚えた。

まずは車から見えた芝生を見に行った。

ところどころ案内版が建っている。

「ほう…。ここが馬出で、あっちが三の郭…。石垣と門はみんな復元か…」

「わあっ！石組の排水溝まであります！こっちが通路になってて…。井戸まで再現されてるー！」

早速思い思いの行動を取る2人。

30分後に集合ということにして、由佳先生も城跡を歩いた。

「ここが…堀なのかなあ？結構深い…。堀の底が仕切られるようにデコボコしてるけど…。あれは何かなあ…。段差…？」

由佳先生は「障子堀」を知らない。

「へえ…。庭園もあつたのねえ！何でもあるのね」

のんびりと歩いていると、自然に2人をみつけた。

「川の合流地点…。難攻不落の城だったんですねえ」

「そりゃそうだ、太田道灌や前田利家や鳥居元忠や本多忠勝や上杉景勝や武田信玄や上杉謙信に攻められたからな！」

「無理無理無理！無理ですよそれは！よくぞまあ、そんな名だたる武將が…」

「で、最後は小田原攻めですよね！？」

話しこんでいる乙葉と晴美の背後から、由佳先生が話しかけた。

「ひゃっ！ビックリした…。そうですよ。最近小田原攻めの被害を受けてる城しか行つてないような…」

肩をビクンッ！

素で驚いた様子の乙葉。

確かに、乙葉の言う通りではある。

小田原城・松山城・山田城・小倉城・鉢形城…。

大坂城以外は全て…。

「まあ、住んでるのが関東だからな！近場だとそうになってしまうのは仕方が無い！というか先生、よく御存じで…！」

感心した様子の晴美。

「えへへ。あなた達の話に少しでも付いていければと思ひまして…！」

さっきまでスマホで見ていたとは言えない。

「障子掘、見ました？」

「障子掘？」

頭にハテナマークを浮かべる先生。

乙葉が晴美に目で合図を送る。

説明してあげて！という意味らしい。

「障子掘は、堀の構造のことです。底が障子の格子のように仕切られている堀です。大坂城なんかが有名ですが、その堀にもちよつとだけありますよ。敵が動きにくくなるんですね」

晴美が説明した。

これぞ以心伝心！

ああ、さっきの段差は意味があったのね。

これで納得した。

「向こうに、鉢形城歴史館という建物がありましたよ。行ってみませんか？」

「「はいっ！」」

3人で歴史館へ入った。

「城主は北条氏邦か。確か…氏康の息子…」

「四男ですよ！先輩！」

由佳先生にとっては少々難しい説明が並んでいた。

歴史館を出て、ベンチでジュースを飲みながら休憩する3人。

「結構大変なんですね、お城回るのも…」

「いえいえ、日本100名城に登録されてるような城は楽ですよ！
まあ、今日の小倉城みたいなのは大変ですけどね…」

しばらく休憩すると、晴美が立ち上がった。

「よし！もう一発行きますかあ！」

そう叫んだ。

「ええ～！まだどこかあるんですかあ…」

目が回りそうな由佳先生。

「ここからそう遠くないところに、あるんですよ！玉川温泉！」

「温泉！先輩…いつの間に調べたんですか！？」

「いいですね、温泉！」

3人は玉川温泉へと向かった。

歴史絵巻第四幕 L e t ' s G o 城巡り〜小倉城・鉢形城〜（後書き）

由佳

「はじめまして。後書き初登場です！」

乙葉

「わぁ！先生！お疲れ様でした！」

晴美

「小倉城は大変でしたね」

由佳

「でも、温泉は気持ち良かったなあ……」

乙葉

「玉川温泉は成分が良いんですよ。結構混んでましたし、地元じゃ有名みたいですね」

晴美

「ちよつとくらい、温泉に入っている場面が出てきても良かったんじゃないか！？」

乙葉＆由佳

「「嫌です！」」

晴美

「……………。実は、小倉城近くにお豆腐専門店もあったんだが……」

乙葉

「あつ！そつちも行ってみたかったですう…」

由佳

「次は、どこへ行くんですか？」

乙葉

「んっ…。片倉でしょうか？」

晴美

「まあ、作者が行った城も、あとは片倉と沖縄のグスクくらいしかないからな」

由佳

「ええ？せつかく私も一緒に行つたのにいっ…。グスク…？」

晴美

「グスクは沖縄版の城です。まあ、作者の隣町にも城はありますし…。大丈夫でしょう…」

由佳

「ううっ…」

乙葉

（片倉城…。大丈夫かなあ…）

三十八番槍 三河武士の宝物（前書き）

最近家康の出番多いな〜と思ったそこのあなた！

今回も家康です。

三十八番槍 三河武士の宝物

ここは大坂城。

ある日、天下人となつた豊臣秀吉は、配下の徳川家康を天守へと呼び出した。

「何でしょうか、殿下！」

家康は秀吉に頭を下げながら聞いた。

「いや、ただちよつと話したくてな……」

秀吉は、自分の持つ宝物を自慢するために家康を呼んだ。

「わしにはこの大坂城、黄金の茶室など、数多の宝があるのだ！どうだ、いいだろう！」

「は、はあ……」

反応に困る家康。

「所で、徳川殿の宝物はなんだい？」

秀吉が聞いた。

すると家康は……。

「三河武士たるもの、宝など、持ちません！」

キツパリと言った。

「ほえ？宝を持たない…？」

天下人は驚いた。

誰だって、宝物の一つくらい持っているだろう。
そう思っていた。

「ただまあ…。強いて言うなら…、私を命懸けで守ってくれる、
00人の兵ですかね！」

笑顔でそう言い切った。

（あ、勝てない…。この狸には勝てない…）

秀吉は家康の寛大さを思い知った。

三十八番槍 三河武士の宝物（後書き）

秀吉は己の欲するままに才能を活かして生きた人。

家康は仲間を大切にしてくにかく我慢強く、そして時には屁理屈を駆使して生きた人。

そんなイメージです。

家康は伊賀越えとか三方ヶ原とかで仲間の大切さを身を持って体感してるからでしょうな。

秀吉は出世考えて主君変えたりしてるし…。

女性は大事にしましたけどね。

久しぶりに人の逸話を書いた気がする…。

歴史絵巻第五幕 L e t ' s G o 城巡り〜片倉城〜（前書き）

由佳

「今回のお城は…」

乙葉

「だから心配だったんですよ…」

晴美

「ん〜…あんまりおもしろくなかったな」

歴史絵巻第五幕 L e t ' s G o 城巡り〜片倉城〜

「あつ！雨が降ってきちゃいましたね…」

とある高校の社会科研究室。

いつものように歴史研究部の活動が行われていた。

特にワイワイガヤガヤやるわけでもなく、2人の少女がひたすら資料を眺めている。

そんななかでの、歴史研究部顧問、毛利由佳^{もつりよし}先生の声は目立った。

先生の声に、資料をめくっていた少女の手が止まる。

「雨ですか！？うあゝ最悪…。傘持っていないよ…」

こちらは村上乙葉^{むらかみおとは}。

1年生。

「雨か…。鉄砲は使えないな…」

何故か火縄銃についてのコメントを残したこちらの少女は焙烙晴美^{ほつろくはるみ}。2年生。

「はあ…。雨…。天気予報外れた…。先輩、傘持ってませんか？」

乙葉が晴美に聞いた。

晴美は、何を言うわけでもなく、ただ黙って花瓶にさしてあった一輪の山吹の花を差し出した。

それを見て乙葉は溜め息。

「はあ…。ですよね…」

肩を落とした。

これを見ていた毛利先生は少し困惑気味。

「何ですか…？暗号…？」

晴美は笑いながら答えた。

「山吹伝説です。まあ、本物は蓑で、傘じゃないですけどね」

そう言われても分からない。

首を傾げる毛利先生に、晴美は説明を始めた。

「太田道灌が鷹狩りから帰る途中、雨が降ってきたので蓑を借りようと農家に寄りました。しかし、農家の娘、紅皿が差し出したのは蓑ではなく一輪の山吹の花でした…ってお話です！」

そうは言われてもやっぱり分からない。

「何で山吹なんですか…？」

今度は晴美に変わって乙葉が山吹を花瓶に戻しながら答えた。

「七重八重 花は咲けども 山吹の 実の一つだに 無きぞ悲しき
… っ て句があります。『実の一つ』と『蓑一つ』をかけたんです。
貧しくて蓑一つも出せなくて申し訳ない…と」

これedyouやく納得した。

「それで山吹なんですね！」

依然として、雨は降り続く。

「どうしよう…。濡れるの覚悟で…」

駅までは割と遠い。

びしょ濡れは避けられない。

晴美と乙葉は困り果てた。

すると…。

「駅までなら…送りましたよるか？」

先生がそう言ってくれた。

2人はお言葉に甘えた。

「明日はどこに行きますか!？」

車の中で、話が弾む。

「そうだな…乙葉はどこかあるのか？」

「ありません!」

明日の部活内容を決める2人。

土曜日にも活動があるだけ、活発な部活と言えよう。

すると、先生が提案してきた。

「昨日、出張のときに車で見たのですが、片倉城公園入り口と書かれた看板がありましたよ!」

片倉城…?

「片倉城…?乙葉、知ってるか？」

「知りません!どこですか？」

「確か…八王子!東京の」

明日の部活内容が決まった。

翌朝。

天気は晴れ。

絶好の城日和。

3人は駅に集まった。

「今日は電車なんですね！」

由佳先生が言った。

「駅から近いので。駐車場も5台くらいしかないみたいですし！」

3人がやって来た場所。

それは…。

「やってきました！片倉城！」

晴美が声をあげた。

「先輩！それは私の台詞ですよ！」

横浜線片倉駅から歩いて約5分。

3人は片倉城入り口までやってきた。

「わあ…オブジェがいっぱい…！何か…オブジェにも服は着てほし
いですよね…」

少し顔を赤くしながら乙葉が言った。

「この片倉城は太平洋戦争中に高射砲が置かれちゃったり、公園にしたときに遺構の一部が消えてしまったのだ！」

郭へと続く階段を登りながら晴美が言った。

「この前の吉見百穴といい…日本軍はろくなことしませんね！」

乙葉が言った。

「でも、それってここがいかにも良い場所かってことですよね？」

毛利先生が言った。

まあそうですけど…。

そう言いかけて乙葉は止めた。

戦国は好きなのに戦争は嫌い。

それが乙葉である。

階段を登った先にあった建物。

それは、東郭下に建つ住吉神社であった。

「この神社は、長井時広が城を守る神を祀ろうとして、1372年に建てた住吉大社の分社らしい！さらに、1649年10月17日、徳川家光から朱印七石を受けたらしいぞ！」

晴美が説明した。

いや、説明の看板を読んだだけだった。

多分、読んでて自分でも意味分かってないな…。

そんな感じの棒読みだった。

「わ〜！ここ、数学の神様みたいですね！お願いしとこつと！」

乙葉が神社に向かい手を合わせる。

彼女、数学は苦手なんです…。

上に行きましょう！

由佳先生の一言で三人はまた階段を登りはじめた。

階段の先には、だだっ広い草原が広がっていた。

「ほえ〜。見事に何も無いですね…。あ、でもあれは…堀かな…？」

乙葉が少し凹んだ場所を指差す。

「おそらく堀だ！だいぶ埋もれてしまっではいるかな！」

堀には橋がかかっていた。

3人はそれを渡った。

しかし、渡った先も野原。

ただしこつちには…。

「本丸広場って書いてありますよ！」

由佳先生が指差す先にあったのは…。

今にも朽ちて無くなりそうな小さな看板。

そこには確かに「本丸広場」と書いてあった。

「ここ…本丸なんですねえ」

「橋の向こうの郭の方が広いな…」

「ホントに…堀と郭跡しかないんですね…」

3人思い思いの言葉をあげた。

「神社がピークだったな」

「そうですね…」

「山でしたよね…」

片倉城址を後にした3人は駅へと向かった。

歴史絵巻第五幕 L e t ・ s G o 城巡り〜片倉城〜（後書き）

晴美

「神社がピーク！」

乙葉

「はい…」

由佳

「でしたね…」

晴美

「はあ…。これで作者の城ストックが切れたようなんだが…」

乙葉

「えっ！？これで？だから最後まで残しておいたのね…。うあ…作者さ〜ん！早く次のお城に行つてえ〜！」

由佳

「年末か年明けに行く予定みたいですよ！電車で20分くらいの所！」

晴美&乙葉

「近づ！」

由佳

「それでは、少しの間さようならあ〜！」

三十九番槍 裏切り弾正の聖夜（前書き）

クリスマスも近いので、こんな逸話を…。

ふざけ過ぎました…。

反省します。

三十九番槍 裏切り弾正の聖夜

1566年。

大坂、堺。

2つの勢力がぶつかっていた。

松永久秀と三好三人衆。

連日激しい戦いが繰り広げられていた。

そんな年の冬。

久秀は、あることを思いついた。

「そうだ！クリスマスくらい戦わなくてもよくね！？ケンタッキーとか食べたいし！うん！クリスマスだけは停戦しようそうしよう！戦うのはリア充だけで十分だぜ！」

なんと、クリスマスは停戦しようというものだった。

久秀はさっそく三好三人衆に手紙を書いた。

『クリスマスは停戦しね？ほら！ケンタッキーとか食べたいじゃない？戦うのはリア充だけで十分って話よ！どう？』

手紙はすぐに三好側に渡った。

「ほう…。戦うのはリア充だけで十分か…。確かに！よしっ！停戦じゃ！ケンタッキーじゃ！」

両方が同意し、見事１日だけ停戦した。

これは両軍にリア充がいなかったことを示している。

久秀は、知り合いの宣教師であるルイス・フロイスを呼び、敵味方関係なくクリスマスパーティーを開いたのだった。

「お前非リア充なの？なんだ、松永軍で意外と俺らと同じなんだな！」

「お前らも非リア充？俺達、仲良くなれそうだな！」
パーティーはとても盛り上がった。

翌日…。

「松永久秀を討ち取れー！」

「三好共を殲滅せよ！」

再び戦となった。

三十九番槍 裏切り弾正の聖夜（後書き）

あははゝ…。

真面目に解説します。

三好三人衆と松永久秀が戦っていました。

すると、松永は「キリシタンにとってクリスマスは特別な日だ。両軍にはキリシタンが多いし、クリスマスだけは休戦しよう」と呼びかけました。

三好側もそれを了承。

ルイス・フロイスを呼んで、ミサを開きました。

勿論、敵味方の区別なく参加できました。

敵同士の両軍の兵たちは、一緒に歌ったり礼を尽くしたり。

クリスマスだけは平和な1日をおくれたのでした。

っていう逸話でした。

本文はふざけ過ぎましたね…。

ちょっと反省…。

東大寺焼いたりした松永も、こういう企画を立てたりしたんですね。因みに、東大寺焼いたのは意図的ではなく事故だって説もありますよ。

松永久秀の意外な一面でした。

四十番槍 剣豪將軍の最期（前書き）

「カッコイイ…！」

私が素でそう思った逸話です。

四十番槍 剣豪將軍の最期

1565年。

京の都。

松永久秀と三好三人衆が上洛した。

狙いは二条御所。

13代將軍、足利義輝。

松永・三好軍が御所を取り囲んだ。

これにより、義輝は死を覚悟した。

「ふふ…。將軍として、天下を治めるべき器用と呼ばれたのも今は昔…。人生最後の大戰！悔いの無いように戦おうぞ！」

「はいっ！」

義輝は家臣たちと別れの杯を交わした。

しかし…。

「テルちゃん！逃げましょう！まだ間に合っわ！ほら早く！」

義輝の母、慶寿院であった。

義輝と共に逃げようと思っていた。

大切な息子を思う母。

しかし、義輝はそれを拒否した。

「逃げて死にたくない…。將軍なら…男らしく戦で死にたいのだ！」

そう叫び、侵入してきた敵軍に立ち向かった。

「この俺には、塚原ト伝つかはらのついでんから授かりし奥義、『一の太刀ひのたち』がある！
簡単に倒れると思いなさんな！」

そう叫ぶと、畳に何本もの刀を突き立てた。

そして、向かって来た敵に一撃。

見事に一太刀で倒した。

刃こぼれしたら、突き立てた刀に取り替える。

そしてまた敵を一太刀で仕留める。

義輝は1人ながら凄まじい奮戦を演じた。

しかし…。

それは、最後の刀が刃こぼれた時だった。

「足利義輝、覚悟！」

敵兵の槍が命中。

義輝は戦闘不能になった。

「五月雨や 露か涙か ほととぎす 我が名をあげよ 雲の上まで
…。さらばだ…！」

思えば、將軍家復興も叶わず、儚い人生だったな…。

無念を感じながら、義輝は静かに腹を切った。

四十番槍 剣豪將軍の最期（後書き）

さて、壮絶な最期とはこういうことを言っただけでしょうね！

刀突き立てて奮戦！

カッコいいじゃないですか！

「一の太刀」について…。

塚原ト伝が生み出した奥義。

最初の一発で敵を仕留める必殺技。

ト伝は、養子にすらこの奥義を伝授しなかったらしいです。

因みに、この技を使ったので義輝のニックネームは「剣豪將軍」でした。

四十一番槍 俺、あいつ大嫌い！（前書き）

乙葉

「前書きに出ないと、私たち出番ありません！」

晴美

「そうだな！よし、今回は愛と月の喧嘩らしいぞ！」

乙葉

「自然な流れで作品を紹介しましたね……」

由佳

「それではご覧ください！」

乙葉&晴美

「シメを取られた！？」

四十一番槍 俺、あいつ大嫌い！

ある日、京の聚楽亭。

各地の大名たちが集まって楽しくお酒を呑んだりお話したりしていました。

そんな時、伊達政宗が天正大判という大判を取り出して、集まった大名たちに手渡して自慢し始めた。

「いいだろー！これ珍しいんだぜ！レアアイテムだぜ！」

「ほえー！凄い！綺麗だー」

大名たちは皆天正大判に見入った。

しかし、直江兼次だけは違った。

扇を開き、天正大判をその上に乗せた。

こやつ、遠慮してんのだな！

政宗はそう思い、手に取るように勧めた。

すると…。

「謙信様から采配を託されたこの手！そのような汚らしいものなど持ちたくない！」

そう言つて政宗に投げ返した。

それから暫く経ち、関ヶ原の戦いで東軍が勝つたことにより、上杉は30万石になってしまった。

そんなとき、江戸城で伊達政宗とすれ違つてしまった。

「おい！たかだか30万石の貴様が60万石のこの伊達政宗に挨拶をしないとは、とんだ無礼者め！」

イヤミを言われた兼次。

黙つて聞き流すような彼ではなかった。

「はっ！誰？あゝ！伊達ね！いつも見るときは戦場から逃げる後ろ姿ばかりだったから、顔を見るのは初めてだな！気付かなかつたわ！スマンスマン！」

素晴らしきイヤミ返し。

政宗は黙つて通り過ぎていった。

兼次は、政宗を相当嫌っていたのだった。

四十一番槍 俺、あいつ大嫌い！（後書き）

兼次は、政宗のことを嫌っていました。

何故…？

性格が合わなかった？

まあ、政宗のあの性格なら仕方…。

ではでは！

私にしては珍しい、1日に2話投稿でした。

四十二番槍 惨い仕打ち（前書き）

惨い仕打ちとはどんな仕打ちか！？

あの方にとっての「惨い仕打ち」は少し変わってました。

四十二番槍 惨い仕打ち

「ついに三河平定を成し遂げた！」

ひたすら喜びを露わにするお齒黒のこのお殿様。

名は今川義元。

天下に最も近い男と呼ばれていた、一大勢力である。

義元が三河を平定したことにより、それまでこの地を治めてきた松平家は義元に従うこととなった。

その人質として、8歳の少年、竹千代（後の徳川家康）が送られてきた。

「義元様！竹千代の教育はどうします？やはり、きつ／＼く教えてやりますかい？」

義元の家臣がきいた。

「竹千代には、可能な限りで惨い仕打ちをせよ！」

義元はそう答えた。

惨いこと…？

やっぱきつ／＼い体罰か？

まあ、体罰も教育の一つだしな。

いや、ダメだろ！竹千代は人質。逃げられたらたまらない！

一体どうすれば…。

家臣は困り、義元に尋ねることにした。

「惨い仕打ちってどんなことですか？」

「何だ、そんなことか。いいか？竹千代には、不自由を感じさせるなよ！暑い時にはうちわで扇いでやれ！寒い時には、暖をとってやれよ！」

えゝ…。

俺ら竹千代の雑用係！？

というか、甘やかすの？

家臣は叫びたかったが、義元の機嫌を損ねたくなかったので止めたのであった。

四十二番槍 惨い仕打ち（後書き）

「惨くないじゃん！」と思っ た方への解説。

竹千代に対して「不自由な思いをさせるな」と家臣に命令した義元。
実は、これ…。

竹千代の代わりに全てのことをやってやれば、将来的に竹千代は自分じゃ何もできないダメ人間になる！

という考えあつての行動でした。

ただひたすらに甘やかす。

これが義元の言う「惨い仕打ち」なんです。

おっかない男だよね…。

意図的にダメ人間を作り上げようとは…。

何でも自分でやりましょう！

うん！

（今更このお話は後の世に作られた作り話の可能性が高いとは言えない…）

四十三番槍 一向二裏で勝負！（前書き）

乙葉

「あれっ？戦国じゃない！私、知りません！分かりません！」

晴美

「大丈夫だ！作者も時代背景など、何も知らない状態で書いたらしい！」

乙葉

「それ大丈夫なんですか！？」

晴美

「分かん……」

四十三番槍 一向二裏で勝負！

1702年12月14日。

歴史的な大事件が起きた。

赤穂浪士47人が、吉良義央の屋敷に討ち入りした。

忠臣蔵である。

事の発端は、浅野長矩が吉良義央を江戸城の松の廊下で斬りつけたことである。

浅野は切腹を言い渡され、吉良は無罪。

この判決が納得できん！

そう思い立ち上がったのが赤穂浪士である。

「うゝ寒い…。大石さん、何でこんな日に…。雪積もってるじゃないすか…。今は晴れてるけど…」

赤穂浪士の1人、堀部安兵衛がきいた。

昨日降った雪が積もっている。
今日は幸いにも快晴だが。

すると、同じく赤穂浪士の1人である大石内蔵助が答えた。

「雪は足音を消してくれる…。ふふふふ…」

何やら上機嫌だった。

「ところで、こんな部隊で大丈夫ですか？10人くらい50歳超えてますよ！こう…もっと精鋭部隊じゃなくても…」

堀部がきいた。

「大丈夫だ、問題無い」

大石が前歯を煌めかせながら言った。

雪のおかげで、敵に足音を聞かれることもなく無事に吉良邸前に到着した47人。

そして…。

「かれー！」

まだ薄暗い朝方、討ち入りが決行された。

「うわっ！何だ貴様らは！何？刀が効かないだど？」

慌てふためく吉良の家臣。

「はっ！俺らの鎖帷子！くさりかたびら思い知ったか！」

赤穂浪士は、全員鎖帷子を着用。

刀には強かった。

「はっ！そんな小さな刀や弓しか扱えない老人どもには、負けはせぬ！」

確かに、赤穂浪士の持つ武器は、普通の半分ほどの大きさ。

しかし、これは作戦だった。

「覚悟！」

吉良の兵が刀を振り下ろしたその時。

ガスンッ！

「うおっ？ヤベツ！刀が！」

柱に刺さり、刀が抜けなくなってしまった。

「チャンス！」

「ノッ！グハッ！」

赤穂浪士の武器は小さい代わりに、小回りがきき室内戦では有利だった。

そして極めつけは…。

「皆の者！一向二裏だ！」

赤穂浪士たちはすぐに形を取った。

一向二裏とは、三人一組となり、一人が正面から戦っている隙に、残りの二人が背後に回り込んで攻撃するという、3対1の戦い方。

これにより、吉良は壊滅。

吉良義央も討ち取られた。

一方、赤穂浪士に死者は無し。

見事、完全勝利を収めたのだった。

四十三番槍 一向二裏で勝負！（後書き）

由佳

「AKR47と、松の廊下走り隊！」

乙葉

「両ネタともパクリですね…」

晴美

「一向二裏とは卑怯なり！男なら一騎打ちだ！」

乙葉

「それじゃ絶対勝てません…」

初めて戦国を出ました。

この時代は何にも分かりません…。

まあ、大体合ってる…はず…。

一向二裏！

なかなかスゴい戦法ですね。

不意打ち…？

因みに、鎖帷子とは、鎖をまいた防具です。
鎧より機動力が上らしいです。

四十四番槍 暗殺者だって家臣にしちやえ（前書き）

今回は賤ヶ岳の七本槍の一人です。

個人的なイメージは「井戸の人」。

四十四番槍 暗殺者だって家臣にしちやえ

「うゝ…。昨日は深夜まで呑みすぎた…。二日酔いだ…。寝る…」

こちら、鷹狩りに向かう途中の加藤清正。

昨日深酒をし、気分が優れないのか籠の後ろに持たれかけて居眠り中。

しばらくはのんびり進んでいた清正たち御一行。

しかし、1人の男がその平和な時間を奪った。

「清正、覚悟ー！」

突然現れた男は、有無を言わず刀を抜くと、清正の乗る籠の真ん中をぶっさした。

家臣たちに緊張が走る。

果たして、清正は無事なのだろうか？

すると、中から清正が出てきた。

「はあ…はあ…。ビ、ビクリした！私はマジシャンじゃないんだから…。マジックやるなら初めから言っとけよ！」

憤る清正。

「いや、マジックじゃないです。この男が…清正様を暗殺しようとしたんです!」

そう言つて家臣は、捕らわれて縄で縛られた男を清正の前に突き出した。

「持たれかかつて良かった…。貴様、何故私を殺そうとした!？」

清正は、酔つて持たれかかつて寝ていたことで、幸いにも刀に当たらなかった。

「ちつ…。俺の一族は…全員貴様に殺された!だから…ずっと敵討ちを狙つてたんだよー!」

暗殺者の男は叫んだ。

「ほう…。お前は、勇敢なんだな。どうだ?命は助けるから家臣にならないか?」

家臣の間にざわめきが起きる。

暗殺者を家臣になんて…。

誰も信じられなかった。

しかし男は…。

「ふつ…。悪いが、それはできん。家臣になれば、また俺は命を狙うさ。殺してくれ!俺も一族のみんなに会いに行くさ…」

男はそう言つて、あぐらをかいて座つた。

「本当に死ぬ覚悟があるなら、心を入れ替えることもできるだろう！私の為に働き、忠義を尽くしてくれよ！」

清正は男を一喝した。

「……是非、是非俺を家臣にして下さい！」

男は清正の寛大さを思い知り、涙を流して忠誠を誓つたのだつた。

四十四番槍 暗殺者だって家臣にしちやえ（後書き）

暗殺者すらも家臣にしちやう清正の心の広さ！

素晴らしいですね！

というか、深酒した翌日に鷹狩り行くなよ！って話ですよ。

仮に、貫いた武器が刀でなくて槍だったら歴史は変わっていたかもですね。

「清正の井戸」、東京にもあるみたいですし、行ってみたいな。

熊本だけが清正じゃないですよ！

彼、江戸城下に住んでましたので。

朝鮮出兵で水攻め喰らった関係で、井戸を大事にしたらしいです。

四十五番槍 団結力は人数を超える！（前書き）

乙葉

「『今日も書くの？え〜！あずまんが大王読みたい〜！2巻の最後のネタ最高！ちよちゃんマジ可愛い！』と作者さんが…」

晴美

「知らん！書かせろ！無理やりにでも！」

乙葉

「書いたみたいですね…。今回は誰の逸話ですか？」

由佳

「狸です！」

乙葉&晴美

「またおいしい所を持ってかれた…」

四十五番槍 団結力は人数を超える！

駿河の国の、安倍川沿い。

のどかな道を家臣と共に歩く10歳の少年がいた。

徳川家康である。

彼は、河原で行われていた少年たちの石合戦を見学した。

石合戦とは、雪合戦の投げるものが石になったバージョンの凶悪な遊びである。

片方のチームは300人。

もう片方のチームは150人と半分ほど。

家康とその家臣は、試合を見ながら結果を予想した。

「当然、人数が多い方が勝ちますよ！有利だもん」

家臣が言った。

しかし、家康は…。

「何を言うか！いいか？少ない人数の方が団結力で勝るから勝つんだぜ！」

人数が少ない方が勝つと予想した。

「変なこと言わないでくださいよ。300人のチームが負けるわけがない！」

「黙って見てろって！」

暫くすると決着がついた。

結果は、人数が少ないチームの勝利。

見事家康の予想が当たった。

「そんな…バカな…！」

「そら見たことか！な？勝つんだよぉ〜！」

家康は家臣の頭を軽く叩いた。

10歳の少年が見せた驚くべき洞察力だった。

四十五番槍 団結力は人数を超える！（後書き）

普通、人数多い方が勝つと思いますよね？

性別、体格、年齢、性格、能力が同じ人たちが集まっていればの話ですけど…。

というか…。

石合戦とか危ない！

怪我する！

とんでもない競技ですよ…。

まえがきは…気にしないでください！

では、「あずまんが大王」読みますので！

ちよちゃん可愛いよ…。

2巻の最後…（笑）

明日は…真面目に書こう…。

四十六番槍 民に慕われし戦国武将（前書き）

晴美

「おっ！今回はあの名刀を持つあの武将…！」

乙葉

「雷切ですね！私、この武将好きですよ！」

由佳

「東の忠勝、西の…？」

晴美&乙葉&由佳

「『宗茂…！』」「『』」

由佳

（スマホって便利ねえ！）

四十六番槍 民に慕われし戦国武将

九州、やながわ柳川城。

ここで籠城戦が行われた。

城に籠もったのは関ヶ原の戦いで西軍について敗走した立花宗茂。

攻めているのが東軍の加藤清正である。

城に籠もった宗茂に対して、清正は激しい攻撃は仕掛けなかった。

「朝鮮出兵のときに、私はあなたに命を救われた。あなたはまさに日本軍第一の勇将！どうか…どうか開城してはいただけませぬか！？」

清正は、必死に呼びかけた。

宗茂を攻撃しなかった。

自分の命を救ってくれた宗茂を。

すると…。

「清正の願いなら…。城を…開けましょう！」

そう言って、宗茂は開城した。

城門を出た宗茂は驚いた。

たくさんの農民たちが、両腕を大きく広げ、馬に乗る宗茂の進路を塞いでいたのだ。

「なっ…！一体どうしたというのだ！？」

宗茂が聞いた。

「…お殿様が…！お殿様がお城を開ける必要はありません！どうかお城にお戻りくださいませ！」

それは、宗茂を慕う民の声だった。

宗茂は馬から降りた。

そして…。

「ここを血で染めるわけにはいかないだろう。皆のために、城を開けるのだよ！さあ、道を空けておくれはせぬか？」

宗茂は優しく農民たちに語りかけた。

「うう…お殿様あ…！どうか、ご無事で…」

農民たちは涙を流しながら、宗茂の進路を開けた。

四十六番槍 民に慕われし戦国武将（後書き）

こんなに民に慕われた武将も珍しいかも！

殿のためなら！って、普通家臣がやることですな。

朝鮮出兵の恩もあり、清正との戦いは小競り合いだけで終わったみたいですよ。

恩は売っとくべきですね。

四十七番槍 島津の退き口（前書き）

乙葉

「島津！釣り野伏せー！」

晴美

「いや…退き口だし…。釣り野伏せは攻めで使う戦法だぞ！」

乙葉

「じゃあ、退却戦は…何ですか？」

晴美

「本文読めば分かる！」

四十七番槍 島津の退き口

1600年関ヶ原。

天下分け目の戦いで、西軍は敗れ散った。

敗れた者は退却しなければならない。

西軍として参加した島津義弘も、撤退を余儀無くされた。

しかし、すでに周りは敵だらけ。

四面楚歌とはまさにこのこと。

指示を出すのに考えている時間は無い。

「皆行くぞ！中央突破だ！」

義弘は、あえて最も激しい戦いが繰り広げられている戦場のど真ん中を通ることにした。

この方が、混乱の中を通るため抜けやすいと判断したのだ。

しかし、当然追っ手は来る。

「全軍！…捨てがまりだ！」

一瞬この指示を出すのにためらった。

捨てがまりとは、最後尾の軍を殿として踏みとどまらせて戦わせ、それが全滅したら再び最後尾の軍を殿とする、兵を使い捨ての壁にしながら逃げるやり方。

申し訳ない…！

そんな気持ちで義弘の心は一杯だった。

戦場を突破した時には、島津軍は数十人にまで減っていた。

途中、甥の島津豊久が義弘の身代わりとなって散った。

もはや、義弘には命一つしか残されてはいなかったのだ。

馬にすら乗れないくらいに消耗した義弘は、家臣の担ぐ籠に乗った。

すると…。

「義弘様、お疲れでございます。私は馬肉を持っています。是非、食べてくださいませ…」

籠を担いでいた家臣が馬肉を差し出した。

しかし…。

「お前たちが食べよ。そして体力を少しでも取り戻し、少しでも早く薩摩へ…」

そう言って、自分は何も口にはしなかった。

四十七番槍 島津の退き口（後書き）

捨てがまり…。

大将をなんとか逃がそうとする過酷極まりない戦い方ですね…。

信賴している殿のためでも、時間稼ぎのために死ぬのは嫌ですね。

現代とは考え方や価値観が違うんでしょうか。

島津の退き口。

壮絶ですわ…。

逃げて隠れて…何とか無事に（？）薩摩には着いたみたいです。

四十八番槍 餌兵には食らうなかれ（前書き）

今日、ミュージカル「阿弔^{アテルイ}流為」を見ました。

ミュージカルが好きな人がいるのが分かりましたよ！

面白いもん！

太鼓カッコいい！

このアテルイ、実在した人物らしいです。

逸話の一つでも書こうと思ったら、あんまり詳しいことが分かってない人で…。

逸話も何もあつたもんじゃありませんでした…。

てな訳で、今回も戦国時代です！

四十八番槍 餌兵には食らうなかれ

「美濃を統一だ！そのために居城を変えたい！」

そう言ったのは、尾張を支配する織田信長。

美濃を攻略するために、居城の清洲城から引越したいと考えた。

しかし、家臣たちは反発した。

確かに、引越しは楽ではない。大変なことである。

だが、反対の理由はそこではなかった。

「信長様！引越し先が二宮山とは！一体何故ですか？あのような場所、とても住めませぬ！」

家臣はそう言い張った。

引越し予定の二宮山は、生活するのに支障をきたすほどの地形。

とても住めたものではない。

ましてや、清洲を捨ててまで行きたくない。

そこで信長は…。

「そうか…。なら、小牧山ならどうだ？川もあるし、二宮山よりは便利だぞ？」

そう提案した。

すると、家臣たちはそれを快諾。

さっそく引っ越し準備を始めたのだった。

「ふふふ…。狙いは最初から小牧山よ！二宮山などには住めぬからな！」

なんと、信長は引っ越しに反対する家臣たちを動かすために、あえて最初に厳しい場所を示していた。

その後に妥協案を出せば意見は通り易い。

見事に家臣の心を操ったのだった。

四十八番槍 餌兵には食らうなかれ（後書き）

孫子に曰わく、「餌兵には食らうなかれ」。

敵の^{おとし}罠には攻撃してはいけない。

逆に言うと、罠を攻撃させることが出来れば有利になるってことですよね！

今回の場合、罠は「二宮山の案」。

こつちを攻撃（批判）させることにより、本命の小牧山の案には反対意見が出ないようにする。

不満の内容を、「引っ越しが嫌」から「引っ越し先が嫌」にすり替えただけです。

信長は凄いです！

孫子の兵法書、現代でも活用できますよ～！

あれ全部覚えて使えれば、相当凄い人間が完成するのでは…？

四十九番槍 我が子は天下を治められるか？（前書き）

答え次第では歴史が変わっていたかも知…？

そんな逸話です。

四十九番槍　我が子は天下を治められるか？

1599年大坂。

63歳を迎えた前田利家が病に倒れた。

それを聞いた徳川家康はすぐに見舞いにやってくるようになった。

当日の朝。

利家は、息子の利長を呼び出した。

「利長…！心得ておろうな？」

自分の横に座る利長に、利家は聞いた。

「え…？何を…？ああ、家康様のおもてなしのことならば大丈夫！
今朝、家臣にちゃんと言つといたし！」

そう言つて利長は利家のもとを後にした。

暫くすると、家康がやってきた。

「それでは、お大事にな！利家殿！」

「ありがとう、家康殿」

無事にお見舞いは終了。

利家は、家康を見送ったあと、再び利長を呼び出した。

「今度は何…？何か、不満でも…？」

少し不安そうな利長。

すると、利家は布団の中から刀を取り出した。

「先ほどの質問の答え次第では、こいつで家康を斬り殺してお前に天下を治めさせるつもりでいたんだがな…。質問の答えを聞いてわかったよ。お前には無理だ！今後は家康の天下となるだろうから、家康にお前のことを頼んどいた」

そう言うと、さっさと布団に潜った利家であった。

四十九番槍 我が子は天下を治められるか？（後書き）

利家だの利長だの紛らわしい…。

「心得ておろうな」

何て答えれば良かったんでしょうか？

「…心得ております」
かな？

利長が天下取ってたら…。

分からん…。
想像がつきません…。

五十番槍 見た物を過信するな（前書き）

乙葉

「寒くなりましたねえ…。紅葉もすっかり落ちて…」

由佳

「葉が落ちるのは、植物ホルモンの一種であるエチレンの働きで、葉の付け根に離層が形成されるからなんですよ！」

晴美

「何故理科の話を…？」

由佳

「因みに、紅葉するのは、葉の中の緑色成分である、クロロフィルaとクロロフィルbが寒さで分解されるからです！」

乙葉

「戦国時代にも科学はあったんですかね？」

晴美

「もついいから！科学のお話は！」

五十番槍 見た物を過信するな

ある日の甲斐の国。

13歳の武田信玄のもとに、姉からプレゼントが届いた。

「わーい！おねえちゃんからだあ！」

信玄は喜んで箱を開けた。

「わぁ！ハマグリ！すごい数…」

中に入っていたのはハマグリの貝殻。

貝合わせに使うためのものだった。

貝合わせとは、二枚バラバラにして撒いたハマグリの殻のペアを探す、現代で言うトランプの神経衰弱である。

信玄はハマグリの数を小姓に数えさせ、数を把握した上で床にバラまいた。

「おーい！みんな来てー！」

信玄が家臣たちを呼び出した。

そして質問した。

「このハマグリ、何枚あると思う？」

家臣たちは、スゴい数のハマグリに驚きながらも自分たちの思う数を言っていた。

「1万！」

「1万2500！」

「1万5000！」

「2万！」

さながらオークションのような光景。

まあ、目の前の商品がハマグリで殻って辺りで違和感があるが…。

一通り意見が出たところで、信玄が正解を発表した。

「答えは…ジャガジャン！4000！」

「少なあ！」

家臣たちは驚いた。

そんな家臣たちに信玄は言った。

「わかった？人の目はアテにならんのだよ！量が多いとそれより多く見えてしまうのだ！こぼした牛乳とか…。まあつまりだ、戦だつて、1万や2万の兵を揃える意味は無く、5000の兵がいれば

孤独を感じずに戦えるのだ！」

おおー！と感心したように声をあげる家臣たちであった。

因みに、三方ヶ原の戦いでは、信玄は2万5000の兵を率いて出陣している…。

五十番槍 見た物を過信するな（後書き）

信玄は13歳でこんなこと言ってたんですよ。

人の目は当てにならない！

思い当たる節があるのではないでしょうか？

こぼした牛乳とかね…。

結構こぼしたように見えて、意外とそうでもない…みたいな。

今回はそんなお話でした！

現代にも活かせる逸話は良いですね！

あんまり知らないけど…。

歴史絵巻第六幕 L e t ' s G o 城巡り〜川越城前哨戦〜（前書き）

乙葉

「歴史絵巻って名前なのに絵が無いですよね」

晴美

「…作者の絵見たい？」

乙葉

「あの首が異常に長くて関節が無い人間が完成するアレですね。いいです、遠慮します」

晴美

「だよね」

由佳

「そんなに酷いんですか？」

晴美&乙葉

「それはもう！」

由佳&晴美&乙葉

「今回は川越の旅前半です！」

歴史絵巻第六幕 L e t ' s G o 城巡り〜川越城前哨戦〜

「ふう〜！テスト終わったー！」

「久しぶりの部活だな！」

今日も社会科学研究室に集まった2人の少女。

ほつろくはるみ むらかみおとほ
焙烙晴美と村上乙葉。

今日はテストが終わってから久しぶりの部活。

「はあ〜…。先輩い〜。テストどうでした？」

1年生の乙葉が言った。

「…私は文系だ！」

2年生の晴美が言った。

理系の科目はダメだったのだろうか…？

「あらら〜…。理科は私が教えますよ？」

この歴史研究部の顧問である毛利由佳先生むつりよしが言った。

彼女は理系の先生である。

「あゝ！もう！テストの話は終わりにしましょうよ！次の計画を立てましょう！」

自分でテストの話題を出したくせに…。

乙葉は話題を変えた。

「そつだな！テストも終わったし！羽を伸ばそうかね！」

「どこにします！？」

どんどん話が進んでいく。

テストの後はいつもこんな感じである。

ついでに言っておくと、この2人は別に成績は悪くない。

ただ、テストは歓迎していない。

「先生は行けますか！？」

乙葉が聞いた。

由佳先生が行けるか行けないかによって行く場所が変わる。

移動手段が変わってくるからである。

「んゝ…。今週はちょっと…。出張が入っちゃってますね…。ゴメンナサイ…」

つまり車は無し。

「そつだなあ。じゃあ…」

晴美は日本地図を広げて、関東辺りを指差して叫んだ。

「関東は武蔵の国！川越！」

「川越え！」

予想外の行き先に乙葉は声をあげた。

「川越つて…あの…！川越城ですか？」

「そうだ！徳川家康がお芋のよく育つ場所として選んだ、あの小江戸川越蔵の街！」

2人で盛り上がる。

由佳先生はちよつと残念そう。

「行きたかった…」

肩をおとしていた。

「さて」と、今度は晴美が川越の地図を持ってきた。

さすがは社会科研究室。地図にかけてはとんでもないバリエーションを誇る。

「実はだな、結構行きたい場所があつてだなあ…。ほら、夜戦があったらう？」

地図を指しながら晴美が言った。

「はいっ！日本三大夜戦の一つですね！川越夜戦！北条氏康と扇谷上杉朝定のアレですね！」

有名な夜戦もあり、乙葉も知っていた。

「うん。アレの激戦地とか、あとは…江戸城が移築された神社や寺なんかもだなあ…」

「おおっ！何か凄いですね！」

川越に行くことに決定し、この日の部活は終わった。

「ああ…。行きたかった…。行きたかったなあ…。気を付けて行ってきたくださいね！」

由佳先生の言葉に返事をして、2人は社会科研究室を後にした。

翌日。

学校の最寄り駅に集合した2人は、電車に乗って川越までやってきた。

「やって来ました！小江戸川越！結構人がいるんですね」

乙葉が言うように、人は多い。

駅を出ると、アーケードになっていて、カラオケにゲームセンターなどがあり遊びには困らなそう感じた。

しかし、2人はそんなものには目もくれず、アーケードを真っ直ぐ抜けていく。

暫くすると…。

「あつ！喜多院は右になってますよ！」

乙葉が看板を見て言った。

看板通りに進んで行く。

しかし喜多院までは遠かった。

歩いても歩いてもなかなか着かない。

それでも進む。

市内観光循環バスも走っているが、それを使ったら負けな気がする。

因みに、このバスは懐かしのボンネット型。

1日乗り放題券が500円である。

晴美と乙葉はあえてこれを使わなかった。

「観光は歩いて初めて発見がある！」が2人の考え方である。

暫く歩くと…。

「どろぼうばし…?」

泥棒橋。

そんな名前の橋があつた。

「泥棒がこの橋から喜多院の中に入って、厄除元三大師に許しを請つたら許してもらえた。それで降真面目に生きました… ってのが由来みたいだぞ!」

晴美は看板と睨めっこ。

それを渡ると…。

「あ、喜多院だ!」

晴美が思わず声をあげた。

いつの間にか喜多院に到着していたのだった。

まずは境内を散策。

紅い多宝塔が建っている。

江戸時代の僧天海が植えたという木もあつた。
樹齢350年という説明看板が建てられていた。

松平大和守家霊廟もあつたが、中には入れなかった。

一通り見回したら喜多院の建物の中へ。

入場料400円を払い、2人は見学した。

「この建物は、江戸城を移築したものなんだ。家光誕生の部屋や、春日局の化粧室なんか残ってる」

晴美が説明した。

まずは春日局の化粧室。

「なんか…狭いですね…」

「4畳だからな…。しかも、この部屋の一部だけなのは私も知らないんだ…」

予想以上に狭かった。

続いて家光誕生の部屋。

「ここで…あの江が…！家光を産んだんですね！」

江とは、二代將軍徳川秀忠の嫁さん。

織田信長の妹、お市の娘。

「あの奥の木像は天海様の…！」

感動している晴美に乙葉が聞いた。

「先輩、天海様ってどちら様ですか？」

「天海…てんかいだいそうじょう天海大僧正は1536年から1643年まで生きた喜多院第27世住職だ！会津出身で、死後は朝廷から慈眼大師じげんだいしの称号をもらった偉いお方であり、日光東照宮を建てるのに大きく関与しているのだ！」

まるで呪文。

ただ一つ分かるのは…。

「寿命長っ！えっと…108歳ですか？」

「そうだ。ただ、あまりに長いので、親子二代で一人の天海を名乗ったって説もあるし、実は明智光秀その人だ！なんて説も…」

「明智光秀え！？」

乙葉が驚いたように声をあげた。

「えっ…。だって、光秀は京の小栗栖おくもすで…」

「確かに史実はな…。しかし、天海の墓の近くに明智平なんて地名があるし、その他にもいろいろ根拠となることが…」

晴美が言ったが、乙葉はそれ以上聞かなかった。

明智光秀は小栗栖で死んだはず！

そう信じたかった。

2人は喜多院本殿を後にした。

もうひとつ行く場所がある。

晴美はそう言って、喜多院の入場券を取りだした。

よく見ると、下の方は別のチケットになっている。

「五百羅漢…？」

乙葉が首をかしげた。

とりあえず行ってみよう！

五百羅漢入口に行く…。

「自分でちぎってその箱に入れておいてください」

売店のおばちゃんに言われた。

何やら凄くテキトーな感じもするが、自分でちぎって椅子の上に置かれた箱に入れておいた。

「これが、五百羅漢ですか！」

晴美と乙葉の目の前には、大量の石像が並べられていた。

お地蔵様が大量に並んでいるような感じである。

「これは…なんですか？」

乙葉が聞いた。

「んゝ。パンフレットによると、川越北田島しじょうの志誠しじょうの発願で、1782年から50年間かけて作られたものだそうだ。十大弟子、十六羅漢など533尊者や阿弥陀如来や地藏菩薩など全部で538体があるのだ！」

パンフレット読んだだけなのに、胸張って言う晴美。

五百羅漢を後にして、今度は正門から喜多院を出た。
すると…。

「ほれ！それが天海の像だ！」

晴美が指差した先には、一つの像が建っていた。

「おお！これが！さっきの木像とはまたちょっと違う感じがしますね！」

像が建てられるほど、天海は喜多院と縁が深いのである。

そして歩きだした2人。
しかし、すぐに止まる。

「日枝神社…。よしっ！乙葉、行くぞ！」

「あ、先輩！待って下さいよぉ〜！」

喜多院からすぐ近く。

日枝神社にやってきた。

「ここは何ですか？」

「いやな、調べたときに出てきたんで。喜多院と一緒に建てられた神社なんだと。建物の作られ方が珍しいそうだ！」

ここは軽く見てすぐに移動。

そして次に向かった場所は…。

「次はここだ！川越歴史博物館！」

晴美が指差した縦長の建物。

川越歴史博物館である。

入場料500円。

「わー！先輩！ここ、写真撮影OKですって！」

そう言うなり、携帯電話を片手に写真を撮りまくる乙葉。

博物館一階は主に江戸時代以降の物。

足枷や突棒、十手など。

二階は土器や打製石器や磨製石器。

そして三階に上がる途中の階段には…。

「んー！んっ！川中島合戦図！待ち受け！私の待ち受け画面です！」

乙葉大興奮の一品。

「川中島合戦之図」

「凄いです！なぜここにっ！？」

「さ、さあ……」

珍しく晴美が引いている。

展示室に入るとさらにお宝があった。

「うおっ！？これは……！後藤又兵衛の兜だと！？」

今度は晴美のテンションが跳ね上がった。

「「ここスゴイ！スゴ過ぎる！」」

2人のテンションは終始高かった。

川越歴史博物館を出ると、次へと向かう。

「先輩、ついでしたし、そこ寄って行きませんか？」

乙葉が「そこ」と言った場所。

博物館の向かいにある寺。

成田山川越別院。

通称、久保町のお不動様。

結構立派なお寺である。

お不動様を拝んでまた次へ。

「では乙葉！浮島稻荷神社を見つつ川越城へ行くぞー！」

「おー！」

2人はまた歩き出した。

市内は観光地であるため、看板がそこらじゅうに立っている。
道に迷うことは無い。

看板に従って歩く。

しばらくすると小さな神社が現れた。

「あつた！これが浮島稻荷神社だ！」

晴美が神社に駆け寄る。

それに乙葉も付いていく。

「ここは太田道真が川越城の守り神を祀った神社だ！昔は七ツ釜という湧水があつて、この辺は遠くからみたらこの神社だけ水に浮いている島に見えたんだ！」

「太田道灌の父親ですね！なるほど…。この神社の名前の由来はそこからですね！」

ここが終われば次はお待ちかねである。

「よし！次は川越城だあー！」

「はいっ！」

2人は川越城本丸御殿に向かって歩き出したのだった。

歴史絵巻第六幕Let's Go 城巡り〜川越城前哨戦〜（後書き）

乙葉

「あれ？川越城は！？」

晴美

「次回だな〜」

乙葉

「あうう…。楽しみだったんですよ〜！私い〜！」

晴美

「ま、まあ、次だから…」

由佳

「いいなあ〜。川越！ってなわけで、私たちのプロフィールでも！」

晴美&乙葉

「また唐突な！！」

村上 乙葉（ムラカミ オトハ）

年：高校1年

誕生日：5月12日（信長と一緒に！）

身長：普通！

体重：重くない！

得意教科：古典

とある高校の歴史研究部に所属している。

戦国大好きな歴女。

結構個人的に城を巡ったりしている。

でも構造についてはあまり詳しくない。

偉人の逸話が好き。

彼氏もいなければ兄弟もない。

とにかく元気な少女です。

作者の訪ねたことのある史跡を旅する主人公。

焙烙 晴美 （ホウロク ハルミ）

年：高校2年

誕生日：2月6日（秀吉と一緒に！）

身長：割と高め

体重：重くないぞ！

得意教科：日本史

乙葉以上に歴史を極める歴女。

戦国に関しての知識はすさまじい。

妹が一人いるが、歴女は晴美だけである。

知識を振りかざして史跡を解説する歩く辞書。

乙葉と同じく、作者の訪ねた史跡を歩く主人公である。

毛利 由佳 （モウリ ヨシカ）

年：25歳（教師1年目）

誕生日：12月26日（家康と一緒に！）

身長：少し低め

体重：軽い軽い！

担当科目：生物

生物教師なのに歴史研究部の顧問。

乙葉や晴美に歴史の知識で追いつこうとしているがゼンゼン追いつけない。

自分の出身高校で生物を教えている。

最近は乙葉や晴美の活動について行ったりしている。

車の免許あり。

性格は極めておっとりで、怒らない。生徒とかなり仲がいい。

武器はスマホ。

「もつとキャラを濃くすれば？」みたいなことを言われましたけど、この作品はあくまで歴史！

彼女たちは案内人なので…。歴史を引き立たせるのに彼女たちを目立たせるわけには…。

全員女性なのは…。察してください…。

この「歴史絵巻」はですね、私が訪ねた史跡を実体験に基づいて書いてます。

資料はパンフレットや地元にある案内看板です。
ネットとかでは調べてません。

いや、面倒だからってわけじゃありませんよ…。

次回はいよいよ川越城！

いやあ、神社仏閣巡りすぎました…。

歴史絵巻第六幕 L e t ' s G o 城巡り〜川越城〜（前書き）

続きます。

今回で完結しますから…！

歴史絵巻第六幕 L e t ' s G o 城巡り〜川越城〜

「あ、ああ…！これが…！川越城！」

「川越城本丸御殿！あのウォーターボーイズで有名な川越高校の裏だな！」

2人は念願の川越城本丸御殿に到着した。

入りましょう！と乙葉が晴美の手を引く。

入場料は50円。

まさかの二桁。

中にはふすまで仕切られた部屋がいくつもあった。

「ああ！ここに…北条氏康がいたんですね！」

目が輝いている乙葉。

（うつ…。これは…言わなきゃいけないのか…？）

晴美は喜んでいる乙葉に、重い口を開いた。

「1846年に…二の丸が焼けたんだ…。その代わりに建てたのが…これ。1848年に竣工…」

え？

あれ？

「先輩…それって…」

「…。戦国時代に…この本丸は、無い…」

晴美は眼を伏せながら言った。

「そんなぁ…」

乙葉ガツカリ。

それでも城に変わりは無い。

一応、築城主は太田道灌であり、戦国武将である。

「あ、枯山水！これは綺麗ですよね！」

乙葉が見ているのは中庭。

ちよっとした枯山水が日本らしさをかもし出している。

さらに、広間や当時のトイレ何かを見て2人は本丸御殿を出た。

「戦国時代じゃないんですね」

「この本丸は、二の丸の代わりに建てたものだからなぁ」

2人はその足で本丸御殿の目の前にある、三芳野神社へ向かった。

「ここも…神社ですよね？」

乙葉が聞いた。

「そうだ！ここは川越城の天神郭に当たる場所で、この神社はお城の天神様なんて呼ばれているらしい」

晴美が説明していると、興味深い看板が出現した。

「川越城七不思議…？」

乙葉が呟いた。

その看板には、川越城七不思議という七つの伝説が書かれていた。

1、霧吹の井戸

蓋を取ると霧が出て城の姿を隠す井戸があり、そのため川越城の別名は霧隠城である。

2、初雁の杉

雁が飛んでくると、必ず三芳野神社の裏にあつた大杉の周りを三回鳴きながら三周したことから別名初雁城と呼ばれる。

3、片葉の葦^{あし}

浮島稻荷神社周辺の「七ツ釜」で、川越城が戦になったときに逃げ延びた親子がいた。しかし、七ツ釜でころび、必死で葦の葉を掴んだが葉がちぎれ、水底へと沈んだ。それ以来、このあたりに生える葦はその親子の恨みによって片葉である。

4、天神足洗^{てんじんみたらし}の井水^{せいすい}

太田道灌と道真が川越城を建てる時に、堀の水源が見つからず困った。そこで、井水で足を洗っていた老人に案内してもらうと、見事に水源を発見した。道灌はこの老人を三芳野天神の化身と信じ、

大切にした。

5、人身御供ひとみくぐり

太田道灌は、川越城の周辺が泥深く、土塁を建てるのに苦勞していた。そんなある日、龍神が夢に出てきて「明日最初に見た女子を生贄に差し出せば、すぐに城は完成する」と言った。しかし、道灌が翌朝最初にみた女子は自分の娘よねと禰姫だった。道灌は、さすがにためらっていると、与禰姫は水から城の完成を祈って七ツ釜に身を投げた。

6、遊女川よながわの小石供養

川越城主の鷹狩りについて行った小姓が、「およね」という美しい農民の娘に河原であつた。後に、この小姓の嫁になったおよねだったが、嫁姑戦争に負けて実家に帰らされた。およねは、夫に会えることを期待して、最初に夫と出会った河原で待つも会えず。その川に身投げした。いつしかこの川を「よな川」と呼ぶようになったのは、「およね」が由来とも「夜な夜な泣く」から来ているとも言う。

7、城中蹄めじろひの音

川越城主の酒井重忠は、毎晩矢や蹄の音がして眠れなかった。そこで、祈禱師に見てもらつと「城内のどこかにある戦の絵が怪しい」とのこと。蔵を調べると、堀川夜討の戦いを描いた、一双の屏風絵がでてきた。それを半双に分けて、養寿院に寄贈すると、その日から音が消えた。

「ん〜。確かに不思議ですね」

「まあ、七不思議はどこでもあるから！それよりこの神社、『通り

「やんせ」発祥の地だって知ってた？」

晴美が聞いた。

「あの『とりやんせ』とおりやんせ』こゝこはどゝこのほそみちじゃ』ってやつですか？ホラー番組の横断歩道の場面でよく聞く…」

「それだ！それは、この神社が発祥というのが一つの説なのだ！」
へえ〜！と感心したような声をあげた乙葉に、晴美は次の行き先を宣言した。

「氷川神社に行くぞ！」

2人はまた歩き出した。

しばらく歩くと、巨大な鳥居が出現した。

「うわぁ！でかぁ！」

乙葉が思わず叫ぶほどの大きさ。

「高さは約15メートル！木像では国内最大らしい！さらにスゴイのは、鳥居に付いてる社号文字はあの勝海舟の直筆だ！」

「勝海舟なら知ってます！坂本竜馬が暗殺しようとしたけど、話してみたなら意気投合したっていう、あの人ですよね！？」

晴美がそつだ！と叫ぶと、2人は大鳥居をくぐった。

隣は結婚式場で、神社に直結している。

なんともめでたい場所である。

この日も結婚式にやってきたと思われる和服を着た人たちの姿があった。

境内に入ると、犬の顔の様な形をした「戌岩^{いぬいわ}」や様々な建物があった。

「ここは540年9月15日に建てられた由緒ある神社なのだ！老いらくの 身をつみてこそ 武蔵野の 草にいつまで 残る白雪」と、太田道灌も俳句を送っているのだ！因みに、例大祭は10月14・15日だ！」

晴美も説明しながら歩く。

柿本人麻呂神社、山上憶良の唄碑などがあつた。

「人麻呂は…万葉集ですよね！」

古典が得意な乙葉。

このような知識は豊富である。

「え？ああ…。そつだっけ？」

逆に、晴美にはよく分からなかった。

「時に乙葉よ。さつき気になる看板を見つけたんだが…」

晴美がそう切り出した。

「なんですか？ 気になるなら行きましようよ！」

2人はもと来た道を歩き出す。

少し戻った場所にあつたのは…。

「おっ！ やはりか！ ほら！」

晴美と乙葉がやってきた場所。

妙に深く土が掘られた場所。

看板には「川越城中ノ門堀跡」。

「これはまた…。大きな堀ですね！ 深さ7メートル、幅18メートル…。川越城の唯一現存する堀跡で、内側と外側で法面勾配のりめんこうはいが違うんですね…。へえ…」

乙葉が看板を読んだ。

思いがけず良いものが見れた。

2人は上機嫌で次の目的地へと向かった。

途中、川越市役所で太田道灌の銅像を見て歓声をあげたりした。

「この川越市役所は、川越城の入口前にあるのだ！」

晴美が説明した。

「いざ！最終目的地！東明寺^{とうみょうじ}へ！」

「おーっ！！！」

晴美は人差し指を前に突き出し、乙葉は右腕を高らかにあげた。

東明寺。

人気のない静かな境内に入ると、大きなイチョウの木の下に石碑。

そこに刻まれた文字は「川越夜戦跡」。

「あつ！つてことは…ここで…！」

「そう！北条氏綱に川越城を取られた扇谷上杉朝定は、取り返すために8万の大軍で川越城を包囲した。北条家家臣の福島綱成は3000で籠城したが、兵糧が尽きて危機的状況だった。そこを助けるために出陣したのが北条氏康。氏康は深夜0時に8万の兵に8000で突撃した。これに応じて福島綱成の軍も城から打って出た。そしてぶつかつたのが…」

「ここってわけですね…」

「そして、朝定は討ち死に。北条は関東進出のきっかけを作ったというわけだ」

静かな境内に、晴美の説明する声が響いた。

一通り説明が終わると、2人はしばらく黙っていた。

ここで戦が起きた。

そう思うと、何故か喋れなかった。

いくつもの命が散った、この東明寺。

2人の気持ちにも、「楽しみ」以外の何かが芽生えていた。

そして、黙ったまま2人は境内を出た。

「何か…。緊張しましたね…」

「ん…。なんだろう。空気が違ったというか…」

「そうですね！何か…。行く前は古戦場って楽しみだったんですが…。いざ行くとなんかこう…。笑えないと言いますか…」

乙葉が言いたいことは晴美にもわかった。

「あ、そうだ。あそこ、富士塚っていう塚があるんだけど、掘ったら出てきた骨を埋めた塚だそうな」

「掘ったらって…。私たちが立ってた場所をですか…？」

「多分！」

「にゃー！ちよっ！知りたくない情報でした…」

驚きのあまり変な奇声をあげた乙葉。

「だから、激戦地だったんだって！」

「いやまあそうですけど…」

そう言って、乙葉は軽くため息をついて…。

「この後はどうします!？」

「菓子屋横丁っていう駄菓子屋が沢山ある通りがあるが…」

「行きます!」

こうして2人は菓子屋横丁へと向かった。

歴史絵巻第六幕Let's Go 城巡り〜川越城〜（後書き）

部活動報告〜活動の記録〜

今回の旅で行った場所

喜多院：江戸城から移築された建物や五百羅漢がある、天海や春日局と縁が深い寺。NHK大河ドラマ「江〜姫たちの戦国〜」第四十話の最後に紹介されました。

日枝神社：喜多院からほど近い神社。小さい神社です。

川越歴史博物館：川越の歴史に関する資料を展示している博物館。
成田山川越別院の向かい。戦国時代の史料も豊富。写真撮影OKなのが嬉しい。

成田山川越別院：通称「久保町のお不動様」。成田山新勝寺の別院として石川照温が再興した。結構立派です。

浮島稻荷神社：湧水「七ツ釜」にあった神社。今も名残かどうかは分かりませんが池が境内にあります。オオカナダモ（水草）が豊富でした。

川越城本丸御殿：川越城を代表する遺構。川越城といえばここを指します。去年の3月にも行きましたが、解体修理中でした…。

三芳野神社：童謡「通りゃんせ」の発祥の地とも言われる神社。昔は川越城の中にあっただらしい。

氷川神社：勝海舟直筆の社号が掲げられた大鳥居がある神社。結婚式場と直結している。鳥居は圧巻。

川越城中ノ門堀跡：最近（2010年4月1日）公開されはじめた川越城の遺構。去年も行きましたが、公開前でした…。1週間差で…。

東明寺：川越夜戦の激戦地。戦いはこの寺の境内で行われた。富士塚があるらしいが、私は見つけられませんでした…。どこ…？

～ここから非公開～

中島考昌墓：「消えてこそ まことなりけり 雪仏」と辞世の句を詠んだ人。川越の地誌「三芳野名勝図絵」を書いた。

蓮馨寺：1549年川越城主のれんけい大導寺駿河守政繁が母親のだいどうじするがのかみまさしげ蓮馨尼をれんけいに追福するために作った浄土宗の寺。

疲れました…。

かなり歩くことになります。

歩きたくない方は500円で乗り放題の市内循環観光バスがありますので。

因みにボンネット型。

あとは…。

菓子屋横丁や時の鐘が有名所ですかねえ。

是非行ってみてくださいね！

次回からまた逸話書きます〜。

逸話がメインの小説ですので…。

五十一番槍 歴史を変えた一戦（前書き）

桶狭間の戦い。

川越夜戦と同じく日本三大夜戦の一つ…。

戦いが決着したのは雨あがりの午後2時なんです…。

夜戦…？

五十一番槍 歴史を変えた一戦

1560年5月12日。

統一されたばかりの尾張を狙い、挙兵した男がいた。

率いるのは2万5000の大軍。

「天下に最も近い男」と呼ばれた、今川義元である。

本拠地の今川館を出る時、義元はお齒黒をしてまるで公家のような姿で、御輿みこしに乗っていた。

「これより上京する！そのため、尾張の邪魔者を排除するのだ！」

義元が言う尾張の邪魔者とは、織田信長のことである。

「尾張も我のものになる！まあ、こんな土地、無くても構わないのだがな」

義元は、信長を敵とすら見ていなかった。

負けるなど、これっぽっちも考えてはいなかったのである。

一方の信長。

「信長様！今川義元が攻めて来ました！明日にも砦を攻撃するようです！」

家臣から知らせが届いた。

「そうか…。皆集まれ！軍議を開く！」

信長はそう言つて、家信を召集し、対策会議を開いた。

「はいっ！じゃあ意見のある人！」

信長が聞いた。

しかし、家臣たちは黙っていた。

向こうは2万5000の大軍。

こちらは3000。

どうすりゃいいってんだ？

「え…。意見が無いようなので…軍議を終わります…。皆さん、頑張ってください」

特に指示も無く軍議は終わってしまった。

「運の尽きには、知略すらもダメになるのか！」

家臣たちは口々に愚痴をもらした。

この、「何も作戦が立たなかった」という情報は、義元にも伝わっ

た。

「所詮は小国の長よ。策など浮かぶわけがない！」

義元は相変わらず信長をバカにしていた。

翌日…。

「信長様！皆が攻められました！」

やはり、義元は皆を攻撃した。

知らせを聞いた信長は…。

「きんこくに花を詠じ、栄花は先つて無常の風に誘はるる。南楼の月を弄ぶ輩も月に先つて、有為の雲にかくれり。人間五十年。下天のうちを比ぶれば、夢幻の如くなり。一度生を享け滅せぬものあるべきか…」

敦盛を舞ったかと思うと…。

「熱田神宮にて待つ！準備が出来た者から順次合流せよ！」

そう言い放つと五騎の騎馬隊を連れ清洲城を出た。

暫くすると、軍が熱田神宮に集まった。

「皆来たか！よしっ！では始めるぞ！」

信長は必勝を祈願して士気をあげた。

すると…。

「あの煙は…もしや…」

はるか先から上がる煙を見て、信長は悟った。

砦が落とされた！

今川義元の軍は、桶狭間山で休憩していた。

そこに、砦を落としたという知らせが入った。

「はははっ！わが矛先は天魔鬼神も止めることは出来ないのだ！つまり、今川軍は無敵ー！」

義元は叫んだ。

砦を落とし、既に戦に勝利したかのような雰囲気だった。

その頃、信長にも一報が入った。

「信長様！今川義元、桶狭間山にて休憩中！宴会を開いている模様！」

やなだてわのかみまさつな

築田出羽守政綱が報告した。

それを聞くなり信長は…。

「今から義元の正面を攻撃する！首は拾うな！どうせ皆死ぬのだ！それが早いか遅いかの違いだけ！覚悟を決める！」

出陣命令を出した。

「奇襲！信長の攻撃だ！」

宴会をしている最中にともに戦えるわけもなく。

完全に油断していた今川軍は瞬く間に総崩れとなった。

300の兵に守られながら敗走する義元だったが、すぐに追い詰められた。

「我が名は服部小平太！義元殿、お命頂戴！」

服部小平太が攻撃した。

放たれた槍は義元を貫いていた。

「うぐっ！貴様…！まだ死ぬぬわ！」

義元は、自らの名刀「義元左文字」よしもとさもんじを振るった。

それが服部の膝を捉えた。

「ぐあっ！…っ…！」

しかし直ぐに2人目が出てくる。

「我、毛利良勝！覚悟！」

毛利は義元と取っ組み合った。

「はは…！ただでは死ねぬ！」

義元は良勝の指を噛みちぎった。

「うっ！てめえ！とどめだ！」

良勝の槍が義元を貫く。

これにて今川義元、討ち死に。

信長は義元が討ち死にした2時間後に首を確認した。

その時に義元の首を洗った泉跡が今も残っている。

それから暫く後、今川家に義元の首を返すことになった。

その際、信長は義元に敬意を表し、10人の僧侶を付き添わせた。

因みに、この戦で最も恩賞を貰ったのは、毛利良勝ではなく築田政

網であつた。

五十一番槍 歴史を変えた一戦（後書き）

大軍を率いた義元は完全に油断してました。

というか、尾張の軍は弱いことで有名だったみたいです。

情報を駆使して戦うのが信長流でした。

清洲での軍議で指示を出さなかったのも、情報が今川に行くことを想定したからみたいです。

因みに、信長は義元を尊敬…というか参考にしてたみたいです。

義元のやったことを改良して尾張にも取り入れたり。

鉄砲使い始めたのは義元で、鉄砲の効率化を図ったのが信長…みたいな感じです。

だから、丁重に葬ったみたいです。

ひと昔前だと奇襲説が有力でしたが、最近は正面攻撃説が有力になってきたみたいです。

いずれにせよ、義元は宴やってましたから…。

信長は強かったんですねー！

義元左文字は現存します。

信長、秀吉、家康と皆様が手にした刀です。

因みに、熱田神宮には「草薙の剣」が保管されています。

戦を書くのは難しいなあ…。

五十二番槍 家臣のためなら身を削る（前書き）

クリスマスですね。

日本初のクリスマスパーティーは1552年の山口だそうです。

1552年といえばあの北条氏綱が寒川社を再興した年ですから、相当ですね（なんのこっちゃ）

五十二番槍 家臣のためなら身を削る

「行くぞ！わしに続け！」

今日も蒲生氏郷は軍の先頭に立ち、敵に突っ込んでいった。

1590年。

晴れて氏郷は42万石の大名となった。

「わしが大名かあ。なんだか嬉しいなあ。そうだ、家臣の給料も増やしてやらんとな！」

家臣をとて大切にする氏郷。

しかし、増やすと言っても、どこまで増やして良いかわからない。

そこで…。

「みんな聞いてくれ！自分の働きにいくら給料が相応しいか言うてみてくれ！」

家臣に希望額を聞いた。

「5000石！」

「7000石！」

「俺は1万石だ！」

全員に聞いて、それを集計した。

「うっ…。100万石超えちゃったよ…」

氏郷の治める領地は42万石。

足りない…。

「ここにそんな土地無いんだけどなあ…」

氏郷は苦笑した。

それでも氏郷は…。

「でも、可愛い家臣のためだ！いやでもこれだと…。しかし、こいつはわしの後ろに付いてきてくれたし…」

悩みに悩んだ末、氏郷は自らの給料を9万石にまで減らして家臣のために尽くしたのだった。

「氏郷様、どうしてそこまで我らのために尽くしてくれるのですか？」

一人の家臣が聞いた。

すると氏郷は笑って…。

「戦で軍の先頭に立って、わしに続けと命じる大将をどうして家臣が見捨てるだろうか、いや、見捨てない！」

そう言った。

自ら槍を持ち、戦場に先陣切って突っ込んで行く氏郷は、家臣たちから並々ならぬ信頼を受けていた。

五十二番槍 家臣のためなら身を削る（後書き）

氏郷優しいですね！

私も家臣になるなら氏郷だな！って思ったのですが、軍法見て考えが変わりました…。

因みに蒲生氏郷は、千利休の高弟七人集、利休七哲の一人です。

五十三番槍 柴田勝YEAH、散る（前書き）

晴美&乙葉

「由佳先生！誕生日おめでとunggございます！」

由佳

「ありがとうございます！晴美ちゃん！乙葉ちゃん！」

乙葉

「1日遅れたのは、別に作者さんが忘れてたとか、これ書き出したのが12時で間に合わなかったとか、そんなんじゃないですよ？」

晴美

「先生はいくつになっ たんですか？」

由佳

「25歳になりました！」

乙葉

「（磯野時空…）」

五十三番槍 柴田勝YEAH、散る

1583年4月21日深夜。

「かかれっ！」

賤ヶ岳の戦い。

柴田勝家と羽柴秀吉の戦いである。

ここで一人悩み続ける男がいた。

前田利家である。

「俺は柴田軍だ…。勝家は昔から仲が良いし、娘の麻阿まあがいる。しかし、秀吉も家族ぐるみの付き合いで昔から仲が良い。しかも娘の豪姫こうぎめが…。どうすれば…」

戦が始まった。

「我ら！賤ヶ岳の七本槍なり！」

七本槍の活躍もあり、勝家はどんどん不利になる。

結局、利家は動かなかった。

そして正午。

ついに勝家は敗走した。

「……勝家を、守れ……」

利家は勝家の敗走を手助けしたが…。

「いたぞ！柴田軍だ！討ち取れ！」

羽柴軍の追っ手がくると…。

「俺の仕事は終わった……」

羽柴軍に服従した。

敗走中、勝家は利家の家に寄った。

「……………」

何も話そうとしない利家に、勝家は話かけた。

「昔は楽しかったなあ。酒呑んでわいわい騒いで……。お前も苦労したもんなあ。浪人になっても諦めず……」

戦の話はしなかった。

ただただ昔話、思い出話を語った。

そして最後に付け加えた。

「麻阿は解放する。わしも全力で戦うからな！さらばだ！利家！」

そう言つて去つていった。

古くからの親友としての勝家は、これが最後となつた。

北ノ庄城に歸つた勝家だったが、息つく間もなく城を包囲された。

包囲した武将の中には利家もいた。

勝家は、80人の家臣と妻のお市を招集した。

「猿に負けたのは無念だけど、負けたのだからしかたない。明日、この世に別れを告げようぞ！」

そう言つて宴を催した。

「ははは！ 吞め吞め！」

わはははは！

その宴は、とても賑やかで華やかだった。

そして翌日。

「市、お前は逃げよ！ 秀吉のもとで生きよ！」

「嫌です！ あの猿のもとで生きるなら、死んだ方がマシです！ 私も死にます！」

市も勝家と運命を共にする決意をした。

「ただ、娘たちは…外へ…」

市と前の夫である浅井長政との間に生まれた三人の娘は城から出された。

「麻阿…お前もだ…！」

利家との約束通り、麻阿も城から出された。

そして、羽柴軍と一戦交えた後…。

「市…。すまぬ…！」

「勝家様…！」

勝家は市を刀で突いた。

そして…。

「夏の夜の 夢路儚き 跡の名を 雲居にあげよ 山ほととぎす」

短くて儚き夏の夜の夢。

それと同じように儚い人生を送ったわしの名をはるか遠くにいる誰かに伝えてくれ。

山ほととぎすよ…。

辞世の句を読んだ。

そして天守の窓辺に立ち、羽柴軍の方を向き大きく息を吸い叫んだ。

「我が死に様を後世に伝えよ！！」

そして勝家は十字に腹を割いて五臓六腑を掻き出すという、武士の最も名誉な切腹をして果てたのだった。

五十三番槍 柴田勝YEAH、散る（後書き）

切腹の正しいやり方。

まずお腹を横に切ります。

その後縦に下から上へと切ります。

中身出します。

全て出来ればあなたは武士として名誉です！

勝家はこれをやり遂げました。

スゴいですね…。

因みに、市は秀吉をまさに「死ぬ程」嫌っていたらしい…。

ホントに死んだ…。

利家だの勝家だのヤヤコシヤ…。

昨日12月26日は徳川家康の誕生日でした！

忘れてました…。

五十四番槍 大坂夏の陣の卑怯者（前書き）

夏の陣でとんでもないことをやらかした武將がいました。

誰もが知るあの人です。

五十四番槍 大坂夏の陣の卑怯者

1615年、大坂。

豊臣秀頼&淀君を討つべく、最後の戦が始まった。

大坂夏の陣である。

戦いが始まって1ヶ月。

「では、幸村殿。道明寺にて会いましょうぞ」

後藤又兵衛は、2800の兵を率いて大坂城を出た。

目的地は道明寺。

そこで真田幸村と合流する予定だった。

しかし、先に道明寺に到着した又兵衛を待っていたのは、幸村ではなく敵の伊達政宗だった。

まだ兵は揃っていない。

おまけに伊達軍は2万3000の大軍。

圧倒的不利。

それでも退けなかった。

「こんな我を召し抱えてくれた秀頼様のため！誰よりも早く敵に挑んで討ち死にするのが御恩を返すことになるんだぜ！」

又兵衛は攻撃を開始した…。

対する伊達軍はまず水野勝成みずのかつなりの3300の軍を繰り出す。

そして8時間の激戦の末…。

「行けー！射撃せよ！」

3000の鉄砲隊が射撃。

これにより又兵衛は討ち死にした。

伊達軍の働きは敵からも評価されたのだが…。

戦いが終わった後…。

「あのー家康さん。俺、あの伊達野郎に鉄砲撃たれたんですけど…」

そっけいのは、徳川軍の神保相茂じんぼすけしげ。

伊達政宗とは味方通しである。

今回の戦ではかなりの働きを見せて徳川の勝ちに貢献した。

相茂の報告を受けて、家康は政宗を呼びつけた。

「政宗え！何故味方に鉄砲を撃ち込んだ？目見えてんのか？あ、右目見えないか！」

家康が言った。

「いや、だって…それは…」

言い訳を考える政宗。

「だってじゃない！伊達だろ！」

「はい！伊達です。えっと、神保が又兵衛に負けて逃げようとしたから、士気が下がらないようにと…」

政宗必死の言い訳。

「ふん。まあいいわ。今回は許そう」

奇跡的な無罪判決。

「危ない危ない…。しかし神保め！貴様如きがこの独眼竜様より武功を上げるなど…！ふざけるなよ！」

政宗は神保が自分より武功をあげたことを妬んで射撃したのだった。

それ以来…。

「うわっ！伊達政宗だ…。キモーイ！味方に射撃するとかマジ最低…！」

「キヤー！卑怯者の伊達政宗よー！妬んで射撃した伊達政宗よー！」

「味方に射撃…。愚の骨頂だな。許されざる暴挙に出る竜だよ」

「眼帯似合わねー」

様々な武將から卑怯者として扱われることとなった。

五十四番槍 大坂夏の陣の卑怯者（後書き）

作者の政宗の嫌いっぷりがよく出た作品となりました（笑）

政宗は史実だとかそういう人です。

確かに戦は強いけど、人としてどうなの？って逸話が多いのです。

今回は大坂夏の陣での真田幸村の逸話でも。

幸村は好きですよ！

（政宗と幸村が続くからって、某ゲームを意識した訳ではないです。）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5665x/>

日の本のお殿様

2011年12月27日22時47分発行